六十里越街道でつながる
広域連携・交流促進プロジェクト

平成２１年度　調査報告書

平成２２年３月

財団法人　東北産業活性化センター

目　　次

1. 調査内容について　1

(1)目　的　1
(2)リーディング事業について　3
(3)これまでの取り組み経過　6
(4)「六十里越街道広域連携・交流促進プロジェクト」検討委員会・戦略PT名簿　7

2. 六十里越街道地域交流促進プロモーションにおけるリーディング事業の取り組み結果報告　8

(1)(仮)六十里越街道地域連絡会議の設置　9
(2)広域連携フォーラムの開催　15
(3)広域連携講座の開設　61
(4)モデルツアー(ファムトリップ)の実施・検証　73
(5)広域連携祭の開催　79

【参考資料】
プロジェクトに関する新聞記事等　83

1．調査内容について

(1) 目　的

「六十里越街道」は、山形県の中央部を横断する歴史的な街道であり、山形市、中山町、寒河江市、西川町、鶴岡市の３市２町によって共有されている。しかし、近年、自動車の普及などにより線形の改良が進み、国道の改良や高速道路の整備にともない、山岳部間は古道となって道路としての機能は薄れ、地域の結びつきは希薄になっていた。

こうしたなか、六十里越街道筋の関係者などにより街道を再認識するとともに、地域間の連携を深めようとの気運が高まり、古道ルートの調査、発掘、整備、活用の取り組みが進められてきた。

とりわけ鶴岡市や西川町が中心となって、連絡会議が設置され、広域的な視点で街道の復元や街道をテーマにした活動を行っていたが、その内容は限定的で山形市から鶴岡市まで一体となった地域づくりを進めることが課題となっている。

近年、各地では、地域づくりを進めるうえで、市町村間の連携や広域連携についての意義、必要性に対する理解が進み、さまざまな取り組みが行われている。しかし、現状をみると、過去に定められた地域区分の発想から抜けきれず、また、地域間には温度差もあって、本格的な連携にまで至っていないのが現状である。

こうしたことから、地元３市２町が主体となって「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」の調査・検討が開始された。

本調査は、平成２０、２１年度の２年にわたり「六十里越街道」の価値の再認識と地域連携をテーマとして調査・検討を行い、連携を促進するための事業を実施したものである。

○ 平成２０年度においては、以下の調査・検討を行った。

1．「六十里越街道」の現状の把握
2．地域に賦存する地域資源の把握と整理
3．方策検討のための課題の把握と整理

○ 平成２１年度においては、「六十里越街道」を共有する沿道関係者が合意形成や連携できる組織の在り方、また、今後の活動指針、具体的なアクションプラン（次頁参照）を立案するとともに、一部の事業については沿道住民の街道文化価値の再認識と交流の活性化、さらに、域外からの交流人口拡大による産業振興、地域活性化の観点から〝リーディング事業〟として先行して実施することとした。

「六十里越街道」広域連携・交流促進プロジェクト（アクションプラン）

主要メニュー	指針	具体的内容（案）	実施主体・要請先	時期（年度）
1. 広域連携組織の整備	・六十里越街道地域の合意形成やアクション等を主体的に実施する広域連携組織を整備する。	①「(仮) 六十里越街道地域連絡準備会議」の設置 ―【リーディング事業】	3市2町	H21
		②連携事業推進組織「(仮) 六十里越街道地域連絡会議」の設立	3市2町	H22
		③定期的情報交換、新たな連携事業の検討等	3市2町(上記連絡会議)	H22以降
		④オブザーバー協力要請	3市2町(上記連絡会議)	H22以降
2. 意識啓発・ホスピタリティの向上	・本地域内の交流資源や強みを再認識し、交流促進に対する地域住民の意識啓発を図る。	①広域連携フォーラムの開催 ―【リーディング事業】	3市2町	H21
		②広域連携講座の開設 ―【リーディング事業】	3市2町(東北芸工大と連携)	H21
		③沿線住民が街道を歩き、親しむ機会の設定	3市2町	H21
		④歴史文化学習講座等の相互開放	3市2町	H22以降
		⑤自治体広報紙への共同記事掲載（H21はﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ事業実施状況）	3市2町	H21
		⑥地域内各学校行事における元服登山の復活呼びかけ	3市2町	H22以降
3. 受入体制の整備	・滞在プログラムを案内したり、体験をサポートする人材を育成していく。	①ガイド・ボランティアガイド・先達等の育成 相互視察研修の実施	各観光協会、各ガイド協会等	H21
		②案内所窓口のスタッフ、行政窓口の担当者の情報共有、相互視察研修の実施	3市2町、各観光協会等	H22以降
		③NPOまちづくり団体や歴史文化団体の情報交換会議の開催	3市2町	H22以降
		④滞在プログラムを支えるインストラクターの養成	3市2町、旅行エージェント	H22以降
4. 情報発信	・交流資源情報の共有化を図り、案内機能・情報発信機能を充実していく。	①3市2町の観光案内所への各市町の観光パンフレット、ガイドブックの常備、情報提供	3市2町、各観光協会等	H21
		②観光情報を提供する各市町あるいは観光協会のホームページの相互リンク	3市2町、各観光協会等	H21
		③現在行われている祭り・イベント時における3市2町のPRコーナーやブースの設置	3市2町、各観光協会等	H21
		④道の駅等活用による六十里越街道インフォメーションセンター機能設置	3市2町、各観光協会等	H22以降
		⑤各市町が行っているキャンペーン時における他連携市町の観光パンフレットの携帯	3市2町、各観光協会等	H21
		⑥街道合同パンフレット、共通ＨＰの作成	3市2町、各観光協会等	H22以降
		⑦地域内各駅、ＳＡ、ＰＡ、バス停等への街道合同パンフレットの設置	JR東日本、NEXCO、ヤマコー	H22以降
		⑧他地域における合同キャンペーンの実施	3市2町、各観光協会等	H22以降
		⑨グリーンツーリズム、ブルーツーリズム受入宿泊業者の情報交換・交流会の実施	各観光協会、宿泊業組合等	H22以降
		⑩伝統行事、名物料理等のPR・情報発信	3市2町、各観光協会等	H21
		⑪各イベントへの「六十里越街道」冠化	3市2町、各観光協会等	H21
5. 滞在能力向上による滞在促進	・沿道住民の連携強化を図りつつ、滞在能力の向上に資する施策を推進していく。 ・滞在促進による仙台圏等のふるさとづくりを目指し、滞在型の旅行商品を開発していく。	①モデルツアーの実施・検証 ―【リーディング事業】	旅行エージェント	H21
		②旅行エージェントへの商品造成の要請（連泊プラン）	3市2町、各観光協会、旅行エージェント	H21
		③広域連携祭の開催(六十里越街道まつり等) ―【リーディング事業】	3市2町、各観光協会等	H21
		④各種体験プログラムのオプショナル商品化（旅館の魅力づくり）	各観光協会、宿泊業組合等	H21※一部
		⑤高速道路を活用したドラ割商品造成等、NEXCO東日本に対する要請活動の実施	3市2町、各観光協会、NEXCO	H21
		⑥利便性の高い交通機関の連携（乗り降りフリーバス、乗り捨てレンタカー等）	JR東日本、ヤマコー、レンタカー	H22以降
		⑦運転手のガイド化等による魅力的なタクシー運行	タクシー会社	H22以降
		⑧歩く機能整備のための課題把握 ※【リーディング事業】である広域連携講座とのリンク	3市2町、各観光協会等	H21
		⑨歩く機能整備（誘導表示、案内看板、茶屋等）	3市2町	H22以降
		⑩街道歩きリーディングイベントの実施（「茶屋」味めぐりラリー等）	3市2町、各観光協会等	H22以降

※「時期」は、取り組みを行う時期であり、継続が必要と判断したものは継続していく。

※アミが掛かっている事業は、優先度の高い事業としてリーディング事業と位置づけ、Ｈ２１年度に実施した。

(2) リーディング事業について

今年度に立案したアクションプランでは、以下の５つのジャンルに分類し、３５にのぼる事業メニューを採り上げた。

① 広域連携組織の整備
② 意識啓発・ホスピタリティの向上、
③ 受入体制の整備
④ 情報発信
⑤ 滞在能力の向上による滞在促進

以上、３５の事業メニューの中で、下記の５つの事業については、特に、**優先すべき事業＝リーディング事業**として位置づけ、平成２１年度に先行して実施した。

①（仮）六十里越街道地域連絡準備会議の設置

新年度に地域が主体となり本格的に連携施策を進めるための受け皿として行政のみならず、民間、ＮＰＯ、地域づくりを行う個人等からなる連絡会議の設置をめざす。しかし、現在、鶴岡市を除く２市２町を含めた７市７町が、観光庁が進める「観光圏整備事業」の地域認定に向け申請を行っており、本申請の中で３本柱の一つとして「精神文化圏の形成」を掲げており、本プロジェクトはこの考え方に合致すると見られるため、観光圏として認定を受けた場合、その枠組みの中で対応していくことを視野に置いている。

②「広域連携フォーラム」の開催

広域連携による交流促進の意義や展開の必要性を、地域内の住民に広く啓発し、域内外へ広域連携の重要性を周知することを目的として、広域連携フォーラムを開催する。

今年度は、平成２２年２月７日、山形市内において、国土交通省東北運輸局長　木場宣行氏、山形県知事　吉村美栄子氏をお招きし、本プロジェクトの活動報告、プロジェクト委員長の株式会社ジェイティビー常務取締役の清水愼一氏による基調講演「広域連携の必然性～六十里越街道を活かした地域づくりとは」、そして、沿線自治体首長の出席のもと「沿線自治体首長が語る六十里越街道への期待と役割」のテーマでトークセッションが行われた。最後に、沿線自治体首長による六十里越街道広域連携・交流促進「協働宣言」が読み上げられ、広域連携による地域づくりの合意形成が図られ、新たなスタ

ートを切ることとなった。
なお、当日は、県内外から２００名を超える参加者があった。

③広域連携講座の開設

地域住民、自治体、民間事業者等に対し、広域連携による交流促進の必要性を啓発することを目的として広域連携講座を開設する。
今年度は、９月２１日～２６日に東北芸術工科大学文化財保存修復センターの「六十里越街道を歩く」調査事業と連携して、全行程を歩くとともに連夜にわたって夜学を開催した。
なお、参加者は、次のとおりであった。

期　日	街道歩き（名）	夜　学（名）
９月２１日	３４	３０
２２日	３９	３２
２３日	４１	３１
２４日	２４	２９
２５日	１８	３６
２６日	４０	―
計	１９６	１５８

④モデルツアー（ファムトリップ）の実施・検証

ふるさとづくり志向や教育的効果を加味して、首都圏や仙台圏域等からの誘客による交流型のニューツーリズムに視点をおいたモニターツアーを実施し、商品企画についての可能性を検討する。
今年度は、１０月２６日～２８日（２泊３日）に、山形市～中山町～寒河江市～西川町～鶴岡市の行程で、ＪＲ、大手エージェントの参加を得て、ファムトリップ（専門家による旅行商品企画可能性調査）を実施した。
参加者からは、「興味深く、すばらしい場所であり、六十里越街道沿線地域の魅力を十分に理解できた」との評価をいただいた。今後は、さらに連携を深め、魅力的なコースづくり、情報発信につとめることとしたい。

⑤広域連携祭の開催

地域間の連携を強化し、六十里越街道に対する理解を深めるとともに、価値観を共有し、域内外へＰＲすることを目的として、広域連携祭を実施した。

今年度は、２月７日に開催した「広域連携フォーラム」に合わせ、沿線の経済の活性化につながるきっかけづくりのために、共通資源である酒（ＳＡＫＥ）と地域色豊かな肴を組み合わせ、「六十里ＳＡＫＥ街道」として演出し実施した。

(3) これまでの取り組み経過

【平成２０年度】

■平成２０年

・８月～　　：「六十里越街道広域連携・交流促進」準備委員会設置に向けて各自治体間の調整作業

・１２月　１日：(財)東北産業活性化センター会長に「六十里越街道広域連携・交流促進」準備委員会（委員長・近松西川町長）として調査支援を申請

・１２月１９日：設立準備会議（西川町役場）

■平成２１年

・　１月２７日：第１回事務局会議（中山町中央公民館）

・　２月　５日：第１回委員会（山形市香味庵まるはち）

・　３月１６日：第２回事務局会議（村山総合支庁）

・　３月２３日：第１回戦略ＰＴ会議（寒河江市ホテルシンフォニーアネックス）

【平成２１年度】

■平成２１年

・　４月３０日：第３回事務局会議（山形市役所）

・　６月　５日：第２回戦略ＰＴ会議（西川町役場）

・　６月１７日：第２回委員会（鶴岡市アートフォーラム）

・　７月２１日：第１回「モデルツアー及び広域連携祭」企画会議兼第４回事務局会議（西川町役場）

・　８月２０日：第２回「モデルツアー及び広域連携祭」企画会議兼第５回事務局会議（フローラさがえ）

・　９月　４日：第３回「モデルツアー及び広域連携祭」企画会議兼第６回事務局会議（フローラさがえ）

・　９月２１日～２６日：広域連携講座の開設
（東北芸術工科大学「六十里越街道を行く」との連携）

・１０月２２日：第４回「モデルツアー及び広域連携祭」企画会議兼第７回事務局会議（フローラさがえ）

・１０月２６日～２８日：モデルツアー（ファムトリップ）の実施・検証

・１１月　４日：第８回事務局会議（西川町役場）

・１１月１２日：第８回事務局会議（西川町役場）

・１１月１２日：清水委員長による特別研修会（仙台市セントレ東北ビル）

・１２月２１日：第３回戦略ＰＴ会議（中山町中央公民館）

■平成２２年

・　１月　８日：広域連携祭（六十里越ＳＡＫＥ街道）に関する意見交換会（西川町役場）

・　１月２５日：第９回事務局会議（中山町中央公民館）

・　２月　７日：広域連携フォーラムの開催（山形市総合福祉センター）

・　　広域連携祭の開催（同上）

・　３月　８日：第１０回事務局会議（フローラさがえ）

(4)「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」検討委員会・戦略ＰＴ名簿

【委員会】（７名）　　（順不同・敬称略）

	氏　　名	所　　属
委員長	清　水　愼　一	株式会社ジェイティービー　常務取締役
委　員	伊　藤　眞知子	東北公益文科大学　副学長
〃	張　　大　石	東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 准教授
〃	渋　谷　雄　司	株式会社山形新聞社　専務取締役
〃	新　関　芳　則	株式会社丸八やたら漬　代表取締役副社長
〃	宇　生　雅　明	庄内映画村株式会社　代表取締役社長
〃	中　村　　稔	山形県　文化環境部長

【戦略ＰＴ】（１１名）

	氏　　名	所　　属
メンバー	豊　島　　靖	東日本高速道路株式会社(ＮＥＸＣＯ東日本)東北支社 山形管理事務所長
〃	阿　部　昌　孝	株式会社ＪＴＢ東北　交流文化事業部 地域交流ビジネス推進部長
〃	高　橋　浩　三	社団法人山形市観光協会　常務理事
〃	小　関　祐　二	アルゴディア研究会　会長
〃	児　玉　　崇	寒河江温泉協同組合　事務局長
〃	柏　倉　健　一	ＮＰＯ法人柏倉家文化村　代表理事
〃	志　田　靖　彦	六十里越街道保存推進委員会 委員長
〃	安　達　正　司	山形県　総務部総合政策室長
〃	阿　部　愼　一	山形県村山総合支庁　総務企画部長
〃	齋　藤　　豊	山形県庄内総合支庁　総務企画部長

【事務局】

田　苗　　守　　山形市　商工観光部観光物産課 課長
安　達　喜代美　　鶴岡市　企画部地域振興課 課長
工　藤　恒　雄　　寒河江市　商工観光課 課長
森　谷　憲　一　　中山町　総務企画課 課長
高　橋　勇　吉　　西川町　総務企画課 課長
志　賀　秀　一　　株式会社東北地域環境研究室　代表
星　　幸　一　　財団法人東北産業活性化センター　プロジェクト振興部長

２．六十里越街道地域交流促進プロモーションにおける
リーディング事業の取り組み結果報告

(1) （仮）六十里越街道地域連絡会議の設置

□設立目的

山形県内陸部と庄内地域を結ぶ古道「六十里越街道」は、出羽三山への信仰の道、戦国戦乱の軍路、庄内と内陸の物流交易の道として多面的な役割を持ち、現在の山形市から鶴岡市を結び、山形県を横断する中核的な道路であった。
しかし、時代の変遷とともに街道としての機能は薄れ、街道による地域の結びつきは希薄になってきた。

こうした中、近年、六十里越街道筋の関係者などにより街道を再認識するとともに地域間の連携を深めようとの機運が高まり、古道ルートの調査・発掘・保存整備・活用の取り組みが精力的に進められている。しかし、その活動は限定的で、今後は、山形市から鶴岡市まで、六十里越街道を有する地域が一体となった地域づくりを進めることが大きな課題となっており、新たな地域づくりの方策として広域連携の必要性が強く求められている。

このようなことから、平成２０年１２月に立ち上げた当準備委員会が「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」を設置し、その一環として本年２月７日に開催した「広域連携フォーラム」において確認された３市２町の首長による『協働宣言』の内容実現のため、今後も歴史的な街道でつながっている沿線自治体の連携を強化し、沿線地域の更なる魅力向上と将来に向けた多様な連携の可能性を探る足がかりとすることを目的に、山形県をはじめとする関係各位の特段のご支援を賜りながら山形市、中山町、寒河江市、西川町、鶴岡市の３市２町並びに賛同会員で構成する広域連携組織「六十里越街道地域連絡会議」を設立するものである。

なお、現段階で想定される事業内容は以下のとおりである。
○観光広域連携シンポジュウム兼「とうほく街道会議」の開催
○観光広域連携講座の開催
○ガイド養成講習会の開催
○ＨＰリンク加工
○旅行エージェント懇談会の開催

□六十里越街道地域連絡会議規約（案）

（名称）

第１条　この会の名称を「六十里越街道地域連絡会議」とする。（以下「六十里会議」という。）

（目的）

第２条　六十里会議は、村山と庄内を結ぶ文化的資源「六十里越街道」を広域連携により整備保存・活用し、沿線３市２町自治体の活性化に資することを目的とする。

（事業）

第３条　六十里会議は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

（１）「六十里越街道」の PR 及び各種広域連携・交流促進プロジェクトの実施

（２）その他必要と認める事業

（組織）

第４条　六十里会議は、山形市、鶴岡市、寒河江市、西川町、中山町及びこの会の目的に賛同する者をもって構成する。

（役員等）

第５条　六十里会議に次の役員を置く。

（１）会長（１名）

（２）副会長（１名）

（３）監事（２名）

２　役員は、総会において選任する。

３　前項の役員の任期は、２年とする。ただし、再任を妨げない。

４　総会の同意を得、必要に応じ顧問を置くことができる。

（役員の任務）

第６条　会長は六十里会議を代表し、会務を統括する。

２　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。

３　監事は、会計を監査する。

（会議）

第７条　六十里会議の会議は、総会及び連絡会議とし、会長が招集し、議長となる。

２　連絡会議は必要に応じ開催し、事業を実施するために必要な事項について審議決定する。

（事務局）

第８条　六十里会議の事務及び会計を処理するため、事務局を会長の所属自治体に置く。

（経費）

第９条　六十里会議の経費は、会費、負担金・補助金及びその他の収入をもって充てる。

（事業及び会計年度）

第 10 条　六十里会議の事業及び会計年度は、毎年４月１日に始まり翌年３月 31 日に終わる。

（補則）

第 11 条　この規約に定めるもののほか、六十里会議の運営に関し必要な事項は会長が別に定める。

附則

この規約は、設立総会の日から施行する。

□平成２２年度会員及び役員名簿（案）

所　属	代表者氏名	住　所	TEL	担当課等	備　　考
山形市	市長 市川 昭男	〒990-8540 山形市旅篭町 2-3-25	023-624-8899	観光物産課	
鶴岡市	市長 榎本 政規	〒997-8601 鶴岡市馬場町 9-25	0235-25-2111	地域振興課 観光物産課	
		〒997-0492 鶴岡市下名川字落合 1	0235-53-2111	朝日庁舎 商工観光課	
寒河江市	市長 佐藤 洋樹	〒991-8601 寒河江市中央 1-9-45	0237-86-2111	商工観光課	
中山町	町長 大津 保信	〒990-0492 中山町大字長崎 120	023-662-2111	総務企画課	
西川町	町長 近松 捷一	〒990-0792 西川町大字海味 510	0237-74-2111	総務企画課 商工観光課	
山形県	村山総合支庁長	〒990-2492 山形市鉄砲町 2-19-68	023-621-8288	地域支援課	
		〒991-8501 寒河江市西根字石川西 355	0237-86-8700	道路計画課 建設総務課	
	庄内総合支庁長	〒997-1392 三川町横山字袖東 19-1	0235-66-2111	地域支援課 建設総務課	
各観光協会					
各商工会					
各ＪＡ					
賛同会員	民間事業者				
賛同会員	民間事業者				

□平成２２年度事業計画（案）

（基本方針）

平成２１年度に策定、実施してきた「六十里越街道広域連携・交流促進プロジェクト（アクションプラン）」の実現及び継続発展に努め、沿線３市２町自治体の活性化に資する。

１．会　議

１）設立総会・・・・・平成２２年度当初予定

２）連絡会議・・・・・必要に応じて開催（年間４～６回）

２．事　業・・・それぞれ各自治体の担当制で実施する。

１）観光広域連携シンポジュウム兼「とうほく街道会議」の開催

・開催時期：１０月下旬～１１月上旬

・開催内容・場所等：別紙を基本に、連絡会議で詳細を決定し実施。

２）観光広域連携講座の開催

・東北芸術工科大学の事業と共催で実施・・・・９月

・内容は、連絡会議で詳細を決定し実施。

３）ガイド養成講習会の開催

・広く受講生を募集し、六十里越街道のガイド、ボランティアガイド、先達等の育成する講習会・研修会を開催・・・７月

・内容は、連絡会議で詳細を決定し実施。

４）ＨＰリンク加工

・観光情報を提供する各市町あるいは観光協会等のホームページのリンク加工を行い、情報の共有と一元化を図る。・・・随時

・３市２町の観光案内所への各市町村のパンフ等常備、情報提供の実施

５）旅行エージェント懇談会の開催

・六十里越街道の商品化の実現に向けて、旅行エージェントとの懇談会を開催

・　内容は、連絡会議で詳細を決定し実施。・・・１０月

(2) 広域連携フォーラムの開催

2/7 日曜

六十里越街道 広域連携フォーラム ●13:30～16:30

1.開会セレモニー ●13:30～13:45

①開会
②主催者あいさつ
③来賓あいさつ　・国土交通省東北運輸局長　木場　宣行 氏
　・山　形　県　知　事　吉村美栄子 氏

2.活動報告 ●13:45～14:25

①広域連携講座（9／21～26 東北芸工大「六十里越街道を行く」調査事業との連携）報告
　東北芸術工科大学・文化財保存修復研究センター　准教授　張　大石 氏
②その他リーディング事業（モニターツアー、広域連携祭等）の報告：事務局

3.基調講演 ●14:25～15:05

【演 題】「広域連携の必然性～六十里越街道を活かした地域づくりとは」
【講 師】六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト委員長
　株式会社ジェイティービー　常務取締役　清水愼一 氏

休　憩 ●15:05～15:15

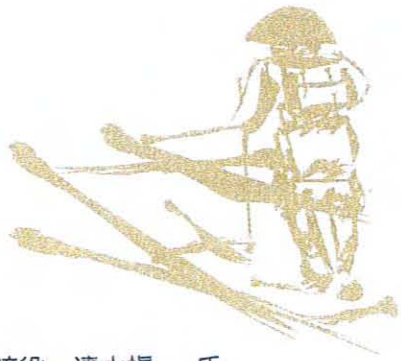
4.トークセッション ●15:15～16:25

テーマ

「沿線自治体首長が語る六十里越街道への期待と役割」

パネリスト

各自治体首長５名
　市川昭男山形市長
　榎本政規鶴岡市長
　佐藤洋樹寒河江市長
　大津保信中山町長
　近松捷一西川町長



コーディネーター

株式会社ジェイティービー　常務取締役　清水愼一 氏

5.閉会セレモニー ●16:25～16:30

①協働宣言　②閉会

【司会】

ただ今から六十里越街道広域連携フォーラムを始めさせていただきます。本日司会を担当いたします山形市観光物産課の鈴木と申します。皆様どうぞ宜しくお願いいたします。

それでは、主催者を代表いたしまして、六十里越街道広域連携交流促進準備委員会の委員長の近松捷一西川町長よりご挨拶を申し上げます。

【近松西川町長】

皆さん、こんにちは。節分・立春と共に訪れた今期最大の寒波も、やっと落ち着きました。峠を越したと申し上げてよろしいかと思います。本日は六十里越街道広域フォーラムにご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。山形市、中山町、寒河江市、西川町、鶴岡市の六十里越街道沿線自治体、３市２町を代表してご挨拶を申し上げます。本日のこの会場には、六十里越街道沿線の関係者、住民の方のみならず、ご指導・ご支援をいただいている、国土交通省や山形県からもたくさんの方々にお集まりいただいております。この六十里越街道の営みが、まさに街道続きとして活動の場が広がっていることは大変喜ばしいことであり、改めて皆様にお礼を申し上げる次第でございます。また、本日は、年度末を控えまして大変ご多用の中、東北運輸局長木場様、山形県知事吉村様にもご来賓として出席をいただきますとともに、株式会社ジェイティービー常務清水様、東北芸術工科大学の張先生には、お忙しいところ快く講師をお引き受けいただきましたことに対しましても、心からお礼を申し上げます。

これまで、鶴岡市朝日地域と、西川町が、広域連携の名のもとに、山岳信仰の聖地、出羽三山への参詣道であった六十里越街道の復興整備及び利活用事業に取り組んで参りました。しかしながら、この街道は、大きく捉えると、山形城から鶴岡城までの区間を指すと言われており、これまでのひとつの市の一地域、ひとつの町の連携だけでは、おのずと限界がございました。そこで、何とか沿線の自治体がそろって手を結ぶことができないものかと思案しておりましたところ、財団法人東北産業活性化センター様のご支援をいただくこととなり、街道沿線３市２町が六十里越街道広域連携交流促進準備委員会を組織

し、本格的な広域連携と施策の具体化についての可能性調査を行うことになったのが一昨年の１２月でした。そこで、調査を推進するために設置されたのが「六十里越街道につながる広域連携・交流促進プロジェクト」でございます。当時、鶴岡市朝日地域との広域連携会議の事務局をつとめていたのが西川町であったことから、本日この壇上に上がらせていただいております。この場をお借りいたしまして、改めて、財団法人東北産業活性化センター様、並びにプロジェクト委員会、及び戦略プロジェクトメンバーの方々にお礼を申し上げたいと存じます。

さて、皆さんも、今年元旦の山形新聞をご覧になったかと思いますが、第一面に、日本を、そして日本人の心を最もよく理解し、日本人に最も尊敬されていらっしゃるアメリカ人であるライシャワー元駐日大使の、山形の地に対する想いが載っておりました。紹介させていただきますと、タイトルは、「もうひとつの日本に光」でございます。「雄大な山と川、恵み多き豊かな自然、この自然と絶妙なバランスを保ちながら、口は重いが根は明るい、都会では見られない人なつこさをもって暮らす人々、人を惹きつけ輝きを放つ力、山形の大地には、古き良き日本が脈々と受け継がれている。昔のままの大地でありながら、人と自然との調和を損なわず、発展する可能性を期待させるもう一つの日本、未来像、理想像がある。豊かな自然との調和、山形はこれから人が生きるうえで求められ、夢に描かれる理想像である。」とございます。

山形県の中央に位置する六十里越街道広域連携の取り組みは、山形県そのものを掘り起こすことであり、現在、観光庁が推進する観光圏の形成が進む庄内と置賜地方とつながり、更には宮城県、秋田県、新潟県とも結ばれ、その広がりはゆるぎないものとなることを確信しております。折しも、先週４日に、村山地域７市７町も観光圏の認定に向けて、推進協議会を設立いたしました。申請する整備計画の柱は、「健康温泉保養地づくりのネットワーク」、「精神文化圏の形成」、「二十四節気の食」ですが、このプロジェクトの取り組みは、「精神文化圏の形成」の中に位置づけられるものです。観光圏認定に先んじて進めておりますこのプロジェクトは、認定されようとされまいと、どうしても進めなければならないものであると意を強くしているところでございます。この街道には、多くの遺産、資源が埋もれています。ご臨席の先生方のご指導をいただきながら、本日の歴史や文化史における位置づけを検証していただき、その価値を認識すると共に、後世に引き継ぐ努力をしていかなければならないと思います。古来から、出羽三山詣では、死と再生を追体験することが中心価値と言われております。このことは、日常の生活で心身ともに疲れきった人々へ、癒しと活力を与え、人間再生をもたらすという、誇れる価値観になると思っております。古来から伝わる歴史、文化を守りつつ、その価値観を現代に活かしてい

くというのが私たちにとっても必要な作業であり、この街道の沿線地域の活性化のためには欠かせない取り組みと考えております。私たちが取り組もうとしていることは、出羽三山のもつ精神文化をもう一度見直そうという流れであり、地元のみならず、山形県、ひいては東北全体の価値観の見直し、胎動だと感じております。これは、まさに「出羽三山文化ルネッサンス」と言えます。この動きを、街道沿線の私どものまちづくり・地域づくりに活かしていくと共に、その名にふさわしい生活文化の振興を図っていく必要がございます。本日のこのフォーラムが、地域づくり、更には山形県の郷土づくりの活動の布石として、また、沿線の関係者の絆をますます結びつけるうえで有意義なものになりますようご祈念を申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日は誠にご苦労様です。ありがとうございます。

【司会】

続きまして、本日お忙しい中お越しいただきました、ご来賓の皆様からご挨拶をいただきます。はじめに、国土交通省東北運輸局長木場宣行様よりご挨拶を頂戴いたします。木場様宜しくお願いいたします。

【東北運輸局長　木場宣行様】

ただ今ご紹介いただきました、東北運輸局長の木場でございます。

本日は、映画、大河ドラマなど、日本全国、世界から脚光を浴びておりますこの山形の六十里越街道をテーマにした広域連携フォーラムにお招きをいただきまして本当にありがとうございます。また、六十里越街道交流促進委員会準備委員会の委員長であります近松西川町長様や吉村山形県知事様をはじめ、本日お集まりの皆様には、交通・観光関係等、国土交通行政に対しまして、日頃より格別のご理解とご支援を賜っており、この席をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

さて、一昨年のリーマンショックに始まります国際的な金融危機、また、新型インフルエンザの影響などによりまして、観光を取り巻く環境は非常に厳し

いものがございますが、現在、観光庁を中心といたしまして、観光立国の実現に向け、国内外で様々な観光振興策を講じております。こういった振興策を通じまして、交流人口の拡大を図り、これによって、地域の活性化を進めていこうとしておるところでございます。この、観光立国の推進は、国土交通省のみならず、政府全体での新成長戦略の中でも、極めて重要な成長分野のひとつと位置づけて対応しておるところでございます。この度の、六十里越街道広域連携・交流促進プロジェクトにおける皆様方の取り組みは、まさに、観光立国の基本理念でございます「住んで良し、訪れて良しのまちづくり」を実践するものと高く評価いたしますと共に、心よりその活動に敬意を表するところでございます。六十里越街道は、古来、出羽三山の山岳信仰の道に端を発し、その後、戦国戦乱時代の軍路、また、庄内と内陸の物流交易の道という多面的な性格をもった道でありまして、古くは奈良、平安時代から利用され、その街道沿いには宿場をはじめ人・物・情報が結びついた道とお聞きしております。特に、出羽三山参りは、西のお伊勢参りに匹敵するぐらいの賑わいがあり、まさに山形の中央を横断する中核的な道であったとお聞きしております。しかしながら、近年の自動車交通の普及等によりまして、街道としての機能は薄れ、山岳部間は古道となり、街道による地域の結びつきは希薄になってまいりました。この度、六十里越街道という歴史的街道でつながった３市２町が、改めてその存在価値や資源価値を見直すと共に、沿線地域の活性化を進める一環として、本日フォーラムが開催されますことは、地域の活力、また、連携の強化に大いに貢献するものと考えております。この度のフォーラムを契機といたしまして、地域の皆様が共通認識を高め、連携した取り組みを進められて、六十里越街道の名が、東北、全国、海外にまで知れ渡り、また、非常に厳しい経済情勢、また、観光におきまして、まさに再生の山である出羽三山にあやかって、力強く再生の道を歩むことを期待しているところでございます。

本日、このフォーラムを機に、皆様の連携がますます深まり、更に、観光振興、地域振興につながることを大いに期待申し上げているところでございますので、今後とも宜しくお願いしたいと思います。本日のフォーラムが盛会裏に終了いたしますことを心より祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はお招きをいただきどうもありがとうございました。

【司会】

木場様、ありがとうございました。続きまして、山形県知事、吉村美栄子様よりご挨拶を頂戴いたします。吉村様、宜しくお願い致します。

【山形県知事　吉村美栄子様】

皆様、こんにちは。県知事の吉村でございます。本日はお招きいただきまして、誠にありがとうございます。実は、「出羽の古道」というこの素敵な冊子がありまして、こちらを開いたときに、「古代から現代へ、出羽の古道は人々の思いを運ぶ」とありますが、本当に、この古代から現代も、そして現代から未来へも運ばなければならないと思っているところでございます。

さて、六十里越街道という名前はずっと知っておりましたが、高速道路を使うと便利なため、なかなか行く機会がありませんでした。しかし、以前、私は家族や友人と、あちこち観光をして楽しんでおりまして、出羽三山の羽黒山・湯殿山・月山は全部行ったことがございます。それから、西川町の岩根沢というところがございますけれども、知人から「是非行ったほうがいいよ」と勧められて、三山神社を訪ねたことがございます。三山神社の中に、大きな柱があり、それを見せていただきましたが、実は月曜日にぶつかっておりましたので、その日は説明などはしていただけませんでした。しかし、その日はちょうど、その三山神社から更に石段を登って更に上のほうにある要害神社に行ったところ、そこの村の方々のお祭りが行われていました。地元の方から「是非寄っていってけらっしゃい」と言われて、両親と私と三人で見させていただきました。すると、神楽が始まり、いろんな方々が集まってきました。私本当に感心しましたのは、その中では村のお役に就いている方々と子どもたちをきちんと座らせて、そして神様を呼んだときにきちんとお迎えするということをやっていました。村のお祭りという行事の中で、子どもの頃から昔から伝わった文化というものを理屈なしに伝えているのです。そして、途中で９１歳のおばあちゃんが大変な思いをして登ってきたのですが、そのおばあちゃんを迎えた村人たちが、「おばあちゃん、大変だろう。座れ座れ」と座らせました。おばあちゃんは「おれはいいんだ、いいんだ」と遠慮していましたが、みんなから勧められて座りました。ですから、子どもやお年寄りは座らせて、４０代、５０代の方は立って見ているのです。それも、私は、一つの社会のあり方であり、生きた生活の知恵であり、人間社会の望ましい姿というのを、ひとつのお祭りの中でずっと伝承してるのだと感心したものです。都会から帰ってきた若者が背広をきちんと着てそのお祭りに来ていたり、その地域の学校の女性の教頭先生も招かれていたり、また、突然

行った私たち三人を温かく迎えてくださり、更にお赤飯までご馳走になったり、本当に温かい地域だなと思いました。そのようないろいろな伝統的なことが、六十里越街道にはたくさんあるのだと思います。ですから、形のあるなしにかかわらず伝えられてきたものがあり、それが私は山形の宝だと申し上げておりまして、そこをしっかり伝え、大事にしていくこと、それも県政の大事な役割だと考えております。

現在、山形県長期総合計画を策定中でございます。基本目標は、『緑と心が奏で合い、ひとりひとりが輝く山形』という文言です。緑はもちろん自然でございます。心というのは、私たちの心だけでなく、その昔から先人から伝わっている心、山形に残っている文化的なもの、精神文化も全部含まれた心でございます。これは、自然と精神とが豊かに奏で合い、そして一人ひとりが輝く山形県を創っていきたい、というものでございます。

先ほど、運輸局長さんのお話にもありましたように、国だけではなく、山形県を取り巻く環境というものも大変厳しいものがございます。経済は低迷しておりますし、また、医療福祉などの不安もございます。人口減少、過疎化も進んでおります。しかし、こうした大変なときにこそ、県民みんなで助け合って、知恵を出し合って、これを乗り切って、これからの大事な山形というものを創っていかなければならないと思うのです。

本日のこのフォーラムは、昔からの山形県の宝と、みんなで大事にしてきたものを掘り起こし、磨き上げて、ずっと将来につないでいくという意味で、本当に大事なものと言えます。お伺いしたところ、これからいろいろな事業に取り組まれるということですので、私も皆さんと一緒に頑張っていきたいと考えております。

地域にとって、広域連携は本当に大事です。観光立国という言葉がございますが、山形県も、地域の資源がたくさんございますので、それを活かし、観光立県ということで推し進めていきたいと思っているところでございますが、これはもう、個人だけとか、一つの町とかだけでなく、やはり、みんなで、広域連携でやっていくということが大切なのです。今年の職員訓示では、「一歩前へ」、そして「連携」、この二つをキーワードに頑張りましょうと話をしましたが、自治体間における広域連携も本当に大切な取り組みなのです。これからの元気な山形県を創るために、しっかり一緒に頑張っていきましょう。

最後になりましたが、これまで準備を進めてこられました関係者の皆様方に深く敬意を表しますと共に、本日のフォーラムを出発点としまして、更にこうした連携の輪が広がり、そして進化することによって、素晴らしい山形県を未来に残していく活動がどんどん大きくなりますように心よりご期待申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

【司会】

吉村様、ありがとうございました。吉村知事は、この後公務のため中座されます。吉村知事、本日は誠にありがとうございました。皆様、大きな拍手でお見送りください。

【司会】

それでは、次に、活動報告に入らせていただきます。

はじめに、今年度のリーディング事業のひとつでございました「広域連携講座」の報告を行っていただきます。この「広域連携講座」は、東北芸術工科大学の調査事業と連携して実施されたものですが、昨年９月２１日から２６日にかけて行われました『六十里街道を行く』について、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、張大石准教授より報告をお願いいたします。

ここで、張先生のご紹介をさせていただきます。先生は韓国のご出身で、１９９３年に日本へ留学され、現在は、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの准教授でいらっしゃいます。地域文化遺産の確固たる姿あってこそ世界を超える文化遺産という信念のもとに、地域固有の文化遺産をひとつの共有資源として捉え、地域を作る文化遺産の保護と、活用の仕組み作りに取り組んでいらっしゃいます。それでは、張先生宜しくお願いいたします。

【東北芸術工科大学　准教授　張　大石氏】

ただ今ご紹介いただきました、東北芸術工科大学の張と申します。本日は、地域の皆様の前で、六十里越街道の連携のプロジェクトについてお話することに、喜びと感謝の念でいっぱいであります。それでは、今年度行いました六十里越街道プロジェクト「六十里越街道ものがたり２００９」の概要を皆さんに報告させていただきます。

昨年度は「六十里越街道を行く」というテーマで活動を行いました。先ほど皆様がおっしゃいましたが、この時代の流れは、「物から心へ」というのが大きなキーワードになっているように思います。

私たちは、２００５年から文部科学省の事業指定を受けまして、その中で、地域文化遺産の保護活動の試みを始めました。映画『おくりびと』のことが最近話題になっていますが、まさしくこの『おくりびと』は、私たちが目指していたその本質を表わしておりまして、それがひとつの新たな物語になっていくのではないかと思われます。この映画は、小山薫堂という脚本家によってシナリオが作られたわけですが、彼は、この庄内に来て初めて見るその光景から、チェロを演奏する主人公を思いおこして作りあげたそうです。庄内平野というところは、何も目立った建物などありませんが、その何もないところに何かが宿る、その心を映画化したとも言えます。この心が私たちの心の中で永遠に響くのです。これはまさしく、物から心という付加価値の永続性を見出す中で重要なキーワードであり、重要なイメージを私たちに示唆しているように思います。

私たちは、このプロジェクトを遂行し構想を練りあげることを、ひとつのネットワークとして考えてきました。つまり、人間の中で血管があらゆるところにめぐらされて初めて生命体が活動しているということとイメージが重なっているのです。そこには、太い動脈もあり、静脈もあり、毛細血管もあり、さまざまな道があるわけです。これらの道が様々な器官として役割をもち、ひとつの生命体を維持しております。ある種、地域連携というのは、こういったひとつのものをモデルとして、私たちの中にある何かをイメージすることから始まるのではないかと思います。つまり、地域文化や人など、様々なものがつながる街道文化遺産のネットワークは、全てが対象となり、全てが役割をもち、全てが関係している中で、つながって、全てが救われるのだと思います。つまり、全てが文化を享受して、質の高い暮らし、本質的な心の豊かさのある地域づくりにつながるのではないかと思うのです。地域文化遺産をいかに活かし、共に活かされ、それによって私たちは地域と文化と共に生きていくのです。こういった地域文化創造の道をイメージしながら、このプロジェクトを進めてきました。

今年度は「六十里越街道物語２００９」というテーマで全行程を歩き、実際にどういった文化遺産が眠っていて、どういう現状なのか、そして、その中にあるコンテンツ的な要素をいよいよ発掘しようではないかという計画でした。この企画は、いわゆる「物語」に焦点を絞って実際の道を調査し、記録と調査活動を並行して行いました。そこでは、東北芸術工科大学及び東北公益文化大学の学生たち、沿線の自治体の皆様からの協力、一般市民の参加、全てが関わって六十里越街道全ルートの実在性を確認いたしました。これらは、これからの街道を行くプロジェクトにおけるひとつの大きな基盤としてなっていくのではないかと思われます。

少し詳しく申し上げますと、９月２１日、庄内の鶴岡城址の神社を出発いたしまして、町を歩き、庄内平野の広大な文化的景観をたどる旅からこの企画は始まりました。そこで、ひとつのキーワードとして、藤沢周平の原風景というものがあります。この物語は、『藤沢周平・心の原風景』というタイトルにしてあります。彼が生まれた場所はこの街道沿いにはないのですが、そのすぐそばにある金峰山のふもとに沿って街道は続いております。藤沢周平の文学の世界の中における色々な風物詩や精神性を学ぶことができました。この街道は、こういった関連する空間を一体化してつなげるというイメージを改めて知る必要があると思います。私たちは、地元の名物である民田茄子を実際に触り、かじりながら、地元の方たちやかつての藤沢周平を知る人たちの様々な話を交えて、当時の状況をうかがうことができました。庄内平野というのは、ある意味で、開発が遅れていたからこそ、その連続した風景が実際に残っていたのかもしれません。そこには、確かに建物などのモノはないかもしれません。しかし、そのモノがないところにだけ見出せる、ひとつの心に射す光的な要素こそが、文化遺産的に言うと、いわゆる文化的な地方景観につながるのではないかと思います。そういう意味で、この六十里越街道の歩みは、いかに私たちが豊かな環境を創るか、つまり、豊かな景観を創り、その景観がひとつの風景になっていき、その風景になっていったところで、いよいよ『心の響き』というものが人々を魅了するのではないかと思われます。そのような観点で、日常的に我々が慣れ親しんだこの風景を、もう一度別な角度で見直すことは、再発見という形で自分たちの足元の宝探しというような要素として重要な試みだったのではないかと思います。

注蓮寺に入りまして、映画『おくりびと』の撮影場所などを実際に訪れました。ここで『おくりびと』の話になります。使われなくなった農家が、この映画によって再生されました。新たな価値を付けられ、新たな活用策が見出されていくのです。これは、私たちには歴史的な古いものがないというコンプレックスに感じることを、別な方法で解決してくれるひとつの大きなシンボルではないかと思います。つまり、この全体の空間の中には、『おくりびと』というひとつのコンテンツ、街道文化遺産というコンテンツ、そして出羽三山文化を育んだコンテンツがあり、逆に言うと、出羽三山文化があったからこそこの『おくりびと』という映画が生まれたのかもしれません。そういった面で、こういった街道文化遺産的な要素を私たちは独自で持ち、自分たちの地域の文化を目

指すことは非常に重要ではないかと考えています。この沿線上に、様々な自然景観、生活を支えるいろいろなものが広がっております。そういうものは連続してつながっておりまして、決して点では表現できないものがあるのです。この街道をじっくり時速4kmで歩いて行くと、そこでの地元の人々とのふれあいによって、私たちが目指す光を発見していくように思いました。地元のもてなしの心は、その地域に幸があるようなイメージを作りあげる上では、大変重要なキーワードとなります。

今回は歴史的なものを省いて、物語性にこだわって話を進めさせていただきますが、過去に『岡本太郎のアングルを歩く』という企画をさせていただきまして、実際に当時の問題を地元住民と考える時間を持ちました。１９６２年１０月、岡本太郎はこの出羽三山の旅のために、山形に足を運びました。彼は、村山地域を通ってこの田麦俣に来るわけですが、当時彼はたくさんの写真を残しております。彼が一言言っております。「山形の風景は、どこかフランスの風景に通じるところがある。」彼は若い頃にフランスに留学して、芸術家でありながら民俗学を修め、各地を歩き回りました。そんな彼が言った、『フランス的な風景』というのは、私たちをわくわくさせるものがあります。実際にこの田麦俣には古い多層民家が２軒残っております。たった２軒なのですが、これはほとんど高齢化・過疎化している中で、限界に近いいろいろな要素があると言われております。こういった要素が、再び復元され息を吹き返し、２軒、３軒と増えていくという田麦俣的なところが、肘折や岩根沢や志津などに２～３の集落ができるとすれば、この月山をめぐる大きな文化ゾーンが世界遺産にも勝るとも劣らない資源的なものがパワーアップしていくのではないかと思っております。よって、私たちが何をしようかということは、もうはっきりしていると思うのです。かつて私たちが近代化の対価として失ってしまったものをもう一度価値を見直して呼び戻すこと、これは世界中に広がるひとつの流れであります。そういうものを、私たちは、より地元に根付いた考え方を人々の認識の下にもっと強く発信し、自らが光を創っていくことが重要で、旅行産業の二番煎じのような経済成長ではなく、その光を創って地域をつくることで成り立つ観光を実験する意味で、この田麦俣は非常に重要なことだったと思います。これは光を創るという意味で「創光」と言えるでしょうか。そういったものも、太郎はこの写真に残したのです。彼のアングルには、非常に強い情熱とその愛が見られます。彼の心は、再び甦ること願っておりますが、私たちが近い将来それを実現することは夢ではないかもしれません。この田麦俣を越えながら、私たちは様々な自然や歴史遺産、文化的なものなどは全てが一つにつながるものとして捉え、体験することができました。最初は「ここはつまらない」などとの声がありましたが、実際にこの道を皆さんと歩いていくと、歩いている本人

がその空間の主人公になっていき、そこでひとつの旅学としての原点に戻って自分自身を振り返ることができるのです。つまり、この街道を実際に歩きながら、文化遺産によって自分が豊かになれるという循環的なもの、足元から伝わる意気込みのようなものを共有できたように思います。

特に、今年は湯殿山丑年御縁年ということで、大勢の人々がお参りしたと思いますが、この六十里越街道について夜の旅学講座を開き、古い絵葉書や写真を通して松尾芭蕉における空間性のイメージを共有しました。

大岫峠に立って、私たちはイベントを行いました。ここは村山と庄内がひとつにつながるところでして、風景が結合するところでもあります。実際に私たちがこれから何をするのか、これは、これから実際のものとして風景を作っていこうではないかという、意気込みであり決意であります。そして、その決意との決別によって、また新たな風景を作ることができるのです。「失うことなしに新しい風景は開けない」という真壁仁の思いを汲んでおり、例えば、この場所に彼の歌碑が建って人々を迎えることも、ひとつの新しい物語を作ることにつながるかもしれません。実際に羽黒山の山伏の方も参加してくださいまして、出羽三山における信仰的な真髄を感じたり、実際に現場である月山に抱かれて私たちが感じ合うことも、他ではできない非常に大きな感動でありました。

弓張平では、また新たな六十里越街道の定義をさせていただきました。人類の遥かなる旅の足跡という形で、この弓張平を見直すのです。これは何かと言いますと、人類は約１０万年前にアフリカから出て、東へ東へと足を運び、日本まで辿り着きました。それによって、縄文時代、旧石器時代、弥生時代の人々が新たな旅を重ねたわけですが、実はこの弓張平という所は、正しく旧石器から縄文、弥生にかけての遺跡が重なっている所でありました。そういった空間的なもの、使われてきたものをユーラシア的に視点を変えてみると、この地域はかつての縄文遺跡かもしれず、とんでもない価値を見出すことになるかもしれないのです。最近、遺伝子学による様々な人間の足跡が科学的に検証されつつありますが、近い将来には、より確実なものとして地域のアイデンティティをもっと深くし、大きな資源になるのではないかと思います。こういった面を私たちは注目していく必要があるのではないかと思います。

いよいよ、この峠を越えて、西川町、寒河江市、中山町、山形市に入ってくることになるのですが、山形から鶴岡を往復することで、初めてこの街道の実

在性が少し身についたような気がいたします。つまり、昨年度の「山形から行く視点」と、逆に、今年度の「鶴岡から来る視点」とでは、風景の違いや感じ方の違いなど様々なものがあったのですが、私たちが実際に時速4km で歩き、空間に立って物語を作ることで、物語を感じるという視点がいかに重要かを確認することができました。沿線沿いでは、将来を担う小学生たちとの交流会や、地域のお年寄りとの交流会を通して、私たちがただ単に旅をすることではなく、彼らとつながっていること、つまり旅とは、時間的にも空間的にも誰かとつながっているということを認識し、そこで豊かな精神性を育むことができることを感じたわけです。

岩根沢の三山神社では、東北の息吹というものを感じることができ、現代の舞踏と伝統的な舞踏を通して、また新たな一つの物語が生まれました。これは、伝統というものをいかに現代と組み合わせて見るか、あるいは現代的に読み直すことで、いくらでも新たな視点として地域文化的な価値が本来の価値として再生されることを示している気がします。様々な伝統的なもてなしがあって、そこで重要なキーワードである食文化として、地元ならではの食材を楽しむことができました。こういった一体化したものは、人と地域と文化をまるごと体験できる街道だったのではないかと思います。

まだ、地域では埋もれている宝がたくさんあるのですが、白岩においても、かつての街道記憶を残す商品として「しらゆき」というお菓子がありました。これは、江戸時代に発展した出羽三山文化を支えた証人なのです。この証人をもっともっと前面に出して発信することは、街道全体における文化そのものを太くするうえで重要な試みだと思います。この白岩において、村山の風景が開かれました。いよいよ山形に近づいてきたという感覚をここで持ったわけですが、山ではない里の街道には、まだ、慈恩寺や古いお寺、一般の人々の信仰の証が点在しておりました。しかし、このようなものの一つひとつは価値として認められていないかもしれません。けれども、六十里越街道文化遺産の全体のひとつとして捉えると、この重みは変わってくるのではないかと思います。そういった意味で、私たちは、一つひとつを丁寧に調査を行い、それらをリストアップしていく予定です。

いよいよこの六十里越街道は、長崎で最上川と交差します。唯一この最上川と交わるこの長崎は、ご存知のとおり山形文化を育んだ港でありました。この港をもう一度見直し、紅花文化の発信地としての価値を重ねて、様々な文化のコンテンツを入れ込み、もっとダイナミックに、川を下る人と街道を歩く人が自然に交わることができれば、この街道は本物になっていくのではないでしょうか。今までは近代化の波によって道路を造ってしまったところに、意味をもたない港をもう一度見直すことで、街道文化遺産として風景を創り上げていく

ことができるのではないでしょうか。また、この地は、芋煮の発祥の地です。この中山町のボウダラ入りの芋煮には、すごく感動いたしました。

終点は文翔館でした。そこで集まった皆さんと記念式典をいたしました。

最後に、私たちの、村山、庄内、新庄、置賜という地域は、それぞれの盆地と盆地が重なっており、もしかしたらこの街道は脊髄のように連なっているのではないかと思い、全体図を示してみました。しかし、この六十里越街道一本で、全てがこの地域の未来像に貢献できるかというと、そうとは限らないと思います。これからは、この一つの街道から、いろいろな毛細血管や最上川という動脈がクロスすることなど、新たな物語が創られることにより、各自治体のモチベーションとなって、この広域連携は自然な形となっていくのではないかと思います。心のふるさとを求めるこの時代に、六十里越街道における試みは、単なる地域自治体の生活だけではなく、普遍的な価値を現代人に訴えかけるという意味があるものだと考えております。よって、国際的な観光を展望すると、いかに普遍的な価値を発信できるかというコンテンツ作りが重要ですが、今回の物語を作る旅は次のステップに大きな足跡になっていくものと確信しております。ひとつのビジョンを私たちが作り上げ、共有することで、しっかりとこの街道文化遺産を確立して、人と地域と文化がつながる六十里越街道の大いなる光を見て、触れて、創ろうではありませんか。ここで話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

【司会】

張先生、ありがとうございました。

続きまして、これまで行ってまいりました、モデルツアーや広域連携祭などのリーディング事業について、六十里越街道広域連携交流促進準備委員会の事務局　西川町総務企画課課長補佐　後藤忠勝より報告いたします。それではお願いいたします。

【西川町総務企画課課長補佐　後藤忠勝】

こんにちは。ご紹介いただきました、西川町総務企画課の後藤と申します。今回のプロジェクトの事務局については、５つの自治体、実務レベルで集まって事務局を構成させていただいております。

私のほうからは要点だけご報告をさせていただきます。プロジェクトの立ち上げについては、プロジェクトに専門委員会と戦略プロジェクトチームを作らせていただき、各界のみなさま方に快く委員をお引き受けいただき、ご指導いただいているところでございます。また、(財) 東北産業活性化センター様から２ヶ年にわたる支援を受けまして取り組んでいるところです。これまで２回の委員会、３回のプロジェクト会議、９回の事務局会議を開催しています。

５つの自治体で、これから皆で協力し合って取り組もうと定めたのがアクションプランです。その中で、特に、５つの事業を〝リーディング事業“として優先して取り組んできました。

最初に、「広域連携講座」につきましては、東北芸術工科大学の張先生からお話がありましたように、街道歩きには１９６名、夜学講座には１５８名もの方に参加していただき、その輪が広がり始めています。

次に、「モデルツアー」については、１０月２６日～２８日の２泊３日のスケジュールで、旅行商品企画が可能なのかどうかという調査を行いました。行程は、山形市の霞城公園をスタートし、中山町の柏倉家、寒河江市の慈恩寺、白岩等を経て、西川町の玉貴で昼食。その後、岩根沢三山神社、本道寺口之宮神社に参り、志津温泉に宿泊。２日目は、志津温泉を出発し、湯殿山本宮に参拝し、街道のトレッキングを楽しみました。そして、注蓮寺で即身仏を拝観し、丸岡城跡を訪れ、湯田川温泉に宿泊。３日目は、松ヶ丘開墾場、庄内映画資料館、そして庄内映画村を巡り、昼食はアルケッチャーノという内容でした。参加していただいた方からは「今回のコースは非常に興味深く、素晴らしい場所ばかりでしたが、これも六十里越街道という共通のテーマの中で、点としての観光資源としてでしか捉えていなかったものが面になり、六十里越街道沿線の地域の魅力を十二分に理解できたファムトリップでした。これからも、この広域連携をもっと深くし、情報発信、コース作りをすることにより、全国の多くの方が、憧れ、訪れる街道になっていく可能性を感じました。」という意見をいただきました。これを励みに私たちは頑張っていこうと考えております。

「広域連携祭」は、街道をPRするために、街道の共通の資源である酒と肴を活かして「六十里越SAKE街道」として演出しました。まだきっかけ作りの段階にあり、参加している業者さんや商品は一部に過ぎず、まだまだたくさんの隠れ味がありますので、これからも追加して紹介させていただきます。

そして、本日開催しました「広域連携フォーラム」ですが、これは、関係者が集い、意識啓発を行って、広域連携の取り組みの意思を確認していこうとい

うものです。

最後のリーディング事業として、今後の取り組みを推進するために、新たな受け皿としての連携組織を作り、新年度から本格的な活動をしていこうと考えております。

今後は、行政内部における連携はもちろんのこと、民間の方々、産業界の方々、自治体同士が結びつきを強め、同じ方向を目指していくことが大切だと考えています。改めまして、皆様からご理解とご協力、関係各位のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

【司会】

それでは、基調講演に移らせていただきます。六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト委員長の株式会社ジェイティービー　常務取締役清水慎一様より、「広域連携の必然性、六十里越街道を活かした地域づくりとは」と題し、ご講演いただきます。清水様は、ご存知のとおり全国各地を飛び回り、観光町づくりの指南役としてご活躍されておられます。清水様のご経歴につきましては、本日皆様のお手元にお配りしておりますプロフィールに、詳しく掲載させていただいておりますので、ご覧いただきたいと存じます。それでは清水様、宜しくお願いいたします。

【株式会社ジェイティービー常務取締役　清水慎一氏】

皆さん、こんにちは。本当にお忙しい中、六十里越街道広域連携フォーラムにお集まりいただきましてありがとうございます。私は、今ご紹介いただきましたように、六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクトの委員長をさせていただいておりますジェイティービーの常務ですけれども、元々は JR 東日本におりました。現在、かなりの時間を立教大学の観光学部で学生と過ごしており、過日、学生と一緒をこちらに伺いました。本日は、限られた時間ではありますが、六十里越街道を活かした地域づくりについてお話をさせていただきます。

六十里越街道につきまして、先ほど、張先生から、六十里越街道をどうやって現代に活かしていくのか、言わば「百年間眠っていた六十里越街道をどういうふうに今日的に活かしていくのか」というお話がありました。そこには、２つのテーマがあると言えます。１つは、その価値の認識です。六十里越街道、或いは街道文化遺産の価値の認識、共有、それによるお互いの交流です。２つ目は、それらを活かして、首都圏や仙台圏、そして外国から多くのお客様に来ていただいて、地域経済の底支えをすると共に、新しい目でこの価値を再認識していくことです。この委員会は、この２つのテーマについて取り組んできました。ともすれば、活かし方として、観光すなわちバス旅行でたくさんのお客様に来ていただこうという短絡的な思考になりがちです。皆様方の中にも、私

のような旅行エージェントの常務が来て、また、これで儲けようと考えているのだろうとお思いの方がたくさんおられると思います。けれども、そのような観光はもう成り立たないのです。そんな観光ばかりをしてきたので、観光振興の名の下に、お金を使ってきた地域がどんどん疲弊しています。その辺をしっかり見極めることが重要です。いろいろな意味で、この六十里越街道を活かした地域づくりというのは、あらゆる問題提起をしているのではないかと思っており、２つのテーマを踏まえながら、お話してまいりたいと思います。

六十里越街道を現代に活かすということについて張先生から話がありました。いずれにしても、歴史的に言ってみれば、この出羽三山詣でという旅によって、こちらの方々やあるいは関東以北の方々が、非常に豊かな精神文化を享受してきたのだということです。残念なことに、それがほぼ百年間眠っていました。高速道路やバイパス、そういった近代化の名の下に、六十里越街道が眠ってしまいました。しかし、その結果として、地域が豊かになったかというと決してそうではないのです。逆に言うと、もう一度地域をつなぐことによってしか、活路を見出すことが出来ないという状況が明らかになってきました。まさに、張先生が先ほど言っていた、「全てが対象となり、全てが役割を持ち、全てが関係してつながることによって、全てが救われるのだ」という言葉が、私は観光や旅の本質を突いているのだと思います。私どもが六十里越街道に取り組んだポイントは、こういったことではなかったかということを張先生から教わりました。まさに、これが「連携」ということですし、「交流」ということではないかと思います。それを「観光」という言葉で矮小化してはいけないのです。実は「観光」という言葉は高尚な言葉なのです。しかし、残念ながら、「観光」というのは「マスツーリズム」という意味で矮小化されてしまい、結果として、救われるどころか捨てられてしまっているということです。

私の友人にアレックス・カーという人物がいます。彼が今、日本文化を踏まえた地域の見直しや、交流による地域の活性化に取り組んでおります。そこで私はいろいろなことを教えられました。アレックス・カーはアメリカ人です。張先生は韓国から来られていますが、やはり外から来た方々に色々と教えていただけるのだと思いました。

話は変わりますが、徳島県に祖谷渓というところがあります。ここは平家の落人の里です。ここには温泉もあります。徳島県の方々や地元の方々は、「うちの目玉はかずら橋だ」とおっしゃいます。このかずら橋は、渡るときに５００円かかります。かずら橋の５００円の通行料が、実はこの村の税収を上回っています。それぐらい多くの人が訪れる観光名所となっています。村長さんや徳島県の方々は、「これが観光の目玉だ」、「もっとお客様に来てもらわなければならない」、「もっと旅行エージェントにお客様を送ってもらわなければならない」、

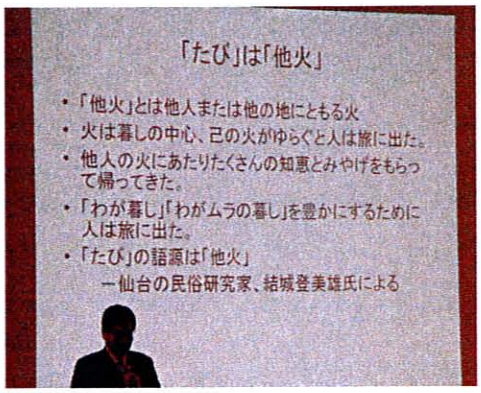
「もっと来ていただくためには駐車場を造らなければならない」などといろいろ考えました。そして、今までは路上駐車だったのですが、駐車場を造ろうと１０億円徹底的に山を崩して駐車場を造りました。駐車場ができたとたんに、実はお客様が激減しました。「かずら橋は一度見たからもういいよ。そうではなくて、ここにはもっと食材とかないの？」と聞くと、「うちは何にも無いんですよ」と平気で村長さんが言ってしまうのです。「じゃあ、もうそんな所には行かないよ。徳島県はもういいよ。じゃあ四万十川に行こうかな」というように、駐車場を造ったとたんに観光客が激減してしまい、結局残ったものは、自然破壊と膨大な負債です。これが今までの観光です。私たちはアレックス・カーのグループと、「それは違うだろう」ということで考えました。実は、こういった打ち捨てられた小民家のようなところに日本文化が残っていますし、こういったところで暮らしを再現することによって、この祖谷渓の歴史や暮らしや価値を感じていくのではないかということに辿りつきました。そして、何軒かの小民家を NPO で借りまして、ここにたくさんの外国のお客様をお呼びしています。外国のお客様はたくさん来ますが、日本人はほとんど来ません。当然のごとく、電気はありませんので蝋燭です。ちょうど私が１月に行ったときは、本当に寒かったです。マイナス１０数度で、寝ていても寒かったので、アレックス･カーはよくこんなところでやっているなと感心していたのですが、こういった形のものが徐々に見直されてきたことがわかりました。隣のおばちゃんが、「え、こんなところがいいの？だけどこうやっていろいろな人が来ると急に楽しくなるね」と言いました。今までは、バスやマイカーでいろいろな人が来て、特に面白くないけど橋を渡って帰って行く、地域にとってはまったく縁はありません。しかし、この活動では、地域の人たちが、よそ者、特に外国の人たちとのつながりが出てきて、元気になります。今、この外国の人たちが、この祖谷渓の食材である粟やヒエ、肉はイノシシといったものをお客様に提供することが良いことであるということがわかってきました。ただ、どうしても料理法が難しいので、私の友人のコンラッドの料理長の斉藤君を紹介し、彼は試行錯誤のうえ、新しいメニューを創りました。私は六十里越街道の価値の再認識や共有、活かし方というのは、まさに、こういった事例にヒントがあるのだと思います。先ほど張先生が言われたようなことこそが六十里越街道の本質を突いていると思います。そういった価値の再認識、あるいは、活かし方を私たちはやっていかなければならないのです。

「観光」といって、今まで色々なことをやってきましたけれども、もうそろそろ違うということを前提にして、取り組まなければならないと今考えるわけであります。ちなみに、この「観光」とか「交流」というのは、よく、「旅」とか「たび」などいろいろと表現されますけれども、旅の歴史を振り返ってみますと、この「旅」という字の語源は、「人の手の下に人が入る、人々が旗のもとに隊列を組んでいく」という意味なのです。やはり立教大学で教えるとなると、こういったことも勉強しないと学生から怒られてしまいます。昔は、旅とは苦しいもの、危険なものと考えられており、みんなで隊列を組んでいくのが常でした。それから、少しゆとりが出てきてこところで、「観光」という言葉が出てきました。ですから、「観光」という言葉が正式に文書などに出てきて、それが流布されるようになってきたのは、明治以降のことです。オランダから買ってきた、帆船に、「咸臨丸」と「観光丸」という２つの名前を付けたのです。「観光」、これはまさに、「国の光を見る、国の光を示す」という意味があります。「国の光」というのは、その地域の暮らしぶりや生業のことで、それらを見に行くのが「観光」なのですが、１９８０年代～１９９０年代には「マスツーリズム」に置き換えられてしまいます。一時期、それで非常に潤った方々がいらっしゃいますけれども、結果として地域がそれによって疲弊してしまいました。

有名な話がありまして、白川郷が世界遺産になったので、「たくさんのお客さんが来るぞ。世界遺産になってよかったね」と言い、あっという間になんと１６０万人のお客さんが来ました。しかし、来たお客様は、世界遺産のど真ん中のところに車を停めて、平均滞在時間がたった４５分でお帰りになってしまう。結果的に、お土産を少し買って、あとは排気ガスとゴミだけが残ってしまいました。「これが世界遺産なの？そうではないんじゃないの？」と大多数の人が思ったのですが、一部の人だけが思いませんでした。なぜなら、そのど真ん中の田畑をつぶして駐車場にした人は、年収１億円近く稼いでいるからです。「世界遺産になって良かったぞ」と言っている人はわずか２人だけでした。そういう観光の時代が続いているわけなのです。しかし、そういったものはしっぺ返しを受けるのです。いろいろな意味で団体型というものが、もう駄目になってきたのです。山形県は、今そこで苦労されているわけです。はっきり申し上げて、山形県は、団体型、周遊型の旧来型観光の典型です。私ども、JTB も JR も一緒になって儲けてきましたけれども、それではもう駄目だということがそろそ

ろわかってきました。

さて、それではどういう観光になるのでしょうか。私は、私の最も尊敬する一人である民俗研究家の結城登美雄さんから教えていただいたのですが、「旅は“他火（たのひ）”というのが語源」という話でしっくりきました。「火」は暮らしの中心であり、自分の火がゆらぐと、悩みがあったり、身体を壊したり、何となく寂しいと思ったときに、人は他人の家に行って、他人の火にあたり、他人からいろいろな話を聞きながら、知恵や元気をもらって帰ってくるものです。だから、旅の語源は「他の火」なのです。旅の語源は「食べてください」などいろいろようなのですが、「他の火」であろうと考えます。私はこれからの旅の本質はここにあると思っております。やはり、こういったことを踏まえないと、六十里越街道の価値の再認識にもならないですし、六十里越街道の活かし方の具体化にもならないのではないかと思います。まさに、「他人からたくさんの知恵と元気をもらえるような旅」、これがポイントです。そして、張先生からありました、「つながること、連携することによって、人々は救われるのだ、人々は元気になるのだ」ということが、まさに、この六十里越街道の本質なのです。その背景には、こういった交流、観光、旅の歴史もあるのだということを、我々は知っておく必要があるのではないかと思うわけであります。



このような形でいくつかお話しますけれども、例えば、担い手の変化というのが、今あちこちで行われてきています。今までの団体型あるいは車を主体にした観光が、個人型の歩く観光になってきています。先ほどありましたように、車で行って４５分でお土産物だけを買って帰る旅は違うだろうということで、団体ではなく個人で歩いていこうという旅が今あちこちでみられるようになりました。そうすると、今まで行政や観光協会や旅館、ホテル、あるいはJTBやJRなどで主導してきた観光が、もはや限界にきているのです。また、男だけの観光協会が限界にきたのです。このあたりが、そろそろ担い手を多様化しなければならないだろうというところで、先ほどの、観光の変化や六十里越街道の価値の再認識と活かし方という点でポイントになってくるのでしょう。張先生が、多くの大学のネットワークを踏まえながら、ああいった形でファムトリップや勉強会をやっていただいているということは、そういった意味で、極めて良い流れであり、今日お集まりの皆様が関心を持っておられるということは、山形県観光からみると、極めて心強いと思うわけです。

例えば、先進的な取組みとして、「長崎さるく」というものがあります。長崎はもう余計なイベントやキャンペーンやハコモノを造ったりすることをせず、街歩きに徹しようという形で、『さるく（＝歩く)』が発祥しました。これを半年やることによって、企画した２９のツアーに７００万人もの参加がありました。

また、萩も、古い町並みの保存をするだけ駄目だということがわかりました。重要伝統的建造物が３つあり、これらの保存は重要なことなのですが、よくよく見たら、将軍が参勤交代で御成り道する昔の御成り道商店街 1.5km が、まさにもぬけの殻になってしまっていました。ここの市長さんは、重要伝建施設や市街地の町並み保全に対し非常に熱心な方なのです。しかし、彼もここの暮らしの部分については無関心すぎました。郊外型ショッピングセンターのおかげで、ここは完全にシャッター通りになっていました。結果的に、古いものは良いのですが、街を歩いて飲んだり食べたり人と話したりすることを萩ではできなくなってしまい、観光客が激減していたのです。「どうしてこんなに一生懸命やっているのに激減するんだろう。うちではこんなに古いものを大切にしているのに。」と思ったのでしょうが、それだけでも駄目なのです。大切なのは暮らしぶりなのです。それで、昭和４０年代と今を比べてみようという中で、ここでようやく市民がみんなで金を出し合って、商店街を再興しようではないかと始めたわけです。まさに、何でもかんでも行政に文句を言い、頼るのではなくて、市民自らが担い手になることが重要なのです。余談ですが、この担い手になった人は、行政にいた筆頭の部長さんでしたが、行政では限界があるということで、自ら役所を辞めて、暮らしていくために、この商店街で屋台を始めました。「何で市役所の部長が屋台を始めたんだ、あいつはバカか」と言われたのですが、そうではなくて、結果的にそれが彼の「暮らしをつなげることによって、みんなが元気になるし、古いものが活かされるのだろう」という信念であったのです。彼の呼びかけに応じて、ここを直すために 2,500 万円くらい集まればとお金を集めたのですが、なんと市民から 7,340 万円も集まりました。今、このお金を基にして、１軒、また１軒と店舗を開設しています。農家レストランをやったり、市場をやったり、まさに、担い手の多様化がこういった形で交流を支えているのです。先ほど、「自然と歴史と生活文化、それらを加えたものがひとつの遺産である」という張先生のお話がありましたけれども、まさに、それらは一体のものとしてならなければならないだろうということだと思います。このような形で、あちこちで今、担い手の多様化が進んでいます。

さて、このような、住民も満足し、お客さんも満足するような、今の時代に合った旅を実現させるためには、私は３つのキーワードがあると思います。１つは、市（いち）、２つ目は街道、３つ目は湯治だと思っています。肘折の朝市、あるいは八戸の陸奥港の朝市を見ると、なるほど、市というのは一つの文化の接点なのだなと気づきます。逆に言うと、旅の実現には、市がなければいけないのです。そして、それらを運ぶ道としての街道が再認識されるのではないかと考え、さらに、ひとつの滞在拠点としての温泉地はやはり湯治に戻っていくのではないかと思うのです。昔のように、１回り１週間、３回りで最低３週間、そういった滞在をやっていこうと考えています。そういった意味で、街道というのは、これから、旅あるいは観光の中でも大きなツールになり、ポイントになり、それが結果的に地域を豊かにしていくのではないかと思うわけです。張先生主催の旅のパンフレットの冒頭にも出ていましたけれども、時速４km の世界、つまり人の歩くスピードこそ、旅・観光の世界に近づく最たる手段だと思います。車中心の世界から人間中心の社会へ移行しなければならないのです。そして、自然と歴史と生活文化をつなぐのが街道文化遺産なのです。まさに、これが、これからの観光なのです。これがなければ、観光は成り立ちません。こういったことをやらない限り、観光はありえないのです。ですから、担い手の多様化、観光振興のやり方を変えなければならないのです。山形県が解決しなければならない課題は、たぶんここに尽きると思います。ほとんどが車社会、あるいは道路整備もやってきましたけれども、それだけでは十分ではないのです。

皆さんご存知の、あの四国八十八箇所めぐりに、過日、オランダの旅行会社から、オランダ人３７人を受け入れてほしいと申込みがありました。「どうしてですか？」と聞くと、日本文化を味わいたいと言うのです。外国の方々が日本文化をしっかりと味わいたいそうなのです。今や、欧米人を含めた外国の多くの方々は、日本文化を味わうために高野山に行かれます。これの意味するところに気づいた青森県知事は、ようやく奥入瀬の車の規制に着手しました。奥入瀬の１２km は紅葉がきれいです。ここを歩かずして、なぜ奥入瀬の良さを味わえると言えるのでしょうか。これはみんなで言っていたことなのですが、特に、ここの旅館やホテルを含めた観光業者が反対しました。しかし、それによって、奥入瀬にお客様が来なくなったことに初めて気がつきました。青森県知事がそこに気がついて、車を規制しようと、最終的には、ここは全部手前で降ろして、

十和田湖畔までは電気自動車で行かせてあげようという議論になりました。誰も白川郷のような失敗をしたくないのです。そのように、実にいろいろな動きが出てきています。

そのようなことで、六十里越街道の価値の再認識、その活かし方ということをテーマにしながら進めてきましたけれども、その背景には、地域の変化、観光の変化などがたくさんあり、そこを私たちは押さえながらやってきているということをご理解いただきたいのです。先ほど張先生から、街道沿いのポイントポイントの物語を語っていただきました。まさに、その物語が、私たちとしては必要なものであり、その延長線上にあるのが、地域学と旅との結合、いわゆる“旅学”だと思うのです。張先生の上司であり、私の長い間の友人の赤坂憲雄先生と、この“北の旅学・山形”というものを作りました。山形県さんに、絶大なるご支援をいただきながら、あとは私がJRにいたときのJRのお金を使って作成しました。しかし、残念ながら山形県さんもその後お金がないということでやめられましたし、私もJRを辞めてしまったのでお金が出ないのですが、まさに、この旅学というのは、先ほどの街道を含めた、地域の価値の再認識と、その活かし方を集大成するものではないかと思うのです。この本は大変すばらしいものだと思います。残念ながら、部数が少ないので、今はほとんど残っていません。こういう取組みを六十里越街道の中でも実現できたら良いかなと思うわけです。

というような形で、沿線住民の街道文化価値の再認識と交流の活発化、域外からの交流人口拡大による産業振興と地域活性化、この２つのテーマについて、今後の具体的な計画、目標を持っているわけでありますけれども、この後、トークセッションにおいて、沿線自治体の首長さんに今日的な意義やその活かし方について語っていただきながら、最後には、皆様方と一緒に決意表明をしていきたいと思いますので、この後もまた宜しくお願いいたします。

【司会】

清水様、本当にありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお送りください。

【司会】

皆様、お待たせいたしました。ただ今より、トークセッションを行います。沿線自治体の首長、そして、清水様によります**「沿線自治体首長が語る、六十里越街道への期待と役割」**をテーマにした、トークセッションでございます。

パネリストは、

山形市長　　市川昭男様
中山町長　　大津保信様
寒河江市長　佐藤弘樹様代理　副市長　那須義行様
西川町長　　近松捷一様
鶴岡市長　　榎本政規様代理　副市長　山本益生様

です。

それでは、パネリストの皆様、**清水様**、宜しくお願いいたします。

【清水コーディネーター】

はい、皆様、またよろしくどうぞお願いいたします。
先ほど申し上げたとおり、いろいろな活動をこの委員会を通してやってきたわけでございますが、一つの中締めということで、今回このフォーラムを計画させていただきました。その中で、とりわけ今後の展開について、しっかりと趣旨を踏まえた上でやっていかなければいけないということで、各地域のトップであります首長さんにお集まりいただきまして、題して『沿線自治体首長が語る、六十里越街道への期待と役割』ということで、お話をいただくということにしたわけでございます。

５人の首長さんにご参加をいただきましたが、こういった形で、六十里越街

道に関して、首長さん同士が語り合うというのは、たぶん、初めての試みだろうと思います。皆様方ご存知のとおり、各市町で、いろいろな取り組みをされているわけでございますが、そういったことのご紹介を含めながら自由に語っていただいて、今後の決意表明をしていただければ大変ありがたいことだと思います。

先ほど、私が講演の中でも申し上げましたけれども、ひとつは「六十里越街道のもつ今日的な意義について」について、もうひとつは「六十里越街道をテーマにしてどのように広域連携を進めていくのか」について各首長さんにお話をいただきます。そして何人かの方にコメントをはさんでいただこうと思っております。また、最後には会場の皆様方からのご質問もお受けしようと思っております。

それでは、山形市長さんから順にご発言をお願いいたします。

【山形市　市川市長】

ただ今ご紹介いただきました、山形市長の市川でございます。まず、この六十里越街道のフォーラムを山形市で開催していただいたということに対し厚く御礼を申し上げます。

先ほどのご講演の中で、六十里越街道というのは１００年間眠っていたというようなお話がございましたが、確かに眠っていたのではないかなと思っております。ただし、六十里越街道にちなんだ地名、あるいは由緒ある所がまだまだ山形市に残っております。例えば、残念ながら１０年ほど前に廃業されたのですが、六十里越鯉屋さんがありました。つい最近まで、大きな池で鯉を飼って、そして、旨煮、アライなどを売っておりました。そういった地名というのが、脈々と今の時代まで、生きているのです。あるいは、地名にも六十里越というのがございます。こうした中で、正直申し上げまして、山形市とこの六十里越街道というのは、これまで正面切って取り組んだことはありませんでした。今回のフォーラム、あるいは事務局とのいろいろな打ち合わせの中で、この六十里越街道の歴史的な意義等について、改めて再認識をする必要がある、あるいはさせられた、こんな考えをもっています。

山形市での、この六十里越街道の現状、歴史的なことについてはご存知であろうと思いますが、１４世紀に城下町として栄え、その２００年後に、「天地人」

で兼続公の敵役として、中興の祖ということで、最上義光公がここに入り、この山形の礎を作っていただきました。私たち山形市民は最上義光公に対し敬意を表し、また文化人として親しみを感じております。しかし、どうも大河ドラマになりますと、伊達政宗公のときのドラマでは、義光公は悪役で映りまして、そのイメージがどうも強く長い間引き継いでしまい、そして今回の天地人では、もう少し良い役回りで出ると思いましたけれども、残念ながら最上義光公らしき人しか出てきませんでした。

そして、この山形県の交通の要として、先ほどの羽州街道、仙台と結ぶ笹谷街道などが、東西南北縦横に街道が張り巡らされました。この中で庄内と結ばれたのがこの六十里越街道でございます。この六十里越街道の起点が、中心市街地の南よりの八日町の誓願寺と言われております。これは、先ほども講演でありましたとおり、出羽三山詣での起点ということで、大変な参詣人がここに集まった経過がございます。その賑わいぶりは、ものの本によれば、多い年では３万人以上が全国から集まったということです。そして、そのおかげで八日町の誓願寺近辺が、土産屋や薬屋などが軒を連ねて繁栄をしたという歴史的な事実がございます。この八日町が一番栄えたときが、先ほど申し上げました、最上義光公が直江兼続公と戦った長谷堂合戦のときで、このときに、出羽三山の湯殿山に大変大勢の方が篭って、最上氏の戦勝を祈願したということが伝えられております。そして、それを最上義光公がこの旅館の方々に営業独占権を与えました。それで、街道沿いにこの旅館等が当時はあったのです。市内に残っています旅篭町という地名も、このあたりからきているのではないかなと思っております。そのおかげで、この街道沿いには多くのお寺や神社、歴史的建造物、史跡、庭園等が多く残っているという現状でございます。当時の山形と出羽三山、中でも湯殿山との関係が街道で強く結ばれていたということがわかります。こうした当時のものを、私たちは大事にしていかなければならないなと思うのです。当時山形に造られた５つの史跡がございまして、この史跡をできるだけ石垣で復元しようということで私たち行政も頑張っておりますが、その史跡を活用するため、民間の方々が『御殿堰開発株式会社』という会社を作り、古い町並みを再現するような形で動いており、それがたくさんのお客様にお出でいただく計画も進行中です。店舗関係は民間の方々、我々はその堰を現在復元中でございます。街のど真ん中にこうした堰を見て触れられるようなことを大事にしていきたいと考えております。

市民の方は既に行ったことがあるかもしれませんが、紅花商人の長谷川家のお蔵を利用して、これを「まるごと紅の蔵」ということで、昔の蔵をそのままお借りして、そこで食事をしたり、山形のお土産品を買うことができる施設が誕生しました。昔の蔵などを更に利用し再現して目を覚まさせていく中で、六

十里越街道というものも重要な位置づけになるのではないかなと思っております。

【中山町　大津町長】

中山町長の大津でございます。六十里越街道と我が町のつながりを調べてまいりました。六十里越街道は、参詣の道ということで取り上げられることが多いのですが、いろいろな資料を見てみますと、塩の道ということで、塩が運ばれたという歴史も相当あるようでございます。まず、中山町長崎という場所がどういう場所かといいますと、山形方面、そして天童、更には山辺方面から湯殿山方向に行くには必ず長崎に集まるのです。ここから先は、最上川を渡って行くのか、西の山麓沿いに進んで行くのかを選択する場所であります。最上川が丘陵を横切りますので、六十里越街道の一つの難所であったようです。また、洪水などによって川筋が時々変動するということで、渡し場も度々移動しているようでございます。このように、中山町長崎というところは、最上川と六十里越街道が交差する地点であり、六十里越街道を行く旅人は、長崎などの船場で舟で最上川を渡るか、または、西の山沿いを行くという形になっていたようです。１６９４年（元禄７年）に、最上川の舟運が長崎から荒砥に伸びていきました。それまでは、中山町長崎が最上川舟運の終点でございました。そこで船頭たちが荷受けの時間や風待ちのときに食べたと言われるのがボウダラ芋煮でございます。そばにあった松の枝に鍋を吊るして、京都から積んできたボウダラと地元の里芋と一緒に煮て食べた、これが芋煮会の始まりと言われております。現在、町では、このような言われも踏まえまして、９月の第２土曜日を「芋煮会の日」と定めて、「元祖芋煮会 IN 中山」というイベントを開催しております。

そのような歴史がありましたので、当町の街道にも湯殿山等の史跡がたくさんあるのですが、なかなか一般町民の方も知らないという実態がございました。幸いなことに、中山町郷土研究会というのがございまして、今回のフォーラムに合わせたわけではないのですが、『中山町六十里越街道を行く』という、中山町の分だけの六十里越街道を集めた写真集を昨年の１０月に作りました。一冊６００円で販売をしておりますが、私もこれを見ながら当町の分の六十里越街道を再認識してきました。この中から１つだけご紹介いたしますと、光秀院と

いういわゆる修験の三山参りの先達をつとめた場所があるのですが、ここに安置してある大日如来像が、山形県内では、青銅製の鋳造物としては県下一の大きさを誇っています。これは、１７６８年、福島県の相馬の行者たちが湯殿山に奉納するために運んできたということなのですが、今保存している場所で動かせなくなってしまい、そのために仕方なくここに奉ったという言い伝えがございます。そういう点からも、昔も今も、六十里越街道と最上川というのは、県全体をつなぐ軸であると考えております。六十里越街道の意義と価値を再認識しながら、今後どう活用していくのかということについて、我々は十分に研究していかなければならないのかなと思っているところでございます。

【寒河江市　那須副市長】

寒河江市の副市長の那須と申します。今日は市長の代理で来ましたので、よろしくお願いいたします。

寒河江市は、ご存知のとおり、頭にさくらんぼを付けてやってきておりまして、実は、７回ほど続けてきている「花咲かフェア」という催しをやっております。簡単に言いますと、県からお金を出していただきまして、月山や蔵王が見える市内で一番眺望が良い寒河江サービスエリアに隣接したクアパークに県立公園を造っていただきまして、そこを会場としてやっております。具体的には、花を植え、単純にそれを見ていただくということです。元々の目的は、寒河江にはおいしいさくらんぼがございますので、こちらに来ていただき、直接買っていただこうという単純な発想で始めたわけですが、毎年好評で３０万人ほど訪れていただいています。なぜ、ただ花を見ていただくだけなのに、こんなに人が来るのだろうと考えてみますと、やっぱり、人々の気持ちが花や自然に向かっているのではないかと感じております。湯殿山のご神体そのものが、自然に温泉が湧き出る岩ということで、そのようなところに神や精霊が宿るということを自然の感覚の中で育ててきたのだと思います。そのようなことをいろいろと考えてみますと、六十里越街道については、やはり本当の意味で、今日的な現代のヒーリングや癒しという意味に近いものが潜んでいるのではないかと考えるところです。

寒河江市では、平成２０年の市報で、市史編纂室の委員長の宇井先生から１

２回にわたって市内に残る出羽三山参りの特集記事を書いていただきました。そこには、ちょっとした道標や追分の石くらいしかないのですが、号が出るたびに、そこを訪れる市民の方の数が尋常ではなかったということがありました。そういったことから考えますと、この六十里越街道についても、本当の意味で認知度を高めていくような催しをすることによって、現在の旅ということにつながるものがあるのではないかと感じているところです。寒河江市は、内陸方面からの三山参りにおける結節点としての性格があると思います。ちょうど寒河江川を渡るところに臥龍橋というのがありまして、そこを渡るとあとは湯殿山の神域ということで、江戸中期以降明治時代にかけて、白岩で必ず禊をしてから出発するということがあったそうです。ですので、寒河江市でも、特に白岩付近は繁栄したという文書も残っています。そこには史跡がたくさん残っていますので、そういうものを一つひとつ丁寧に発掘をしながら、今日的な六十里越街道の進歩に役立てていきたいと考えているところです。

【西川町　近松町長】

月山のある町、西川町長の近松です。出羽三山の霊峰、月山の山麓には登拝口が７口あります。羽黒口、大網口、七五三掛（しめかけ）口、大井沢口、本道寺口、岩根沢口、肘折口、この７つのうちの３つが西川町にございます。私が高校に通っていた昭和３０年前半あたりですと、高松から間沢まで、三山電車が通っておりました。田植えが終わって、６月末から夏休みあたりにかけますと、白装束に身を固めた団体で、電車もバスもぎゅうぎゅう詰めだったことを思い出します。

また、資料によりますと、車も鉄道も通っていない江戸時代、丑年ご縁年の年、１７３３年（享保１８年）は、この八方七口を通った行者は１５万７千人、そして六十里越街道を通った行者は５万人に達したという記録が残っています。当時は、交流人口がものすごく、物・金・情報が西川町にもたらされました。現在、岩根沢地区に伝わる六浄豆腐ですけれども、これも京都のお坊さんが病気にかかって世話を受け、その恩返しに伝えられたという言われが残っております。最上川による京都文化の移入もありますが、陸路からも数多くの情報・文化がもたらされたと言えるかと思います。地域づくりは一朝一夕でできるものではございませんが、アンテナを高くして、数百年という歴史の流れの中で、脈々と受け継

がれてきた食文化を含む文化や資源、地域の宝、これは大切に更に磨きをかけて後世に伝えていくべきものと思っております。

平成１４年から１６年にかけて、山形県と西川町が六十里越街道の整備計画を策定いたしました。また、町内でも、街道の価値を再認識して、地域活性化に役立てようと民と官からなる六十里越街道保存推進委員会を平成１７年に組織し、各関係機関・団体が役割分担をして活動しております。また、同年から、旧朝日村と広域連携を行いまして、特に意識啓発事業を共同で実施しているところでございます。

今年は雪が少なく心配したのですが、大井沢と志津での雪祭りを控え、大変頑張っております。是非２月末には大井沢と志津の雪祭りに来ていただきたいと思います。

【鶴岡市　山本副市長】

山本と申します、宜しくお願いいたします。鶴岡市は平成１７年１０月１日に合併をしまして、それぞれ思い入れが違うと思うのですが、私は旧鶴岡市の人間でございまして、六十里越街道の認識とこれからの取り組みについて、多少お話をしていきたいと思います。私の認識としましては、出羽三山は三大修験道としての歴史が根付いており、特に、東日本の修験道という大きな視点で捉えております。昔は、それぞれ東北や関東から抜けて、多くの行者も含めて出羽三山を目指してきたという歴史がかなりあるのです。日本全国の中でも、お伊勢参詣、彦山などにも、それぞれの歴史があるということです。それからもうひとつは、軍道としての歴史ということでございます。戦国時代から、最上氏と庄内の大名の中で確執がありまして、その中で、六十里越街道を越えてそれぞれ侵略をしたり戦いがありました。特に、１５８０年代については、庄内にも豪族がおりまして、それを倒すために最上氏が軍道を越えて庄内に入ってきて、庄内の豪族を倒したという歴史があります。それには、塩が欲しかったのだという歴史が綴られてございます。その後、上杉家が来て、上杉家の家来である本荘氏が最上家を打ち負かして再び庄内を確保し、その後、上杉家が米沢を含めて庄内も統治したという歴史もあります。そういう点では、六十里越街道が二つの視点でつながれてきたという歴史があります。

最近の六十里越街道の事業については、旧朝日村時代に商工会と地元有志が平成14年にアルゴディア研究会を設置し、歴史を活かした観光による地域振興事業に取り組んでおられます。その中で、国や県の事業を入れながら、資源の保存をするという形で、地域の集落の人たちを巻き込みながら活性化のための事業をやってきたと聞いております。最近では、山船頭協会を立ち上げて、街道のガイドの養成をしたり、その街道トレッキングをした参加者によってアルゴディアクラブを立ち上げて、その方々とアルゴディア研究会の面々が埋もれていた石碑群の保全や再生活動の実施をしたという経過がございます。しかし最近では、このように六十里越街道に人が入ることによって、自然環境に悪影響を及ぼすこともあるため、対応策のひとつとして今年度に公衆トイレを作りました。それから、国土交通省からは案内板の設置などの活動支援をいただいております。

ただ、大きな課題としては、田麦俣から街道筋に上がる時、かなりの交通量がある国道を横断しなければならないため、そこを安全に渡れる地下道や歩道について国に対し支援要請を行い、安全で安心な街道づくりを行っていきたいと思っております。また、先ほど清水さんのお話にもありましたけれども、地域の方々が参加をして地域の資源を守り、活用していく取り組みを継続してやっていかなければならないということです。

【清水コーディネーター】

皆様方ありがとうございました。それぞれの市、町で、また、個人として、六十里越街道、あるいは出羽三山への関わり方などをどのように受け止めておられるかという話をいただいたわけです。これからは、全体として、数百年の中で受け継がれてきたことをどうやって現代に活かしながら後世につないでいくか、それが今失われた心の豊かさをしっかりと保持する道ではないかということにつながってくるのだと思います。

それでは、次に、六十里越街道の活かし方や、そういう中での広域連携のあり方につきまして、皆さんからお話をいただいて、その後、運輸局長さんと張先生にコメントをいただきたいと思います。宜しくお願いいたします。

【山形市　市川市長】

六十里越街道をテーマにして、どう広域連携をすべきかということですが、

その前に、さきほど清水さんがご講演で触れておりました、観光の３要素である市・街道・湯治について申し上げます。私はこの３つの要素というのは、六十里越街道でつながった３市２町、あるいは村山広域圏全体の中で、このテーマは山形市とも十分に関わるのではないかと感じた次第です。市、これは山形市で言えば、初市がお正月にあります。また、二日町、三日町、四日町、五日町、六日町、七日町、八日町、十日町、これが全部町名として残っています。昔はこれらの町が交代で市を設けていて、その名残りの一つが初市で、現在も中心部の交通をストップしてやっています。そして２番目の街道というのは、もちろん六十里越街道が大きなつながりのひとつです。山形市は、仙台と結ぶ笹谷街道、南と北を結ぶ羽州街道、こうした街道が交差している地点です。それから３つ目の湯治ですが、山形市には蔵王温泉などたくさんございます。特に、蔵王温泉は来年で開湯から 1900 年という歴史のある年になります。私はその顧問になっておりますので、この場を借りて PR させていただきます。こうした３つの要素を十二分に兼ね備えているのが、山形市のみならず、この六十里越街道の行政圏であろうと思っております。これをさらに強化するために、お互いが関係しあって初めて活きてくるという考え方が、この広域連携であろうと思います。こうした連携が、お互いに補完し合い、関係づけながら、これからの観光の要素を兼ね備えていくのであろうと思っております。さらに、この六十里越街道の関連性を大きく見た場合、先週立ち上げたばかりなのですが、７市７町の広域連携の観光圏も時速４km で歩く速さで回れる範囲の観光圏を作っていこうという取り組みを上山から尾花沢まで７市７町で行っております。この一環としての連携も、六十里越街道沿いにも関連づけられれば、観光としての武器として、より強固なものになっていくのではないかと感じております。さらにいろんな面で協議をしていく必要があろうと考えております。

【中山町　大津町長】

先ほど、六十里越街道に関連した素材についていろいろと申し上げましたが、何せ、わが町は、県内で一番面積の狭い町であり、資源は点にしか過ぎず、観光客を単独で呼べるという条件ではございません。したがって、当然のことながら、広域連携として関係市町と連携をとりながら、観光客の方に来ていただくということが必要だと思っております。それぞれが、今、何から手をつけていくべきなのかということでございますが、史跡はたくさんあってもサイン表示が未整備ですので、関係する団体で、数箇所に標識を設ける予定です。それから、２つ目として、今わかっている部分のほかに、隠れた資源を発掘してい

きたいと思います。個人的なことになりますが、私は江戸時代の歴史が好きで勉強しているのですが、その中に林鶴梁という幕末の文人官僚がいまして、この方は１９年間日記を書いていて、その内１３年半分が残っています。この方は最後のほうは静岡県の今の磐田市の代官を４８歳くらいから約５年間つとめまして、そのあと、羽州柴橋の代官を５６歳までの３年半くらいにわたりやっています。そのときは、こちらでは在任をせずに、江戸在府で代官をつとめているのですが、山形に３回来ています。そのときの日記に、３回ともルートを変えて来たとあります。羽州街道を来たり、喜多方から来たりして、いろいろなものを見ています。当然、代官ですから中山町長崎に来た記録もありまして、『１８６０年９月３日に長崎村で坪刈り』という一行だけが残っています。その他、寒河江の柴橋に来たときは、幸生銅山に２回行っているようです。最初に来た年に、そこで働いている方にいろいろ申し上げたところ、翌年来たときには相当生産量が伸びていたということで、白岩で酒を２樽買って従業員に届けさせたという記録が残っています。このように、隠れた逸話や資源がまだまだあるのだろうということで、まだ表に現れていないものも私たちとしては努力して見つけていき、それを新たな素材として使っていくことで、頑張っていけばよいのかなと思っているところでございます。

【寒河江　那須副市長】

それでは、今後のことというテーマですが、ひとつは先ほどの張先生の報告の中にありましたが、寒河江市の白岩というところに、江戸時代にできた『あわゆき』というお菓子があります。せんべいなのですが、非常に中がやわらかくて、口の中に入れると溶けるのです。温故知新という言葉がありますけれども、江戸時代に口どけの良いお菓子ができたのであれば、これほどお年寄りが多い今の時代はそれをヒントにして、そのような食材の活かし方などのヒントにしたいと思っています。この街道の中にはそのようなヒントが十分詰まっていますから、ひとつの食文化の探り方として、素材の活かし方を手がけていきたいというところがひとつあります。もうひとつは、この寒河江周辺だけですが、昔から、１５歳になったら、男の子は湯殿山や月山に登るという習わしがあったのです。１５歳の、いわゆる一人前になる頃に、本当の意味での苦行に類するものを行うということが存在しています。寒河江市内の白岩の生徒たちが通う中学校では、毎年、その習わしを引き継いで、必ず２年生のときに月山登山を行っています。つまり、一定の年齢で区切るかたちで、昔の人は旅を楽しんでいたということがあるわけです。偶然に私も今年還暦なのですが、ちょ

うど団塊の世代がどんどん地域に帰ってきますので、そういう人たちが一緒に６０歳を境に湯殿山に登ろうという掘り起こし方もあります。湯殿山に登る途中の行程についても、十分魅力をもっているものだと感じています。

寒河江市は、たまたま５つの市と町のちょうど中間にありまして、なおかつ登山道と平地との境界線でもありますので、是非、街道の真ん中にいることを活かして、この六十里越街道が観光素材だけでなく、地域づくりの原点になるような形で頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いしたいと思います。

【西川町　近松町長】

広域連携については、ただ「隣同士だから」ということでは成し遂げられないと思います。広域連携を行うための必然性、具体的なテーマがなければならないと考えます。この六十里越街道は、まさに恰好の素材であり、山形市から鶴岡市に及ぶ行政区域の垣根をまずは取り払う気構えが不可欠です。

観光圏整備計画で、「精神文化圏の形成」が取り上げられております。これを具現化しようとすると、自然にこの街道をキーワードにした取り組みになると思うのです。この街道には、文化資源、観光資源、食の資源が豊富にございます。山寺、慈恩寺、三山神社、湯殿山神社、ここを結んだだけでも、国の重要文化財級の祈りの街道が出来上がります。また、今回の「SAKE 街道」関係業者のみならず製麺業者が多くあります。「麺を恋するめんこい街道」というのもできます。「湯めぐり街道」もできますし、また、共通資源を取り出して、演出する手法もあるかもしれません。そのためには、お互いに補完しあうルートづくりもすべきかと思います。例えば、蔵王と月山をセットにして売り出せば、１２月から６月までスキーができるというメニューもできるわけです。今、実際に、月山夏スキーとさくらんぼ、そして蕎麦を同時に楽しむお客さんの動きも多くございます。大事にしなければならないのは、出羽三山信仰という価値観を現代的にどのように演出するか、情報発信するかということだと思います。死と再生という古来からの価値観を現代的に考えますと、「人間性を再生する」、「元気になる」といったことになります。このテーマのもとに、滞在プログラムをいかに提供するかが大切です。先ほど、地域づくりの話にありました四国のお遍路さんのようなこともできると考えられます。街道の神社や仏閣をめぐりながら、その訪問先での人との交流や食を楽しんで、湯に浸かる仕掛けづくりなどもできますし、地域のお母さん方が主役の茶屋や産直施設に寄っていただき、お互いの交流を図りながら地域の高齢者の知恵や地域の生活などが活かされるシステムづくりのような幅広いものもできるのかなと思います。これを

皆で考えていくのが、この会議の第一の主題と言えます。

【鶴岡市　山本副市長】

今、西川町長さんが言われたように、日本古来の文化として、六十里越街道というテーマを活かしていくことが大事なのだと思います。その点では、山形には数多くある在来作物を活かした食文化、そしていろいろな観光文化があるわけです。庄内地域で言えば、ひとつは庄内映画村であり、ひとつは海坂藩といわれる鶴岡市内の施設であり、今話題のクラゲを利用した加茂水族館など、様々な素材があるわけです。そういった点では、鶴岡は、縦軸として羽越線を中心にして、今までは在来の観光が成り立ってきたわけですが、そうではなくて、横軸の六十里越街道を利用した観光も含めて、滞在型の観光をどのように目指すのかということが大事なことと思います。それが、地域活性化の一翼を担うと思っておりますので、広域連携でできるだけスケールメリットを活かした観光地域づくりをやっていかなければならないと思っております。

【清水コーディネーター】

ありがとうございました。
皆さんから一通り、この六十里越街道の価値についてどのように認識をされ、どのように取り組まれているのかということ、それから、そういったものを現代に活かしながらどう活用し、広域連携を進めていくのかについてお話いただきました。それでは、ここで、運輸局長さんと張先生にコメントをいただきたいと思います。

【木場運輸局長】

３市２町でのいろいろな取り組み、また街道を取り巻くいろいろな観光素材としての自然・文化・食・おもてなしなど、たくさんの素材をたくさんお持ちだということがよくわかりました。実は、東北各地においても、同じような資源があり、それらを活用した広域連携による取組みが進んでおります。そういう中で、六十里越街道ということをキーワードに新しい連携をしていこうという取り組みでありますが、全国や世界にこういったところがあるということを

発信していくには、やはり、ひとつ共通のコンセプトとともに全体をコーディネートしていく力が非常に重要になってくるのではないかと思っています。そういった意味で、今日３市２町のトップにお集まりをいただいて、共通の認識のもと、今後頑張っていこうということは、非常に意義があろうかと思います。そして、いろいろな素材があるわけですが、こういったものを育ててまとめていくことは、やはり大きな要素として人づくりというのが大きな課題と言えます。それぞれ地域でのリーダーをつとめる人も必要でしょうし、全体をまとめる推進力としての人などマンパワーが重要ではないかと思います。そういった意味で、新政権ではございませんが、従来の「コンクリートから人へ」という、先ほど清水さんがお話になった、駐車場を造ったのが良かったのか悪かったのかということがいろいろと問題になったということもあるわけで、全体をまとめていく人づくりをいかにしていくかというのが非常に重要な課題だと思っております。私たちも、そういった人が十分に勉強していけるようないろんなツールやマニュアルもありますし、他の先進事例をまとめたガイドブックを作っている最中です。そういったものを活用していただいて、他の成功事例とともに、他の失敗事例もどんどん学んでいただいて、全体の連携がうまくいくような人づくりに力を入れていただければと思っています。

【張先生】

パネルディスカッションでの議論を伺い、皆さんがつながり、この街道がいよいよ一つの形になったなという印象を強く持ちました。これは、皆さんの考えが自然にじわじわと広がって、その中ででき上がったひとつの形だと思われます。私たちのこれからの地域づくりや観光については、民間企業に例えると、それこそ一人ひとりが社長であり、あるいは、全員が営業マンであるというように、もはや区分などはないのだと思います。付け加えますと、おそらく、これから地域をどうするかということは明確だと思います。それは、地域住民の方が、「絶対にこれを創り上げるのだ」という決意表明を行うかどうかということであり、また、ひとつの地域でできるものをいかにコンパクトにまとめることができるかが大切です。「こういうものができた」という実感が次の実感へとして広がっていきますので、まず、「こういうものはどうか」と発言したら、そこにエネルギーを集中させることが重要なのです。江戸時代に六十里越街道で三山参りした人の参詣図を見ますと、そのあふれ出るエネルギーを強く感じるのです。まさしく、その人間力としてのエネルギーを、私たちの生活にぶつけて表現するという意味で、この六十里越街道は価値があるのではないかと思い

ます。本日、みなさんが連なって集まっていただいた姿を見ますと、まずひとつの形ができて、これから進歩と発展がどんどん増すのではないかという感想を持ちました。

【清水コーディネーター】

ありがとうございました。
今の張先生の話に尽きるかと思いますが、一つの形がなんとなく見えてきたなと思います。しかし問題は、やはり、人、あるいはこういったものを支える地域、住民、地域住民の強い意志、今日お集まりの皆様の志というところに尽きるかと思います。
せっかくですので、ご質問やご意見をお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。

【質問者】

私たちのグループは、平成９年から六十里越街道に携わっております。ただ、私たちのグループで、どうしてもやれないことがございます。先ほど、先生方からいろいろなお教えをいただきました。その中で、やはり、光を輝かせる素材が六十里越街道にはたくさんございます。結論から申し上げますと、例えば、江戸期に造られた石畳が西川町にございます。それから、江戸期の初めに造られた一里塚が二箇所ございます。県内には、十三峠のほうにもございますが、六十里越街道の一里塚はピカイチです。そのまま百年を忘れた中で、林の中に残っております。ところが、私どもは、そういう文化的な景観をいくら説明しても限界がございます。それには、文化財としての価値を高めるために、鶴岡市並びに西川町さんに、文化財としての指定を検討していただけないかなと思っております。民間人として、やれる範囲のことは頑張ってこれからもやりたいと思っておりますが、ひとつその点のご検討をお願いしたいと思います。

【清水コーディネーター】

ありがとうございます。
それではどなたかお答えいただけますでしょうか。

【鶴岡市　山本副市長】

文化財指定については、どうということは具体的に言えませんが、文化財指定をするということは、行政に責任があるわけですので、これは、歴史経過も含めて皆さんから教えていただきながら、できるかどうかを判断させていただきたいと思います。しかし、指定をした後にどうするかということは非常に大きな問題ですので、行政としても、そこのポイントだけは皆さんの協力がなければできないということが現実だと思っております。それを共有の意識として、必要があれば指定をすることについては、やぶさかでないと思います。

【西川町　近松町長】

今、おっしゃったとおりだと思います。おそらく各町のほうでも、いろいろな素材について話題に上がっておりますし、委員会等でいろいろ検討されているのではないかと思います。やはり、今おっしゃったように、後の維持管理なども含めて、一つひとつのチェック体制が大切になるのかなという気がいたします。

【寒河江市　那須副市長】

今のいわゆる文化財の指定の話は、寒河江市の話ではありませんでしたが、先ほど少しお話しましたように、実は、寒河江市内には街道沿いに、例えば湯殿山の碑や氏神などの昔からのものが無数にあります。その文化財の指定の検討の必要性も確かにわかるのですが、文化財の価値が確かなもの以外は難しいかと思います。例えば、寒河江市では古い臥龍橋がありました。臥龍橋を造ったときの記念碑のような石が岩にはめ込まれていたのですが、その岩が風化して、石が取れてしまいました。それで、それを町内会の人が公民館の脇に、ただ置いていたところ、白岩地区の文化財に興味がある方が市のほうにも来ましたので、市のほうでは「その手の記念碑はあまりにも多すぎて、すべて同じ取り扱いができないので、皆さんでなんとかしたらどうですか」というお話をしました。結果的に、橋の袂の公園のようなところに地区の皆さんが集まって、そこにちゃんとした形で安置をして倒れないようにしたということを１０年くらい前に行ってくれました。その地区に思いがある人が、そのような形でこれからの時代をつくっていくのではないかと思います。行政の人間が言うのはお

かしいかもしれませんが、例えば、寒河江市内に無数にあるそのようなものを、すべて皆さんの税金で保存していくことが本当に正しいのかどうかとなると少々疑問を感じます。

【質問者】

今までいろいろお話を聞いた中で、先ほど市川市長からお話があった広域観光圏を一緒に進めていくことは大切なことと思いますが、ただ、心配なことは、現状でまだ存在する、いわゆる「安っぽい観光」のほうにどうしても引っ張られる傾向があるのではないかと思います。付加価値の高い観光を目指す時、何が必要と考えておられるのかお聞きしたいと思います。

【山形市　市川市長】

７市７町の広域観光圏の中で、この六十里越街道も取り組みましょうと言っております。今おっしゃった、「安っぽい観光」という表現は、「質の低い」という意味でおっしゃっているのかもしれませんが、さきほど清水さんが、「他人の火、よその火、これが人を元気付ける、安らぎを与える、これが観光だ」とおっしゃいました。村山の観光圏の中では、私は、基本的には、それぞれ観光圏で持っている精神文化、いわゆる、自然を敬うというようなことをベースに観光計画を実施していきましょうと考えております。その過程において、時速４km という速さで歩く観光圏ということで、「２泊３日でこんな形を今７市７町の観光圏の中でやっていきませんか」ということをご提案しておりますので、この六十里越街道はぴったりだろうと思っています。とにかく、質の高いという意味は、訪れた人に安らぎを与え、癒し、そして感動に導くということであり、その力をこの観光圏域は十分備えていると考えます。

【清水コーディネーター】

ありがとうございます。

最後に山形市長さんに、的確に締めていただけたように思います。六十里越街道を含めて、山形が求めている観光の姿が、今の市長さんの言葉に具現化されていると感じました。

わが国の観光は、ここ数十年間、団体型や車中心型、周遊型という形できましたので、その転換は極めて大変だと思います。先ほど、遺産の話もありましたけれども、市街化の進展や様々なインフラ整備の中で、既に壊されたものもたくさんあるわけですが、そういったものも、ひとつひとつ掘り起こしながら、復元すべきものは復元をしていくというのが、今日の５人の方々のお話だったかと思います。

いずれにしても、非常に今日良かったと思うのは、そういった意味での、山形県観光、あるいは村山、庄内の地域振興、観光振興の方向性について、一定のベクトルを作り得たと思います。とりわけ、本日のテーマであります六十里越街道につきましては、初めてこのように責任者の方々にお集まりいただいて、本当につながってきたと感じます。

市や町によって、まだまだ濃淡がありますけれども、今日のお話の中で、相当つながりが強まったのではないでしょうか。また、その価値について共有できたのではないかと思います。今日お集まりの方々が、まさに共通の価値観を持っているということで、皆様方と一緒になってひとつのベクトルができあがったと思います。

ただ、これからまだまだやるべきことがたくさんあるわけです。まさに、地域振興、あるいは地域が救われる、地域の活力を取り戻すというところまでいくには、相当な時間がかかるかと思いますが、今日、責任者の方々の心強い決意が明らかになったわけであります。そういったものを踏まえながら、是非、皆様方が当事者として担っていただければ大変ありがたいと思いますし、私たちも、こういった日本が誇る精神文化、世界に誇る精神文化の世界を大事にしながら、しっかりと世界にアピールしていきたいと思ったわけであります。

そういった意味で、今日を契機に、皆様方と行政、民間と行政、あるいはNPOなどの市民の方々、関係団体、企業が一体となってこの六十里越街道の価値を更に再認識して、その活かし方について具体的に進めていきたいと思います。先ほど「安っぽい観光」という話が出ましたが、私はたくさんの人が関われば関わるほど質が高くなると思います。広域観光圏のあちこちで失敗しているのは、ほんの少しの旅館・ホテル・行政の方々でやっているからなのです。たくさんの方々が関わってくれば、必ず成功すると思います。広域観光圏となりますと、「これは旅館・ホテルの連携ですか？」となるのですが、それは違います。六十里越街道を含めた市民の連携だということで、ご参加をいただければと思います。

ということで、本日は極めて有意義なシンポジウムを開催させていただきましてありがとうございました。それもこれも、大変お忙しい中お集まりいただきました５人の各行政の責任者の方々、そして週末の土曜日にもかかわらず、

わざわざお越しいただいた皆様方のおかげだと思います。本日はどうもありがとうございました。これにてパネルディスカッションを終わらせていただきます。

【司会】

ありがとうございました。
今後の広域連携交流促進を考えていく上での、沿線自治体のトップの皆様と、清水様とのトークセッションでございました。パネリストの皆様、そしてコーディネートしていただきました清水様、本当にありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願い致します。

それでは、閉会セレモニーに移ります。
これまでのフォーラムの内容を振り返り、今後の六十里越街道広域連携に関して、自治体各首長による協働宣言を行います。木場局長様にもご登壇いただきまして、清水様とともに共同宣言を見守っていただきたいと思います。
それでは、パネリストの皆様、清水様、ステージ中央にお集まりください。
では、私のほうで、協働宣言を読み上げさせていただきますので、各首長の皆様は読み上げ中にどうぞ握手を取り交わしください。また、写真撮影などをされる方は、この間に是非お願い致します。会場の皆様、ご清聴のほど、宜しくお願いいたします。

六十里越街道広域連携交流促進協働宣言

信仰の道であり、物流の道であり、時には軍路であった、この六十里越街道は、その時代時代の人々の暮らし、生活、政治を支えてきました。

その歴史と存在を顧みることは、時流が大きく変遷する現代において、私たちの新たな羅針盤と成り得るのではないでしょうか。

街道沿線で生活する私たちが、互いに交流しながら歩き、語り合う営みは、単に街道の峠を越えることだけではなく、互いの心の峠を越え合うことであり、新たな価値観の創造と、広域文化圏形成の胎動を表すものと確信いたします。

六十里越街道の沿線にある、私たち、山形市、中山町、寒河江市、西川町、鶴岡市の３市２町は、改めて六十里越街道を共通の資源・財産として捉えなおし、共有し、行政区を越えて、沿線住民が互いに手を携えて、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていくことをここに宣言いたします。

平成２２年２月７日

山形市長　市川昭男
中山町長　大津保信
寒河江市長　佐藤洋樹
西川町長　近松捷一
鶴岡市長　榎本政規

【司会】

広域連携に対する、沿線自治体トップによる協働宣言が今なされました。各首長の皆様ありがとうございました。皆様、今一度大きな拍手をお送り下さい。それでは壇上の皆様、どうぞご降壇ください。

さて、長時間に及び開催されてまいりました、六十里越街道広域連携フォーラムでございますが、閉会の挨拶を、財団法人東北産業活性化センター専務理事、加藤郁男様にお願いいたします。加藤様お願いいたします。

【財団法人東北産業活性化センター専務理事　加藤郁男様】

ご紹介いただきました、財団法人東北産業活性化センターの加藤と申します。フォーラムの閉会にあたりまして、一言、皆様への御礼とお願いを申し上げさせていただきます。

本日は大変長時間にわたりまして、皆様お疲れ様でございました。また、来賓としてご出席賜りました、東北運輸局の木場局長様、吉村知事様、そして、東北芸術工科大学の張先生、株式会社ジェイティービーの清水常務様には、いろいろなご指導を賜りました。それから、３市２町の首長の皆様、大変ありがとうございました。また、今回のこのプロジェクトに際しまして、委員会等を組織して検討してまいりましたが、その委員の皆様、そして、３市２町で具体的にこのプロジェクトを担当していただきました関係者の皆様、今日こうして会場に足を運んでいただいた全ての皆様に感謝申し上げたいと思います。

私ども東北活性化センターは仙台にございまして、こういった地域の産業振興や地域の活性化につながるプロジェクトの支援をさせていただいております。この六十里越街道のプロジェクトにつきましては、一昨年12月に実行委員会ができまして、そこから支援の依頼を受けまして、２年間のプロジェクトということで支援をさせていただいたという次第でございます。これまで、今日紹介あったような色々な委員会やリーディング事業をやってきたわけでございまして、今日のフォーラムがそのようなイベント検討のひとつの集大成ということでございます。ここまで、本当に関係の皆様には大変ご苦労いただいたということで、改めて御礼を申し上げたいと思います。

清水常務からお話がありましたが、やはり３市２町の首長さんが一同に会したということは非常に意義のあることだと思うのです。最後に一つお願いがあ

ります。共同宣言をしていただいたということで、我々プロジェクトを支援させていただいた者としても、是非、この共同宣言を形にしていただきたいのです。そのためのプランは今年度中にまとまるということで、実際の活動はそれを基に来年度から始まるわけですから、是非とも実現をしていただきたいということを願っております。それから、今日お集まりの方はもちろんですが、関係の皆様には、その実現のためのご支援ご協力をお願い申し上げまして、閉会にあたりましてのご挨拶とさせていただきたいと思います。

本日は大変ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。会場の皆様のご清聴、ご協力によりまして、スムーズに進行させていただくことができました。感謝を申し上げます。ありがとうございます。

只今をもちまして、六十里越街道広域連携フォーラムを終了させていただきます。

今日ご参加いただいた皆さま方には月山自然水を準備させていただいておりますので、お帰りの際にはどうぞお受け取りください。本日は誠にありがとうございました。

(3)　広域連携講座の開設

(1)六十里越街道ものがたり2009

近年、グリーンツリズムのブームにより月山を歩く人々の姿が増え、古道を記録・保存する市民ボランティアグループの活動も活発になりつつある。しかし、あくまでもブナ林の山岳区間を対象にしているため、六十里越街道の本来的な姿とは程遠いのが現状である。こういった状況のなか、「自然＋歴史＋生活文化」を一つに束ねた「街道文化遺産」という概念を打ち出すべく、「六十里越街道をゆく」の実施に至った。

昨年度の「六十里越街道をゆく」では、六十里越街道の実在性を明らかにすることを目的とし、本学と東北公益文科大学の学生ら、そして一般市民が全区間を歩いた（9 月 22 日～27 日）。山形を出発し鶴岡までを、時速 4km で 5 泊 6 日間かけて歩きながら、街道と関連文化財の在り処を GPS 計測により克明に記録した。また、街道に関わる歴史・民俗や生活文化に関する情報を、地元住民や街道の先達から聞き取りし記録するなど、六十里越街道の現状把握を中心とした活動となった。これに対して、今年の「六十里越街道ものがたり 2009」では、出羽三山信仰の姿と現代的な旅学という観点から、新たな街道の「ものがたり」に焦点を置いて全区間を歩いた（9 月 21 日～26 日）。歩く会の参加者数は 194 名、沿道で開かれた地域交流会を含めると約 300 人を超える人々からの参加・協力を賜った。次頁にルートと主な「ものがたり」の概略を示す。

庄内平野を歩く

山伏と山先達たち

地元住民によるもてなし

小学生たちとの交流会

六十里越街道物語り2009

内なる光の旅路

鶴岡市

高坂・民田

◎藤沢周平のふるさと

藤沢周平こころの原風景

庄内の風土が生んだ作家、藤沢周平。
その豊な空間遺写は故郷の風景が大きく影響している。故の故郷から見る出羽三山の実風景を遡視しながら藤沢の風景学と庄内の風土に触れる。
■9月21日(月)高坂・民田

七五三掛

十王峠

大網

◎注連寺・森敦文庫

月山マンダラと森敦

『月山』の作家の森敦。至法大師縁の注連寺に彼の文庫がある。その空間に沈潜している森敦の精神世界と、出羽三山との関わりとは。
■9月21日(月)七五三掛

◎大日坊

即身仏のこころ

何故、東北が即身仏の中心地となったのか。そして、即身仏は何を語ろうとしているのか。その姿に籠められたこころの世界に触れる。
■9月22日(火)大網

◎弘法の渡し

赤川から見る結界の風景

結界は世界を結ぶ。映画「おくりびと」の石文は心と心を結ぶ結界の象徴。そのこころの原風景を、月山から流れる赤川の辺で探る。
■9月21日(月)押切余川

田麦俣

湯殿山

大峰峠

◎七五三地区の養蚕農家

「おくりびと」の家と月山

映画「おくりびと」の最初のシーンに登場する養蚕農家。月山を背景にひっそりと佇まるその空間に、出羽三山をめぐる原風景が見えてくる。■9月21日(月)七五三掛

◎花ノ木坂

小石を積む

賽の河原に小石を積み、街道づいに新たなる「石文」の伝承がはじまる。■9月22日(火)田麦

志津

◎由麦俣多層民家

岡本太郎のアングルは語る（地域交流会）

1962年、岡本太郎の「出羽三山への旅」の際に撮られた出形。そして田麦俣多層民家。そのアングルに、日本の原風景と太郎のメッセージが聞こえる！■9月21日(月)19:00田麦俣多層民家

◎おおぐぎ峠

「峠」の朗読会

おおぐぎ峠は、月山を二分けする峠として、村山と庄内を結ぶ。この峠に立ち、真壁仁の詩「峠」を朗読する。また、其々の思いを込めた石を賽の河原に積む。
この瞬間、山伏による法螺の演奏音が鳴り響く。
■9月23日(水)・おおぐぎ峠

◎湯殿山参籠所

芭蕉が歩いた出羽三山の空間（旅学講座1）

松尾芭蕉も歩いた三山参りの空間を、古い写真記録や絵葉書などを通して歩く。同時に、出羽三山信仰を支えた小さな山小屋の物語がいま始まる！『出羽三山絵日記』著者（渡辺幸任）による解説付き。■9月22日(火)19:00・湯殿山参籠所

峠にたつとき
過ぎ来し道は懐かしく、
開ける道は楽しい。
道は答えない。
道は誘うばかりだ。
真壁仁の『峠』

◎弓張平公園

現生人類、遙かなる旅の足跡探訪

月山は縄文文化のゆりかごである。月山山麓には数多くの縄文遺跡が散在するなか、弓張平遺跡は石器時代から縄文の全時代、そして弥生時代にかけての文化層が重なる極めて貴重な遺跡として知られる。ここで、現生人類の遙かなる旅の足跡を辿り、月山をめぐる始原の旅の原風景を考える。
■9月24日(木)・志津弓張平公園

◎湯殿山

丑歳御縁年の湯殿参

丑歳の湯殿参りは御利益が倍増すると言われ、かつて街道は行者さんの行列で多いに賑わった。これを記念し、元先達として関東の檀那場を歩きまわった木村清学氏による「湯殿参りの再現」を現地で行う。
■9月23日（水)10:00・湯殿山神社

◎志津温泉

出羽三山信仰の旅学（旅学講座2）

街道の番人であった志津の常夜灯に明かりを灯し、六十里越街道の復活と安全を祈願する。これを記念し、民族学者の赤坂憲雄氏と、出羽三山信仰の研究家である内藤正敏氏をお招き、斎藤茂吉と出羽三山をめぐる信仰の本質と旅学を展観する。■9月23日(水)19:00・志津温泉つたや

◎弓張茶屋跡

道智道とつながる街道

置賜から始まる「道智道」の痕跡を探る。最上木遷とともに「つながる街道」のシンボルとして、道智道が現代によみがえる。
■9月24日(木)10:30頃・弓張平公園内

◎岩根沢三山神社(旧日月寺)

東北の鼓動と息吹（地域交流会）

三山神社のいろりの間の空間は、東北の風土と息吹を今に伝える。この空間で地元の太々神楽と現代舞踊、斎藤茂吉、丸山薫の詩歌朗読会が開かれる。
■9月24日(木)19:00・岩根沢三山神社

水沢

岩根沢

西川町

寒河江市

◎寒河江市

はるかなる紅花の旅（地域交流会）

1977年、真壁仁が紅花の源流を求めて西アジアを旅した。この際、同行したカメラマンによる映像記録が残されている。地元郷土史研究家の最上川と紅花の歴史が語られたあと、映画の上映会を行い、遙かなる紅花の旅路を追跡する。
■9月25日(金)19:00・寒河江市・一簡

最上川

◎水沢

街道の小学校との交流会

六十里越街道沿いにある水沢小学校の生徒たちと交流会を開き、街道の復活と地域の将来を託す。
■9月24日(木)西川町・水沢小学校

中山町

◎旅籠町湯殿山神社

到着記念行事

「よみがえる」六十里越街道を記念し、里の宮湯殿山神社においてお祓いを行う。また、街道の番人である「市神」を祭る。その後、文翔館の広場にて「太真」による太鼓演奏会が開かれる。

道智道

◎長崎

ひろがる街道の交差点・長崎港

近代化以前、交通と交易で栄えた最上川は長崎にて六十里越街道とクロスする。長崎港では「ひろがる街道」をテーマとし、街道を歩いた人々と最上川を下ったカヌー隊とが地域住民を交えて交流する。また、船乗りたちが食べていた「ほうたら煎煮」の味が再現される。
■9月26日(土)12:00—13:00
中山町長崎のせせらぎ公園

◎船町

義川斎定信が見た風景

江戸時代に「湯殿山道中一覧」を残した地元出身の画家、義川斎定信。狩野派に学んだ彼の絵に見る湯殿山参りの風景を須川の辺で眺める。
■9月26日(土)船町・舟渡し場跡

山形市

街・道・は・自・然・と・歴・史・と・生・活・文・化・を・一・つ・に・つ・な・ぐ

今回の鶴岡―山形の街道空間では、「藤沢周平の原風景」、「森敦の注連寺」、「映画おくりびとの家」、「岡本太郎の愛した多層民家」、「芭蕉が歩いた出羽三山の空間」、「真壁仁と大岫峠」、「現生人類の旅跡弓張平」、「東北の息吹三山神社」、「斎藤茂吉の三山参り」、「丸山薫の岩根沢」、「平泉時代の栄光慈恩寺」、「最上水運との交差路長崎」、「義川斎定信の龍門寺」など多くの歴史と芸術文化に関連するコンテンツが再発見された。また、「庄内平野の水田」、「藤沢周平の民田茄子」、「行者の力餅」、「松根の豆汁」、「大網の漬物」、「田麦俣の山菜料理」、「参籠所の精進料理」、「岩根沢の六浄豆腐」、「海味の漬物」、「長崎のボウダラ芋煮」といった数多くの生活文化遺産、そして「千手ブナ」、「ブナの原生林」、「にがり場」、「湯殿御神体」、「湯殿の遥拝所」、「石器産地の石跳川」、「竜池」、「五色沼」、「寒河江川」、「最上川」などの自然遺産が再発見・再認識できた。さらに、宿泊先で夜の旅学講座と地域交流会が 5 回開かれ、六十里越街道の意義と可能性について地域住民とともに認識共有が図られた。すべてのポイントでの出来事は映像や画像、音声記録に残した。さらにＧＰＳ計測を行い、空間情報を収集した。主なものがたりを次に示す。

□藤沢周平の原風景を辿る

今回の六十里越街道をゆくでは鶴岡庄内神社から出発し、南に向ってまもなく金峰山の麓に出る。この周辺は月山と鳥海山を遠望できる水田地が広がり、庄内平野の魅力が伝わる街道空間である。この金峰山のふもとに藤沢周平の生誕地跡があり、近くの民田地区には「民田茄子」が名物として知られる。藤沢の『たった一撃』という小説にも登場する地元ならではの伝統野菜で、漬物用に適した小ぶりの固い実が特徴である。藤沢は様々な時代小説のなかで、生まれ故郷庄内に因んだ歴史文化を多く取り入れている。とくに金峰山をはじめ羽黒山、月山、鳥海山に囲まれた庄内平野の田園風景を最愛し、こころの原風景となっていると生前に話しているが、六十里越街道は庄内の田園風景を通るルートとなっている。参加者たちは、刈り入れ前の田圃の黄金色がまぶしい秋の畦道を歩き、民田茄子の農家に立ち寄って鶴岡の風物詩に直に触れ、さらには藤沢周平と縁のある地元住民から鶴岡時代の藤沢について語られるなど、生活と芸術文化的な街道の姿を体験できた。

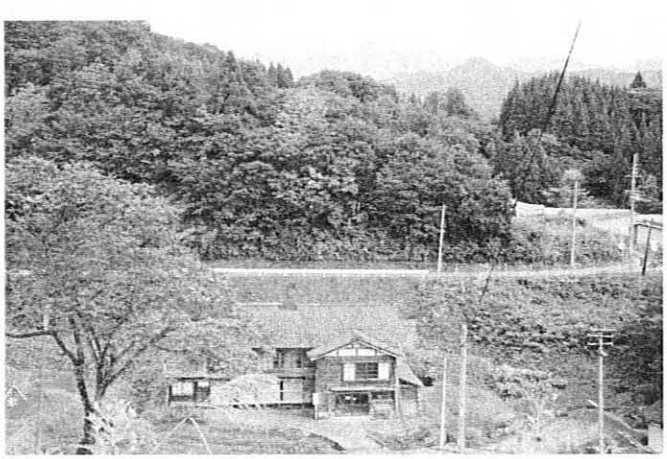
藤沢周平の生誕地近く

□森敦の注連寺

櫛引町の松根から月山に入る山区間がはじまり、十王峠を越えるとすぐに注連寺に出る。小説『月山』で芥川賞を受賞した森敦はこの寺に身を寄せて執筆に励んだという。注連寺は弘法大師ゆかりの寺院とされるが、この一角に「森敦文庫」がある。森敦は真言密教の本意にせまる姿を、「月山」という実際空間から見出そうとし、小説『月山』を描いたと考えられる。月山が月山である所以を探る彼の旅に、生と死を一元の世界として捉えてきた現代以前の本来的な精神風土が垣間見える。なぜ人は生まれて死に、どこへ向かうのか。という「生の哲学」を問う道場としての月山を見つめていたのである。月山をめぐる彼の旅は、人はなぜ旅をするのかという根本問題に対するメッセージがある。歩く会の参加者たちは、自分自身が旅人の一人として、月山に抱かれる意味を森敦の世界を通して吟味する時間となった。

□映画『おくりびと』の家

注連寺の近くに映画『おくりびと』に登場する農家が二軒ある。人々がいやでも向き合わなければならない「死」を描いたこの映画は、人々の霊が眠る月の山の本然と見事に共鳴している。映画の一撮影地としての意味を越えて人々の心にひろがる所以である。「死」の姿から「生」を問いかけることによって、現代人のこころに光を差す。これは旅学における最重要なテーマであり、西行から芭蕉へとつながる精神文化論でもある。しかし、人々の記憶に刻まれ、語り継がれ、尋ねる足跡が絶えないものこそ、生きた文化遺産と言えるのではなかろうか。過疎化が進み、消えていく一農家の運命が新たな文化遺産として生まれ変わることは、六十里越街道の再生にも関わる大変重要な問題でもある。参加者たちは地元の先達に映画と撮影話を聞きながら、『おくりびと』と出羽三山信仰との関わりや、そして地域問題など、様々な思いをはせるひと時となった。



映画「おくりびと」に登場した養蚕農家

□岡本太郎が愛した多層民家

七五三地区をでて本格的な山区間に入ったところに田麦俣地区に出る。1962年10月、出羽三山の旅で山形を訪れた岡本太郎は、田麦俣の茅葺の多層民家に心が惹かれて多くの写真記録を残した。彼の写真には近代化で失われていく日本の原風景が写っているが、とくに多層民家に対する思いは強く、太郎のアングルは今でも地元の人々の心に刻まれ語り継がれている。かつては番所が設けられ街道を行き交う多くの人々で賑わった田麦俣。しかし、現在は典型的な中山間地域として限界集落に近いものがある。茅葺の多層民家を愛した太郎のために、川崎市の岡本太郎美術館に古民家が寄贈された逸話を残しているが、現在の田麦俣に残っている茅葺古民家はたったの二軒のみとなっている。茅葺古民家では地域交流会が開かれ、太郎が残した田麦俣の「アングル」を通して近代化以前のこころの原風景が語られた。この上、地域の未来に関わる茅葺古民家の再生について、参加者たちとの意見交換も行われた。

□芭蕉が歩いた出羽三山の空間

元禄 2 年に松尾芭蕉は「奥の細道」の旅に出る。この際、三山参りを果たすが、尾花沢から最上川を下って羽黒山に行き、ここから月山を登拝し湯殿まで往復している。羽黒山から登拝する表参りは長い山岳区間であり、移動手段が歩きしかない時代では容易いルートではなかった。しかも芭蕉らは月山頂上の笹小屋で仮眠をとって湯殿までピストンする日程を考えると、芭蕉の「忍者説」が噂されるのも不思議ではない。ところが、六十里越街道が出羽三山参りに導くルートでもあったことを考慮した場合、芭蕉の歩いた三山参りの空間は街道の沿線であり、同時に主体でもある。すなわち、六十里越街道は出羽三山参りに欠かせない「八方七口」につながるルートとして認識されるべきであって、決して一本道の単一ルートに制限すべきではない。今回は、二日目の宿泊先であった湯殿山参籠所で地域交流会を開き、かつての登拝ルートの空間性を古い絵葉書や写真資料などを通して概観した。月山の自然風土に溶け込んだかたちで営まれていた小屋や茶屋などを通して、芭蕉が歩いた時間と空間がよりリアリティなかたちで再現された意義は大変大きい。

□真壁仁と「大岫峠」

村山と庄内、すなわち陸と海を結ぶ六十里越街道は月山の大岫峠にて二分される。言いかえると、この峠で二つの世界が一つにつながるわけだが、とりわけ眼下に村山地域が広がり、遠くは奥羽・朝日山脈が全貌できて最たる風景ポイントとなる。こういった意味で六十　里越街道には十王峠、賽の峠、二の峠などがあるなか、大岫峠はその象徴的な場所となる。

大岫峠で鳴り響く山伏の法螺貝

明治時代には郵便配達の際に、郵便物が交換されて双方に情報を伝えたという大岫峠。月山を越える街道の「峠」とあって様々な思いが行き交うこの場所からは、湯殿山が拝められる。この峠に小さな賽の河原があり、参加者たちはここに其々の思いを込めて小石を積んだ。街道の歴史の時計が再び針を動かす瞬間でもあり、これを記念に山伏による安全祈願の祈祷と法螺貝が鳴り響いた。さらに、山形が生んだ農民詩人の真壁仁の「峠」という詩が朗読され、六十里越街道に込められた現代的意義を参加者たちは考えるひと時となった。

□出羽三山信仰と湯殿

湯殿参りを果たしたあと、大岫峠を越え志津に降りて地域交流会を開いた。今回は内藤正敏氏と赤坂憲雄氏を招いて出羽三山信仰の本意について触れることができた。湯殿山参りが盛んになったのは江戸後期である。少なくとも18世紀ころには全国規模まで広がり、関東一円に檀那場が形成され年間数万人の人々が出羽三山を目指した。なぜ彼らが東北の地まで列をつくってお参りしたのだろうか。その真意に出羽三山信仰の本来的な姿がある。出羽三山信仰を論じる際、そもそも三山信仰とは何かを考えなければならない。出羽三山以前に熊野三山があり、その前には大和三山がある。そして三山信仰の伝統は大陸にもつながるアジア的な文化事象であり、陰陽五行と易といった道教思想にまで遡る。仏教以前の三山は蓬莱、方丈、瀛州の想像上の世界を表し、神仙が住む理想郷を表す。これらは理想とされる仙人境として霊山信仰を表し、現実の世界では具体的な山岳をあてて神と交信し、修業を行う場所でもあった。仏教伝来後になると、神仏習合のかたちで熊野三山は阿弥陀如来、観音菩薩、薬師如来の世界、すなわち大和からして浄土にあてられるようになる。あらゆる三山信仰の背景にはこの浄土思想があり、出羽三山においても基調を同じくする。ただし、出羽三山においては月山のなかでも湯殿という聖所を特に重要視し、湯殿山を大日如来にあてられるのは真言密教の即身成仏思想と関係すると言われている。このため、永遠なる「生命の連鎖」と「循環」という自然信仰が根底にあると言える。月山という大自然を出羽三山信仰の実態とし、永遠につながる生命連鎖の歓喜を目指して、多くの人々ははるばる東北の地へ足を運んでいたと考えられる。六十越街道はその歓喜の世界に導くルートもあったのである。

□現生人類の旅跡の弓張平

現生人類は出アフリカから始まる遥かなる旅を通して進化を成し遂げた。全ユーラシアそして地球上の様々な奥地へ移動を重ね、その過程で其々の地で文明を築き、伝播と共鳴を繰り返した。現生人類十万年の旅と言えるこの移動の波は西から東へ進み、ユーラシアの東果てである日本列島に辿りついた。その波は大きく旧石器時代と縄文時代、そして弥生時代にかけて山を成していた。彼らが日本列島に渡り、様々な旅を繰り返しながら、石器と土器などを残した。そして現代人は彼らの其々の遺伝子を受け継いでいる。一方、月山は先史時代においても豊かな自然の恵みをもたらし、多くの人々を養っていたと考えられる。月山山麓に見られる夥しい遺跡の数がそれを裏付けている。そういったなか、同じ場所で旧石器から全縄文時代、そして弥生の痕跡が見られる唯一の遺跡が六十里越街道に存在する。志津の弓張平である。ここには弓張茶屋跡がありその名を今に残しているが、むしろ遥かなる現生人類の旅の地としての意義は計り知れないものがある。この観点から今回は地元の考古学者を招き、旧石器と縄文時代の出土品を参加者に現場で紹介する時間が設けられた。大岫峠を越えて鶴岡側の麓には越中山遺跡があり、同じく旧石器と縄文時代の遺跡が存在する。しかも両地域の差は殆どなく、文化の伝播と交流の緊密さを示している。すなわち、人々が月山を越える道を開いて文化交流を行ったことを物語っている。この弓張平で現生人類のはるかなる旅の記憶がよみがえる。

現生人類の旅跡－弓張平

□東北の息吹の三山神社

出羽三山への登拝口として、岩根沢は八方七口の一つであった。こ岩根沢に三山神社があり、神仏分離以前まで日月寺という大伽藍を成していた。創建されたのは鎌倉時代とされるなか、天保 7 年に門前まで焼ける大火災を受けて全焼し、同じく天保 12 年に再建され現在に至っている。現在の本堂は約三千坪の

広さのこば葺き屋根を有し、室内は 412 枚の畳が敷かれ、柱周り約 5m、高さ15mの八角柱が立つ。これらは火災以前の雄大な規模を物語るが、神社となった今も仏教寺院の構造をそのまま残しており、多くの行者で賑わった時代を偲ぶことができる。この本堂は京や江戸の洗練された建築技術と比べると、全体的に完成度にかけている要素は多分にある。しかしながら、大雪の月山の風土に順応するための叡智が生かされている一方、規格外れの八角柱の間、囲炉裏の間、いくつもの重なる梁などに至っては「東北の息吹」さえを感じさせる。おそらく、「縄文の形質」そのものが滲み出ているに違いない。神経質で小細工な世界とはかけ離れた、太くてどっしりと構える「無垢の姿」に、「東北の息吹」と「縄文の形質」を見ることができる。今回は、大広間では神楽と現代舞踏が上演され、囲炉裏の間では暖をとりながら地域交流会が開かれ、東北文化と地域文化遺産の効用を堪能する時間となった。

□斎藤茂吉の三山参り

斎藤茂吉は 15 歳のとき父につられて三山参りを果たしている。以降、昭和 3 年、5 年に三度登拝を行った。昭和 5 年には 15 歳になった長男茂太をつれて岩根沢から登拝した。その際、岩根沢の伊東坊（旧十善坊）に寝泊りをしながら短歌を残している。翌日、笹小屋に泊まり湯殿参りを果たしたあと羽黒山に足を運んだが、この際にも多くの短歌をつくっている。そして、長男の茂太もまた自分の子供たちをつれて三山参りをし、さらに孫たちも子をつれて街道を歩いている。このような親から子へつながる三山参りに、「出羽三山信仰」の本来的な姿が垣間見える。さらに、茂吉は晩年に大石田に保養生活を送ったが、このときはじめて肘折に旅する。肘折は出羽三山参りの八坊七口の一つとして、秋田などから入る行者たちが目指す拠点であった。肘折から見える月山を最後に彼の三山参りの旅は終りを告げ、六十里越街道とも別れとなった。この茂吉だが、彼はひそかに元禄年間に三山参りを果たした松尾芭蕉を偲んでいたし、芭蕉はさらに西行を思いながら出羽三山に足を運び、俳句を残している。出羽三山信仰が「哲学と芸術の旅」となって、人々にさらなる思いをかきだしているのである。こういった意味で、出羽三山参りのルートでもある六十里越街道は、「思いの連鎖」を生じる道でもある。今回の「街道を歩く会」では街道に立つ歌碑で足を止め、茂吉の三山参りと「思いの連鎖」に触れることができた。

□最上川との交差路長崎

六十里越街道は中山町の長崎で最上川と交差する。日本海の産物を乗せた船は最上川の長崎に着いてから山形に入った。そして、山形から出羽三山を目指す人々は渡し船に乗って最上川を渡り、月山方面に入っていった。また、最上

川は羽黒山からの登拝を可能にする手段でもあり、多くの行者が川を下っていたが、松尾芭蕉もその一人であった。このように最上川は六十里越街道と同様に生活と信仰を支える道として認識される。この両者が一つにつながる唯一のポイントが長崎となる。一方、出羽三山信仰が盛んだったころ、山形は紅花の最大の産地として全国に名が知られていた。その殆どが長崎で船に乗せられ、酒田から日本海を辿って大阪や京都に入り、帰りには上方文化を運んでいた。長崎は「港」として日本海文化交流の玄関口でもあったのである。現在、港の面影は殆ど薄れているなか、中山町の下川が最上川とぶつかるところにかつての古い木柱列が残り、文化的景観の連続性も見られる。参加者たちは、地元の先達の案内でこの合流地点に立ち、生活と信仰を支えた最上川水運の歴史を学んだ。さらに、地元住民が河原で作った「ボウダラ芋煮」を頂きながら地域交流会も開かれ、生きた歴史と生活文化を直に触れるひと時となった。六十里越街道と最上川水運の交差を鮮明に取り上げることにより、県内一円はもちろん日本海まで「ひろがる街道」の姿がよみがえる。

最上川と交差する六十里越街道

□六十里越街道の将来

昨年に続き往還ルートの全行程は約 240km、「歩く会」や交流会の参加人数は延べ 370 名に及んだ（各自治体からの参加者を含めると 500 人を超える）。この間、街道の全ルートを GPS で計測できたうえ、200 箇所以上の「六十里越街道文化遺産」のポイントが登録・記載された。今回の活動で取り上げられた全てのコンテンツは街道空間で直接体験できたものである。とりわけ生活文化遺産に関しては、地域自治体の全面協力により、「街道を歩く隊」を各ポイントで待ち受けて「もてなす」かたちとなった。街道に関わる山形市、中山町、寒河江市、西川町、鶴岡市が連携し、行政単位を越えての協力体制が「六十里越街道」を通して見出されたのは意義深い。今後における六十里越街道の可能性はこういった地域の参画にあり、行・産・学と地域がさらなる連携を強め、新しい地域づくりの基盤とすべきである。「ふれあう・つながる・ひろがる街道」が目指すその先に、眠りから目を覚ます六十里越街道と、地域の未来像が重なってくる。

この際、六十里越街道文化遺産における修復・整備事業は必然的な要素となり、下記に示すように、これまでの「点的」な保護活動を乗り越え、地域を「創る」文化遺産の「面的」な可能性がはじめて提議されるであろう。地域文化遺産における「ものがたり」の創出は、地域をつくる「ものがたり」への第一歩となるに違いない。

（東北芸術工科大学　準教授　張　大石氏の報告より）

地・域・文・化・遺・産・の・未・来・図

地域を「創る」

六十里越街道文化遺産の広域連携事業

地域	区間	短期的課題	中期的課題	長期的課題
ハードウェアー		街道の可視化事業	街道の地域資源化事業	街道の文化創造事業
山形市	山形旧市街	①街道文化遺産リスト・風景ポイント作成 －主ルートと関連ルート沿い全般の地域文化遺産 －三山参り関連文化遺産 －絵図や文献、伝承などに見る景観ポイント発掘 －自然＋文化的景観ポイント発掘 －地域固有の生活文化ポイント発掘 ②徒歩ルート整備 －可視範囲内の連続的な案内表示 －隣接ルートの情報提示 －歩く地図・冊子作成 ③学術研究と認識共有 －地域の歴史文化研究：街道と文化人、出羽三山信仰、旅学など －シンポジウム開催 －地域文化交流：芸術文化祭 ④暦的なモデル・ツアー開発 －多様な時期・ルート/里・山先達養成プログラム ⑤街道専用インタネット整備 －電子媒体による充実した広報網の構築 ⑥地域教育機関の教材としての活用 －小・中・高校など地域教育機関の現場教育 －通過儀礼・元服登拝	①街道沿い関連文化遺産の保全整備 －旅籠や茶屋、問屋など伝統的建造物および文化財の修復・整備 －水運・船渡し場関連遺跡の整備 －小屋跡の発掘・整備・再現 －新時代の茶屋の開発（歩くための駅） －藁・茅ぶき古民家の整備・復元 －河川・森林の保全 ②街道の文化的拠点の整備 －長期滞在・着地型交流人口受け入れ態勢 －既存施設の連携・活用 －廃校舎・空き民家、公共施設の活用（芸術・文化プロジェクト） ③月山文化環状ロードの開発 －月山を取り囲む地域文化ツアー －奥の細道、最上川水運などとの連携 －鳥海山文化圏との連携	①広域モデル・ツアー開発 －全区間・関連区間・隣接街道を対象とした広域参加型ツアー －現代的な広域宿泊場の開発 －民間関連企業との連携 ②街道沿いの文化的な景観視野の整備 －風景ポイント間の連携による景観視野の拡大 ③21世紀型地域づくり －芸術・文化の創造と地域産業の活性化 －21世紀型地域社会形成の認識共有とビジョンづくり
中山町	長崎			
	寒河江市内			
寒河江市	八鍬			
	白岩			
西川町	網取			
	志津			
朝日村	湯殿山			
	田麦俣			
鶴岡市	大網			
	松根			
	鶴岡旧市街		活動対象地域：村山と庄内から置賜＋最上、近県、広域へ	
ソフトウェアー		◎垣根を超えてのピープル・パワー －地域市民活動の連携度の増進 ◎地域固有の伝統文化活性化事業との連携 －食文化、伝統民俗芸能、伝統工芸など	⇒	◎「地域文化ギルド」の育成：異種多元的性に富む組織（廃校舎・空家、店・放棄林野土地などの活用） 生活づくり＋風景づくり⟹心・身ともに豊かな地域社会 **21世紀型持続・循環可能な地域づくり**

文・化・遺・産・は・地・域・文・化・創・造・の・基・盤・で・あ・る！

（参考）街道文化遺産調査リスト

管理番号	分類番号	文化遺産名	所在地	北緯	東経	管理番号	分類番号	文化遺産名	所在地	北緯	東経
132	OH	文翔館	山形県山形市旅籠町	38° 15′ 23.4″	140° 20′ 27.7″	186	YH	三嶋神社	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 44.2″	140° 13′ 08.6″
133	YH	湯殿山碑	山形県山形市大字中野	38° 18′ 09.2″	140° 18′ 08.9″	187	OH	市川升次郎の墓	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 43.8″	140° 13′ 48.9″
134	YH	長谷寺	山形県山形市大字中野	38° 18′ 14.4″	140° 18′ 08.4″	188	YL	柿木茶屋跡	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 42.0″	140° 12′ 43.7″
135	YH	竹駒宮碑・湯殿山碑	山形県山形市大字中野	38° 18′ 17.3″	140° 18′ 05.2″	189	YL	電気橋	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 42.2″	140° 12′ 41.8″
136	YH	浄蓮寺	山形県山形市大字中野	38° 18′ 19.1″	140° 17′ 57.3″	190	YH	地蔵	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 42.0″	140° 12′ 36.5″
137	YH	向谷寺	山形県山形市大字中野	38° 18′ 19.5″	140° 17′ 55.9″	191	YH	墓所の湯殿山碑	山形県西村山郡西川町睦合	38° 24′ 45.4″	140° 11′ 36.6″
138	YH	YH	山形県山形市船町	38° 18′ 19.2″	140° 17′ 54.5″	192	YH	睦合の熊野神社	山形県西村山郡西川町睦合	38° 24′ 46.6″	140° 11′ 14.2″
139	YH	稲荷	山形県山形市船町	38° 18′ 21.9″	140° 17′ 33.4″	193	YH	梅沢の湯殿山碑	山形県西村山郡西川町	38° 25′ 09.5″	140° 10′ 20.6″
140	YH	延命地蔵尊	山形県山形市船町	38° 18′ 32.8″	140° 17′ 36.7″	194	YH	象頭山碑	山形県西村山郡西川町	38° 25′ 11.9″	140° 10′ 04.5″
141	YH	石塔	山形県山形市船町	38° 18′ 44.3″	140° 17′ 23.4″	195	OL	海神宮(山竹岡沼)	山形県西村山郡西川町海味	38° 25′ 20.9″	140° 09′ 28.9″
142	YH	地蔵	山形県東村山郡中山町向新田	38° 18′ 54.1″	140° 17′ 18.0″	196	YH	六角塔・正観世音	山形県西村山郡西川町海味	38° 25′ 19.8″	140° 09′ 17.4″
143	YH	十一面観世音	山形県東村山郡中山町向新田	38° 19′ 00.9″	140° 17′ 17.5″	197	YH	馬頭観音	山形県西村山郡西川町海味	38° 25′ 34.4″	140° 09′ 05.6″
144	YH	湯殿山碑	山形県東村山郡中山町向新田	38° 19′ 01.4″	140° 17′ 16.7″	198	YH	太郎不動尊	山形県西村山郡西川町海味	38° 25′ 46.9″	140° 08′ 12.2″
145	YH	大黒天	山形県東村山郡中山町達磨寺	38° 19′ 12.1″	140° 17′ 16.1″	199	YH	間沢の道分石	山形県西村山郡西川町間沢	38° 25′ 47.0″	140° 08′ 07.8″
146	YH	恭護寺	山形県東村山郡中山町達磨寺	38° 19′ 20.2″	140° 17′ 11.1″	200	YL	出羽屋	山形県西村山郡西川町間沢	38° 25′ 49.3″	140° 07′ 54.0″
147	YN	達磨桜	山形県東村山郡中山町達磨寺	38° 19′ 09.3″	140° 17′ 08.3″	201	YH	宝沢の大石	山形県西村山郡西川町間沢	38° 26′ 01.6″	140° 07′ 42.7″
148	YH	達磨寺	山形県東村山郡中山町達磨寺	38° 19′ 22.7″	140° 17′ 11.3″	202	YH	姥上不動尊	山形県西村山郡西川町間沢	38° 26′ 03.1″	140° 07′ 31.5″
149	YH	八幡神社	山形県東村山郡中山町達磨寺	38° 19′ 30.3″	140° 17′ 09.5″	203	YH	綱取神社	山形県西村山郡西川町綱取	38° 26′ 14.1″	140° 06′ 54.4″
150	YH	新田町公民館湯殿山碑	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 19′ 43.7″	140° 17′ 05.5″	204	YL	伊藤坊(旧十善坊)	山形県西村山郡西川町岩根沢	38° 27′ 22.7″	140° 06′ 06.1″
151	YH	八坂神社	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 20′ 02.9″	140° 17′ 00.3″	205	YH	道分石(個人宅)	山形県西村山郡西川町水沢	38° 26′ 02.2″	140° 05′ 59.6″
152	YH	柳町公民館	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 20′ 04.4″	140° 16′ 57.6″	206	YH	本道寺口宗戒所	山形県西村山郡西川町水沢	38° 26′ 17.2″	140° 04′ 24.3″
153	YH	川端公民館湯殿山碑	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 20′ 09.1″	140° 17′ 04.5″	207	MH	四ツ谷の石碑群	山形県西村山郡西川町	38° 28′ 13.1″	140° 00′ 36.3″
154	YH	吉峯神社石碑群	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 20′ 12.6″	140° 17′ 14.4″	208	MH	湯殿山碑・道分石	山形県西村山郡西川町志津	38° 28′ 21.9″	140° 00′ 11.2″
155	YH	金比羅山碑	山形県東村山郡中山町大字長崎	38° 20′ 34.0″	140° 17′ 02.2″	209	MH	石跳沢橋	山形県西村山郡西川町	38° 30′ 00.5″	139° 59′ 50.4″
156	YH	妙栄寺	山形県寒河江市大字島	38° 20′ 37.0″	140° 16′ 59.0″	210	MH	二ノ峰	山形県鶴岡市田麦俣	38° 31′ 31.4″	139° 58′ 09.6″
157	YH	羽黒山神社	山形県寒河江市	38° 20′ 42.9″	140° 16′ 51.8″	211	MH	雨池	山形県鶴岡市田麦俣	38° 31′ 40.9″	139° 58′ 06.2″
158	YH	真覚寺	山形県寒河江市字三条	38° 21′ 53.5″	140° 16′ 37.2″	212	MH	カラ沢	山形県鶴岡市田麦俣	38° 31′ 46.3″	139° 58′ 08.4″
159	YH	稲荷	山形県寒河江市幸町	38° 22′ 15.7″	140° 16′ 41.6″	213	MH	一里塚(菅谷地)	山形県鶴岡市田麦俣	38° 31′ 59.9″	139° 58′ 08.2″
160	YH	沼川橋手前の石碑群	山形県寒河江市幸町	38° 22′ 19.2″	140° 16′ 41.3″	214	MH	鶴ヶ池	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 08.2″	139° 57′ 57.4″
161	YH	大日堂	山形県寒河江市本町	38° 22′ 25.0″	140° 16′ 34.5″	215	MH	ぎんげ坂	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 19.8″	139° 58′ 10.1″
162	YH	滝田門観音堂	山形県寒河江市本町	38° 22′ 28.5″	140° 16′ 28.6″	216	MH	湯殿山神社(御神体	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 29.7″	139° 59′ 10.8″
163	YH	西福寺	山形県寒河江市本町	38° 22′ 30.3″	140° 16′ 29.9″	217	MH	姥権現	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 29.3″	139° 58′ 58.1″
164	YL	菅原屋旅館	山形県寒河江市本町	38° 22′ 25.9″	140° 16′ 24.9″	218	MH	湯殿山神社 大鳥居	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 24.5″	139° 58′ 31.8″
165	YH	宮碑	山形県寒河江市八幡町	38° 22′ 41.8″	140° 16′ 17.3″	219	MH	旧薬師小屋跡	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 17.5″	139° 57′ 51.2″
166	YH	寒河江又旅関連室	山形県寒河江市八幡町	38° 22′ 39.3″	140° 16′ 16.9″	220	MH	湯殿山碑	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 29.0″	139° 57′ 42.4″
167	YH	稲荷	山形県寒河江市	38° 23′ 37.1″	140° 15′ 38.3″	221	MH	寺跡	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 31.1″	139° 57′ 41.9″
168	YH	慈恩寺	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 36.5″	140° 15′ 02.7″	222	MH	遥拝所	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 27.5″	139° 57′ 24.7″
169	YH	小板地蔵大菩薩	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 34.2″	140° 14′ 56.9″	223	MH	茂吉歌碑	山形県鶴岡市田麦俣	38° 32′ 53.0″	139° 56′ 57.2″
170	YH	熊野神社鳥居	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 34.3″	140° 14′ 55.5″	224	MH	後藤茶屋	山形県鶴岡市田麦俣	38° 33′ 22.7″	139° 56′ 03.4″
171	YH	観音寺	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 34.0″	140° 14′ 55.4″	225	MN	ラブラブナ	山形県鶴岡市田麦俣	38° 33′ 25.4″	139° 56′ 00.4″
172	YH	縁切り地蔵	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 30.1″	140° 14′ 52.6″	226	MH	塚なら	山形県鶴岡市田麦俣	38° 33′ 37.8″	139° 55′ 45.2″
173	YH	下道地区公民館	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 28.7″	140° 14′ 49.0″	227	MN	戦神ブナ	山形県鶴岡市田麦俣	38° 33′ 48.8″	139° 55′ 34.6″
174	YH	子安地蔵	山形県寒河江市慈恩寺	38° 24′ 28.0″	140° 14′ 47.1″	228	MH	渋谷家住宅	山形県鶴岡市田麦俣七ツ滝	38° 34′ 12.9″	139° 55′ 17.6″
175	YH	道分地蔵	山形県寒河江市	38° 24′ 27.5″	140° 14′ 45.8″	229	MH	湯殿山碑	山形県鶴岡市	38° 34′ 17.1″	139° 55′ 22.3″
176	YH	六地蔵	山形県寒河江市	38° 24′ 27.6″	140° 14′ 34.2″	230	MH	青面金剛	山形県鶴岡市	38° 34′ 18.6″	139° 55′ 22.2″
177	YV	陣ヶ峰	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 28.7″	140° 14′ 23.9″	231	MV	「おくりびと」の家	山形県鶴岡市大網七五三掛	38° 36′ 10.2″	139° 53′ 10.0″
178	YH	石碑群・御室	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 29.6″	140° 14′ 22.6″	232	TV	新山神社	山形県鶴岡市松根	38° 38′ 42.9″	139° 52′ 28.3″
179	YH	大神宮碑・湯殿山碑	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 30.2″	140° 14′ 20.9″	233	TH	天澤寺 清正閣	山形県鶴岡市丸岡町の内	38° 40′ 55.3″	139° 49′ 51.7″
180	YH	湯殿山碑	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 37.1″	140° 13′ 57.5″	234	TH	丸岡城跡	山形県鶴岡市丸岡	38° 40′ 52.6″	139° 49′ 50.9″
181	YL	富士屋旅館跡	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 34.1″	140° 13′ 51.8″	235	OL	民田	山形県鶴岡市民田	38° 42′ 07.7″	139° 49′ 21.6″
182	YH	八幡神社	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 36.1″	140° 13′ 40.1″	236	TV	六所神社	山形県鶴岡市民田	38° 42′ 08.4″	139° 49′ 31.4″
183	YL	岩城屋萬子宿	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 36.7″	140° 13′ 38.9″	237	TH	本住寺	山形県鶴岡市三光町	38° 43′ 23.0″	139° 49′ 31.0″
184	YH	隼山神社碑	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 38.0″	140° 13′ 30.0″	238	TH	七日町観音堂	山形県鶴岡市本町	38° 43′ 27.0″	139° 49′ 32.8″
185	YH	十八夜供養塔	山形県寒河江市日岩	38° 24′ 42.9″	140° 13′ 14.4″						

（4）モデルツアー（ファムトリップ）の実施・検証

(1)行　程

	月　日	行　　程
1	10 ／26 （月）	集合 9:00 ガイド　9:30　10:00　ガイド　11:00 山形／霞城公園（城下町案内／誓願寺）――――――中山／河川敷／柏倉家―――― 軽食：ボウダラ芋煮 11:20　ガイド　車窓　12:20　12:50　13:10 ――――寒河江／慈恩寺――――臥龍橋・白岩――――西川／玉貴―――― 昼食：山菜料理 13:25　14:40 ――――――岩根沢三山神社　／　本道寺口之宮湯殿山神社―――――― 15:00　トレッキング　16:30 ――――四谷ツ谷山の神　・・・・・・・・・・・月山志津温泉 17:00～　プレゼンテーション、意見交換会 （終了後に交流会）　宿泊：月山志津温泉／つたや
2	27 （火）	8:00　9:00　ガイド　10:00　トレッキング 志津温泉――――湯殿山本宮参り――――花ノ木坂（国道）・・・独鈷茶屋跡・・・・ 14：00　14:30 千手ブナ・・・護摩壇石・・・・田麦俣（七ツ滝）――――注連寺（即身仏）―――― （昼食：弁当） 15:40　16:00　16:30 丸岡城跡――――湯田川温泉 宿泊：湯田川温泉／九兵衛旅館
3	28 （水）	9:00　9:30　10:00 湯田川温泉――――鶴岡／松ヶ岡開墾場／米作り用具収蔵庫／庄内映画資料館―――― 10:20　11:00　11:30 ――庄内映画村――アルケッチャーノ――――山形駅解散16:00頃 昼食

(2)出席者

会　社　名	所　属・役　職	氏　名
㈱びゅうトラベルサービス	旅行事業部総務・企画グループ主任	横山　亜希子
近畿日本ツーリスト㈱	東北仕入センター所長	青柳　睦夫
近畿日本ツーリスト㈱	仙台イベントコンベンション支店支店長	蛭間　雅人
さんぽみち総合研究所㈱	旅行事業部研究員	沼田　洋一郎
㈱ＪＴＢ	東日本国内商品事業部仕入企画一課	臼倉　真理子
㈱ＪＴＢ東北	交流文化事業部地域交流ビジネス推進部長	阿部　昌孝
㈱ＪＴＢ東北	庄内支店	荒井　朋之
㈱ＪＴＢ東北	山形支店ＭＩＣＥ営業グループリーダー	佐羽根　博一

地元関係者

組　織　名	所　属・役　職	氏　名
東北芸術工科大学	准教授	張　　大石
西川町	副町長	松田　武志
山形県	総合政策室長	安達　正司
寒河江市	商工観光課観光振興係長	猪倉　秀行
中山町	総務企画課統括	橋本　修一
西川町	産業振興課商工観光係長	工藤　信彦
西川町	月山朝日観光協会	佐藤　　徹
西川町	総務企画課課長補佐	後藤　忠勝
鶴岡市	朝日庁舎商工観光課主査	阿部　重則
(財)東北産業活性化センター	常務理事	冨澤　辰治
(財)東北産業活性化センター	プロジェクト振興部課長代理	國井　紀王士
㈱東北地域環境研究室	代表	志賀　秀一

(3)総合評価

今回のファムトリップを通して、六十里越沿線の各市町が保有している地域資源の多様性を改めて再認識することができた。

・山形市をスタートとして市街地の古い建物が点在する七日町通り、文翔館、霞城公園等歴史を感じる街並みは近年の観光には欠かせない観光資源であり、六十里越街道の入り口として存在が色濃く残っていると感じた。

・中山町の柏倉家は、現在も生活している古民家を公開していることから、他所から訪れた方にとっては建物の素晴らしさ、昔の障子張りの技術など、とても興味深い施設となっている。

・寒河江市で、多くの国宝を有する慈恩寺を直接ご住職から解説していただき拝観ができたため、非常にわかりやすく感激した。

・西川町の玉貴の山菜料理は、レベルの高さを感じた。優れた調理方法で地元の食材を使い、ボリューム感、品揃え、サービスなどいずれも満足できるものであった。また、席から眺める渓流や紅葉もすばらしく、料金もリーズナブルなものであった。

・岩根沢三山神社、本道寺口之宮湯殿山神社は荘厳なムードが漂い、見応えがあり、存在感のある施設であった。

・月山志津温泉の旅館つたやは、全体としてレベルの高さを感じた。トレッキングや山歩き等の自然体験の宿泊拠点としても非常に適しており、出羽三山の山ふところの湯に浸かりながら、高質な時間を過ごせる宿だと思う。

・湯殿山本宮では、静寂なたたずまいの中、身を清め、裸足での参拝と、まさに非日常の世界を味わうことができた。

・トレッキングコースは、広がるブナの林の中を、先人の足跡を辿りながら自然とのふれあいを楽しむことができるとともに、ストーリー性を感ずるおもしろさがあった。

・七ツ滝は、ビギナーでも歩きやすく、沿道の景観もすばらしい。

・注連寺の即身物は、非常に貴重なものであり、湯殿山信仰と合わせてお参りすることにより、さらに興味深いものになると思った。また、過去の歴史にとらわれず、未来を見据えて制作された現代人の顔の天井画には感動させられた。そして、案内時の説明内容も大変良かった。

・湯田川温泉は、宿場町の雰囲気を感じさせ、宿泊先の九兵衛旅館もそれにふさわしい建物であった。施設は清潔感があり、海、山の幸をふんだんに使った料理やもてなしは、十分に満足させるものであった。

・鶴岡市の松ヶ岡開墾場、庄内映画村は、地域の歴史、資源を十分に活用しており、地域の力を感じる。庄内映画村は、造りこまれた建物ではなく、ロケが入ることにより、ロケセット、建物、敷地の景観が変わっていく仕組みは、他の映画村と違い、これからのテーマパークのあり方と可能性を感じることができた。

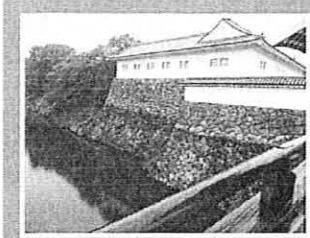
・アルケッチャーノは、素晴らしいの一言である。

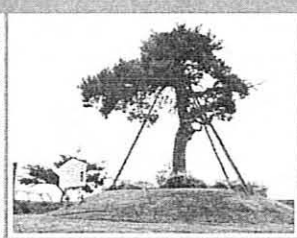
以上、今回のコースでは、非常に興味深く素晴らしい場所であり、力を備え、可能性を秘めた資源として感じた。

これまで、それぞれが点としての存在に過ぎなかったものが、六十里越街道のテーマでつながることによって、点から線、線から面へと、街道全体の魅力を発揮することができると思われる。

今後は、さらに連携を深め、資源を磨くことを基本として、国内はもとより、異文化を求める外国人に対して積極的な情報発信につとめることが必要と思う。

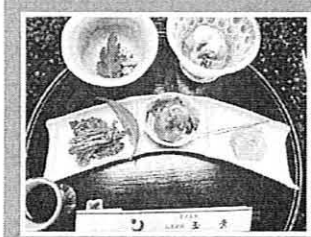
■ 主なポイント

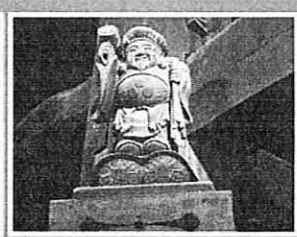

鶴城公園


鍋掛松

柏倉家

慈恩寺


玉貫


岩根沢三山神社

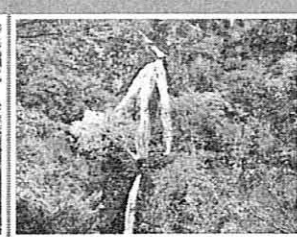
本道寺口之宮湯殿山神社

月山志津温泉

湯殿山本宮

街道

千手ブナ


七ツ滝

田麦俣

注連寺

丸岡城跡

湯田川温泉

松ヶ岡開墾場

庄内映画資料館

庄内映画村

アルケッチャーノ

(5)広域連携祭の開催

六十里越SAKE街道

この街道に“うまい酒あり”“うまい肴(さかな)あり”

出羽三山（月山、湯殿山、羽黒山）は、東日本最大の霊場といわれ、西のお伊勢参りに匹敵し、東北はもとより関東、北陸、中部地方からも人々が列をなして賑わいました。その参詣の道である六十里越街道には、旅籠や休み場が数多くあり、旅人である行者に飲食を提供する機能も優れていたと伝えられています。この街道沿線には、旅人の喉をうならせた“うまい酒”があり、“うまい酒”をさらに際立たせる、この地ならではの肴がありました。

時は流れて現在、この街道には、いまだ往時から続く老舗の味、そして、磨きをかけた現代の味が軒を連ねています。この六十里越街道沿線の銘酒と珍味を、現代の旅人に味わっていただくために、「六十里越SAKE街道」を案内します。

■六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト：リーディング事業「広域連携祭」

六十里越SAKE街道 “こぼれ話”

こぼれ話1

“密造酒”事件が語る三山参詣の賑わいぶり

江戸時代後期の天明元年（1781）、六十里越街道筋を含む最上郡内の名主や大庄屋たちが、ある申し合わせをして各村の人々に知らせた。

「隠し造り致し候者これ有り候えば、何村にでも打ち寄り、呑み尽くし候様（略）」（触れ書きの一部）。

密造酒を発見したら、どこの村であろうと押しかけて、酒を呑みつくしていい、というのである。

前年の凶作を受け、酒造と酒売買の禁止などを定めたもので、天明の大飢饉が始まった天明3年には、再び同様の申し合わせをしている。天明の大飢饉は天明7年（1787）まで続くことになるが、その天明7年正月、本道寺と岩根沢日月寺に、白岩山内の人々が殺到する。両寺に行人用の密造酒があることを察知し、呑み干したというのだ。

人々は白岩宿の宿屋3軒にも、「酒改め」と称して押しかけ乱暴した。その数は600～700人にも達し、柴橋代官所から多くの手代・足軽が出動してようやく騒ぎを鎮めたといわれる。

触れ書きに背いて“密造”になっても、行人用の酒は用意して遠来の参詣客を迎えなければならなかった。それほど、三山の別当寺や街道の宿場が繁盛していたことを物語る事件として、語り継がれている。残念ながら、人々が呑み干した酒の量は定かでない。

※無明舎出版『六十里越街道』抜粋

こぼれ話2

西川町岩根沢の「六浄豆腐」や、寒河江市白岩の岩城屋で新潟の上等糯米を原料として造る銘菓「淡雪」などは、三山参詣で賑わう街道を抜きにしては考えられないものである。

六浄豆腐を伝授した人は京都の六条の人であったため、伝授された豆腐は六条を付して「六条豆腐」といい、三山信仰のメッカに因んで、後に六根清浄の「六浄」を付してそう呼ぶようになったものという。

※六十里越街道文化研究会発行「六十里越街道にかかわる歴史と文化」抜粋

六十里越
SAKE街道
酒&肴(珍味)
月山山菜ワイン「赤・白」
地ビール月山
山ぶどう漬
六浄豆腐
あらびきソーセージ
純米大吟醸 月山
大吟醸 寿久蔵
月山ワイン「ふるさと赤」
野菜・山菜かす漬
ぜんご漬
柿大根
小茄子からし漬
すももワイン
大根たまり漬
秘伝豆漬
六十里越街道
鶴岡市
西川町
寒河江市
中山町
山形市

【参考資料】
プロジェクトに関する新聞記事等

六十里越街道プロジェクト

官民でプラン策定

日本海きらきら羽越観光圏

3県が一体、推進協

広域連携で交流人口増

かつて出羽三山への信仰の道として庄内と内陸を結んだ六十里越街道の文化的価値を再認識し、地域活性化に向けた連携強化を図ろうと、県や沿道自治体、企業、団体による交流促進プロジェクトが発足し五日、第一回委員会が山形市の香味庵まるはちで開かれた。二〇一〇年三月をめどに具体的なアクションプラン策定などを目指していく。

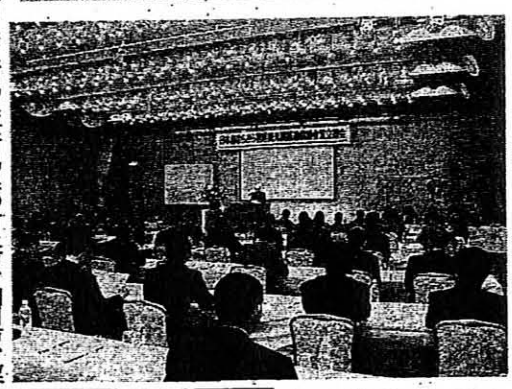
六十里越街道をめぐってはこれまで、西川町や鶴岡市朝日地域を中心にさまざまな活動が展開されてきたが、より広域的視点から街道の魅力を掘り起こし、交流人口の拡大や地域活性化に結び付けようと今回のプロジェクトが発案された。

構成メンバーは、街道に沿って鶴岡―西川―寒河江―中山―山形の五市町と県の行政機関のほか、学識経験者、観光関連企業、地域活動団体代表らが参加。清水慎一JTB常務を委員長とする七委員の「六十里越街道地域広域連携委員会」と十人の戦略プロジェクトチームを組織し、財団法人東北産業活性化センター（会長・高橋宏明東北電力社長）が〇八、〇九年度の二カ年事業全体を取りまとめる。

六十里越街道を軸にした連携、交流促進に向け官民のプロジェクトが発足した＝山形市・香味庵まるはち

第一回委員会では、六十里越街道と周辺の地域資源について現状を再確認。来春に向け交流プロモーション指針とアクションプラン策定を進めながら、〇九年度はリーディング事業の実証実験として①モデルツアー実施②広域連携祭の開催③広域シンポジウム開催④連携講座開設⑤街道地域連絡会議設置―に取り組むスケジュールが同センターから示された。

意見交換では、メンバーから「六十里越街道は最上川と並び県全体をつなぐ軸。周辺地域も巻き込んでいこう」「点在する地域資源を結ぶ回遊性が重要。精神文化の視点は現代にマッチする」「地元住民が元気になる仕掛けを探りたい」といった声が出された。



庄内地域と秋田県、新潟県など三県の十市町村が一体となった「日本海きらきら羽越観光圏推進協議会」の設立総会が五日、鶴岡市の東京第一ホテル鶴岡で開かれた。国の総合的な支援を目指し、日本海きらきら羽越観光圏の整備に力を入れていく。

「観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進に関する法律」に基づき発足。本県の鶴岡市、酒田市、三川町、庄内町、遊佐町、戸沢村のほか、秋田県のにかほ市、新潟県の村上市、関川市、粟島浦村の十市町村の観光関係者らが参加した。松尾芭蕉の「奥の細道」のルートとしても知られる。日本海の夕日の美しさ、地域文化の奥深さ、出羽三山や鳥海山の精神文化など豊富な観光資源を利用し、一体的な情報発信や体験型観光を展開する。

観光圏整備計画は今年四月一日から二〇一四年三月三十一日までの五年間。ブランド戦略として、「日本海、山の神々、舟下り、食を通じたおもてなし」をテーマに二泊三日以上の滞在型観光を目指す。〇九年度は五十一事業を計画、事業費は四千八百三十六万円。十市町村の観光客数を千七百六十五万人（〇七年度）から二千三十万人（一三年度）と年平均3％の増加、宿泊者数を百七十六万人（〇七年度）から百八十七万人（一三年度）と年平均1％のアップをそれぞれ見込む。

総会には関係者約百八十人が出席。準備を進めてきた庄内観光コンベンション協会会長の富塚陽一鶴岡市長が「観光は地域活性化の切り札になる。この観光圏を世界に発信していこう」とあいさつ。会長に富塚鶴岡市長を選んだ。今月二十日までに観光圏として申請、今年四月の国土交通大臣の認定を受けたい考え。

3県の10市町村が一体となって観光整備を目指す日本海きらきら羽越観光圏推進協議会の設立総会＝鶴岡市・東京第一ホテル鶴岡

2009年（平成21年）2月13日（金曜日）
山形新聞

〈2009年2月13日〉

社説 観光柱に広域連携

問われる 新たな地域力

交流促進は地域活性化の切り札になっている。その交流促進のために広域圏で、あるいは県境を越えた市町村間で連携しての取り組みが活発化している。すでに観光庁から「観光圏」の認定を受けた会津・米沢地域観光圏整備推進協議会は広域観光圏ナビゲーションシステムの実証実験を開始した。また庄内と内陸を結んだ六十里越街道の文化的価値を再認識して交流拡大につなげようと沿道の五市町と県、民間団体などがアクションプランを策定、庄内と最上の一部地域と県境を挟んで近接する新潟、秋田県の計十市町村が共同事業に取り組み、「観光圏」の認定も目指すことになった。

この三例については過去にも交流や連携の実績があり、より太く、深く、広く結び付きを強化して具体的な事業に取り組もうという点に特色がある。その背景には、人口減少時代に入って、地域活性化には交流人口の増加が必至で、しかも多くの観光客や旅行者が自然景観、精神や歴史文化、体験志向を強めていることなどがある。こうした共通認識に基づき、新たな活動を展開しようとするものだ。

六十里越街道関連の事業は従来、西川町と鶴岡市朝日地域が中心になって展開してきた。それぞれに案内標識の設置、石畳の土砂除去作業などを行い、共同でツアーの企画、シンポジウム開催などを重ねてきた。今回は、新たに寒河江市、中山町、山形市と県、学識経験者、観光関連団体、地域活動団体の代表らが入り、六十里越街道地域広域連携委員会と戦略プロジェクトチームを組織した。この街道は山形城下の八日町を起点に鶴岡城下までを結んでおり、今回は三市町エリアを加えて、点在する地域資源の発掘と周遊ルートの確立などを進める。二〇〇九年度はモデルツアーの実施、広域連携祭や広域シンポジウム、連携講座の開催などを予定しているという。

本県と秋田、新潟両県の日本海沿岸の十市町村は先日、「日本海きらきら羽越観光圏推進協議会」を発足させた。新潟県の市町村とは、同県で今年実施のJRのDC（デスティネーションキャンペーン）を前に昨年一緒にプレキャンペーンを行い、秋田県の市町村とは環鳥海エリアで連携を進めてきた実績がある。今回は庄内地域が仲介する形で一体的な情報発信と体験型観光を推進する計画を立て、今月中に観光圏認定に向けた申請も行う。計画では今後五年間、「日本海、山の神々、舟下り、食を通じたおもてなし」をテーマに滞在型観光の確立を目指す。

ほかに仙台市と山形市やその周辺エリアでも広域交流を進めており、昨年の宮城DCでは一部、山寺や最上地域などで連携企画を実施した。このように観光を柱にした広域連携の試みは以前から進めてきたが、最近の特色は滞在型、体験型を意識している点にある。滞在し、体験してもらうには、隣接エリアの方が好都合で、そのエリア特有の歴史や文化に触れる機会も増えるというメリットがある。その意味で会津・米沢、六十里越街道沿道、日本海沿岸などの新たな広域連携は時宜を得たものだ。自然、歴史や文化に食を加えた地域資源をどう展開、活用していくか。新たな地域力が問われている。

河北新報
平成２１年（2009年）２月１７日（火曜日）

山形県内陸部と庄内を結ぶ古道

六十里越街道 活用を

広域連携へ 行動計画策定

東北活性化センター

東北産業活性化センター（仙台市）は今月、山形県内陸部と庄内地域を結ぶ古道「六十里越街道」を、広域連携に活用するプロジェクトに乗り出した。県や沿道五市町、市民団体と協力し、新年度いっぱいをかけ、行動計画をつくる。街道の文化的価値を再認識し、交流人口拡大や産業振興につなげたい考えだ。

計画は「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」と銘打ち、センターによる地域支援事業の一環として取り組む。街道をめぐって自治体や民間組織が個別に取り組む活動をつなげて、広域連携の可能性と、具体的な行動計画を構築していく。

策定作業では、沿道にある出羽三山など重要な歴史資源に加え、山間部の暮らしや農業など、街道に息づく人の営みも掘り起こす。地域に点在する交流素材を集め、具体的な連携施策を立案。プロジェクトの推進組織や地元の受け入れ態勢、情報発信の方法も検討し、報告書にまとめる。

清水慎一JTB常務を委員長とする検討委員会を既に設立しており、地域おこしに取り組む地元市民団体や県などによる戦略プロジェクトチームもつくり、議論を始める。

沿道の山形、鶴岡、寒河江三市、中山、西川両町は事務局として加わるという。

同センターの井上朗プロジェクト振興部長は「魅力的な地域資源を、自治体ごとに分断するのではなく、広域的に連携させ、地域活性化につなげたい」と話した。

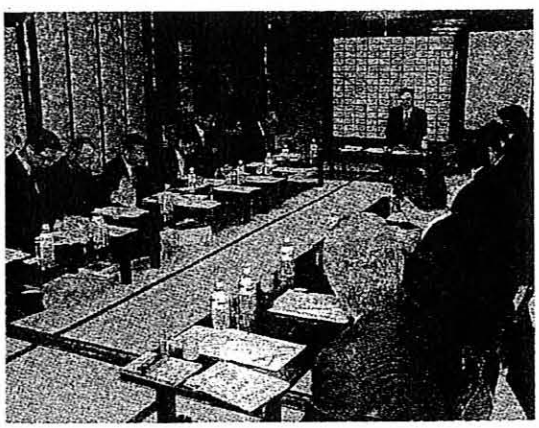
六十里越街道は、山形、鶴岡両市間の約百キロを結ぶ古道。江戸時代は出羽三山の信仰の道、物資輸送の大動脈として栄えた。起源は古く、古代にさかのぼるという説もある。明治以降は廃れ、沿道の地域間の結び付きも弱くなっていた。

3/22 荘内日報

ズームアップ 庄内

沿道市町などがプロジェクト
広域連携で観光PR強化
六十里越街道

鶴岡市から月山山ろくを通り山形市につながる六十里越街道について、文化価値を再認識するとともに、沿道地域の活性化に向けた連携強化を図る「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」が沿道3市2町の関係者によって立ち上げられた。具体的なアクションプランの立案など新年度から取り組みが本格化する。



六十里越街道は、かつて出羽三山への信仰の道、戦国時代には軍路、そして庄内と内陸地方の物流交易の道といった多面的な役割を持ち、県の中央を横断する中核的な道として栄えてきた。街道沿いには宿場や茶屋、番所が建ち、市も開かれるなど「人」「物」「情報」が有機的に結びついて流れていた。だが、明治以降は、道路網の発達や自動車の普及などで次第に古道として位置づけられるようになり、地域との結び付きも希薄化していた。

そうした中、トレッキングや街道歩きが近年ブームとなり、街道筋の旧朝日村（現鶴岡市朝日地域）や西川町では六十里越街道に着目。住民組織などによる古道ルートの調査・発掘・保存整備、活用といった街道を再認識する動きが活発化した。特に朝日地域では、2002年発足の「アルゴディア研究会」が主体となり、六十里越街道のウオーキングマップの作成に始まり、トレッキングや俳句大会などのイベント開催を続けている。それに伴う看板設置や草刈り、枝打ちといった街道整備も進んでいる。

こうした機運を捉えプロジェクトは、さらに広域的視点から街道の魅力を掘り起こし、交流人口の拡大や地域活性化に結び付けようと発案。沿道の鶴岡、山形、寒河江、中山、西川の各市町と県、学識経験者、地域活動団体の代表などが参加する。

東北産業活性化センター（会長・高橋宏明東北電力社長）の支援を受け、清水慎一JTB常務を委員長とする六十里越街道地域広域連携委員会、アルゴディア研究会や県庄内総合支庁などで戦略プロジェクトチームを組織。08、09年度の2カ年で▽沿道住民の街道文化価値の再認識と交流活性化▽沿道地域外からの交流人口拡大による産業振興、地域活性化―を視点とした交流プロモーション指針、アクションプランを策定する。また、09年度にはリーディング事業の実証実験として、仙台圏からのモデルツアー、沿道市町が連携しての六十里越街道まつりなど実験イベントやシンポジウムの開催、講座開講、連絡会議（仮称）設置などに取り組む。

今年2月に山形市内で開かれた第1回検討委員会で、清水会長は「六十里越街道は、最上川の舟運と並んで興深い歴史と文化を持ち、県を横断する軸。現代に生かす方策を議論したい」と期待を込めた。先駆的に取り組んでいる鶴岡市朝日庁舎の伊藤哲哉商工観光主査は「これまでの鶴岡、西川の取り組みをどう広げていくかが課題だった。緩やかな連携だが、新たな展開に向けて強力な枠組みができた。対外的PRにも大きな力になる」と話す。

観光には、地域の歴史や文化、生活、自然、地域との触れ合いなど〝癒やし〟効果が求められている。一方、六十里越街道は、興味を持つ特定層にだけしか認知されていない面も見られる。トイレをはじめとするガイダンス機能・施設の整備は十分とはいえず、ガイドなしでも安心して歩けるシステムづくりが求められている。

鶴岡市では09年度に独鈷茶屋跡と細越峠茶屋跡の2カ所に常設トイレを整備する。伊藤主査は「各エリアでガイドやトイレ整備などの充実、地元の魅力を磨くことが重要。今後は人材確保と育成が急務」とする。

今後は、最低限の整備と並行して訪れた人が六十里越街道に見いだした興味、テーマが満たされるようなソフトの充実、提供が重要となる。プロジェクトの取り組みが、街道の魅力アップにつながることに期待が高まる。

（大倉　裕）

山形新聞
2009年（平成21年）9月17日（木曜日）

六十里越街道 資源や歴史再認識

「歩く会」の参加者募る

21日から

東北芸術工科大文化財保存修復研究センターは、山形と鶴岡を結ぶ六十里越街道の全行程を21日から6日間かけて歩く「六十里越街道を歩く会」の参加者を募集している。地元の人たちと交流しながら街道を歩き、地域資源や歴史を再認識するのが狙い。

鶴岡から山形までを6区間に分け、参加者は希望する区間を歩く。ガイドは地元の関係者らが務める。夜には、県や六十里越街道沿いの自治体、企業、団体などで構成する「交流促進プロジェクト」主催の講座や地域交流会も開かれる。斎藤茂吉や岡本太郎といった著名人と街道のかかわり、紅花文化など地域の歴史を学ぶ。

各日の行程は次の通り。（カッコ内は集合場所）①鶴岡―大網間（荘内神社）②大網―湯殿山間（大日坊）③湯殿山―志津（湯殿山ほてる）④志津―岩根沢（不動院跡）⑤岩根沢―寒河江（岩根沢三山神社）⑥寒河江―山形（寒河江八幡宮）―の6区間。各日とも午前8時に集合する。参加費は無料だが、保険料が必要。18日までに申し込む。講座や地域交流会のみの参加も可能。申し込みは同センター内の事務局023（627）2204。

2009年（平成21年）9月22日（火曜日）

社会総合　山形新聞

六十里越街道

歴史感じ歩く 120キロ

鶴岡―山形 6日かけ魅力再発見

9/22 ㊋

出羽三山信仰の道で、庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の魅力を再発見する「六十里越街道を行く」が21日、鶴岡市で始まった。鶴岡―山形間の約120キロの道のりを6日間かけて歩く企画。初日は荘内神社から大日坊までの約20キロを歩き、地域住民の講話に耳を傾けながら信仰の歴史に思いをはせた。

金峰山のふもとで黄金色に輝く稲穂の道を踏み締める参加者たち　＝鶴岡市

同街道の文化的価値を再認識し、地域活性化に向け関係団体の連携強化を図ることが狙い。県や沿道自治体、企業などによる交流促進プロジェクトと、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業の一環として実施した。12年に1度の出羽三山の丑（うし）歳御縁年に合わせ、街道の歴史研究に取り組む張大右・東北芸術工科大文化財保存修復研究センター准教授が中心となり行程を決めた。

初日は一般市民ら35人が参加し、白装束の衣装をまとった格好で力強く歩を進めた。金峰山のふもとに輝く黄金色の稲穂を見詰めながら、湯殿山への玄関口とされる櫛引地域の「弘法の渡し」、即身仏で知られる朝日地域の注連寺などを目指した。

弘法の渡しは、かつて弘法大師が湯殿山へ参拝の途中、休息したと伝えられている要所。松根地区住民有志らでつくる「松根塾」のメンバーが参加者を出迎えて枝豆のみそ汁を振る舞い、成田勇塾長が「松根は六十里越街道の宿駅として栄えた。歴史に触れながら街道を楽しんでもらいたい」と激励した。

天童市久野本、無職奥山良一さん(60)は「実際に歩きながら史跡を巡ることで、あらためて街道の魅力を感じることができる」と話していた。

一行は、26日までの6日間、山形市の船町渡船場跡など史跡を見学するほか、街道沿いにある西川町水沢小の児童との交流会などを予定している。

鶴岡市と西川町の境界線上にある大岫峠で羽黒山の山伏・星野文紘さんがほら貝を響かせると、厳かな雰囲気に包まれた

人生に通じる深い響き

「六十里越街道120キロ」3日目 鶴岡―西川

峠で真壁仁の詩を朗読

庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の魅力を再発見する目的で、鶴岡―山形間の約120キロを6日間かけて歩く企画「六十里越街道を行く」（東北芸術工科大文化財保存修復研究センター主催）が23日、3日目を迎えた。この日は鶴岡市の湯殿山神社から西川町の月山志津温泉まで約10キロの山道を歩き、文学的視点で街道を見詰め、さらに古くから続く出羽三山信仰の深さに触れた。

県内外から46人が参加。スタート地点の湯殿山神社では、はだしで本宮の中に入り「湯殿参り」を行った。湯がわき出る赤茶色の巨岩「御神体」を前に全員で参拝。霊場の厳かな雰囲気に包まれた。

小雨が降る中、月山志津温泉まで続く狭い山道に入ると、ブナ林が広がり、落ち葉が道を埋める。明治時代まであったとされる薬師小屋跡などを見学し、街道の歴史にも思いをはせながら歩を進めた。

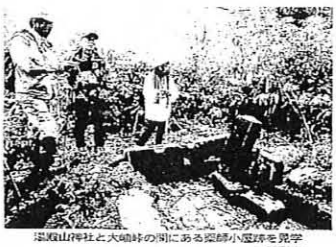
庄内と内陸の境となる標高1140メートルの大岫（おおぐき）峠では、同行した羽黒山の山伏・星野文紘さんと共に、参加者たちは身体堅固や家内安全を湯殿山に向かって祈願。星野さんのほら貝が、山々に響き渡った。さらに同大の張大石（チャン・テーソク）准教授が山形市の詩人・真壁仁の作品「峠」を朗読。張准教授は「真壁さんの峠のイメージは六十里越街道の難所である大岫峠を越えるイメージに重なり合い、人生の峠にも通じる深い響きがある」と語った。

大岫峠からの下り道では、月山の山並みを見ながら歩を進め、参加者たちは汗だくになりながらスタートから約7時間かけて月山志津温泉にたどり着いた。初日から続けて参加していた茂木征一さん（69）＝鶴岡市砂田町＝は「歴史ある街道を一歩一歩踏み締め、先人たちの思いが肌で感じられるようだった」と話していた。

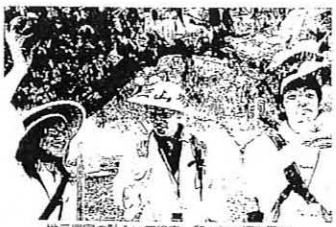
歴史と文化 心の旅

青空の下、風にそよぐススキの間をぬいた ＝酒川町

湯殿山神社に参拝し、大鳥居をバックに歩く ＝鶴岡市



湯殿山神社と大鳥峠の間にある修験小屋跡を見学 ＝鶴岡市

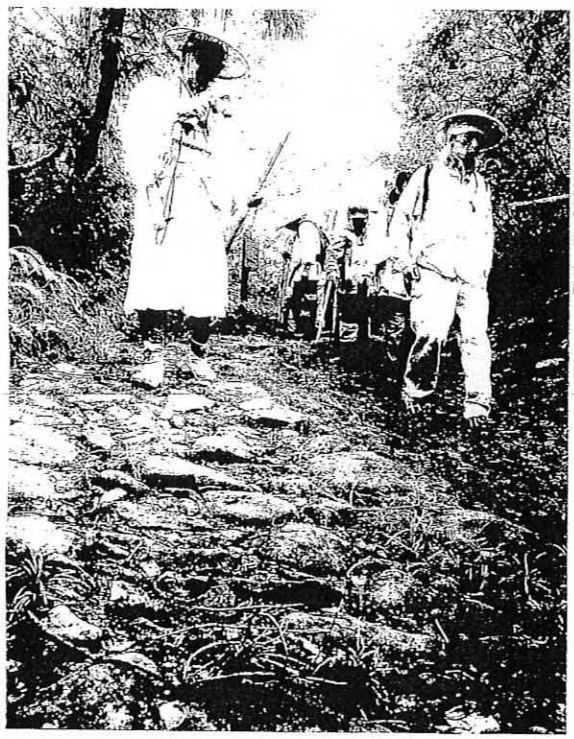


地元農家の計らいで途中、和ナシを摘み取る ＝鶴岡市

六十里越街道を行く

庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の魅力を再発見する目的で、鶴岡～山形間の約120キロを歩く企画「六十里越街道を行く」（東北芸術工科大文化財保存修復研究センター主催）が9月21日から26日まで6日間の日程で行われた。

かつて生活物資の輸送路、また出羽三山の参拝路として栄えた六十里越街道。自らの足で一歩一歩踏み締めた参加者たちは、街道の歴史や文化を学び、石碑の大切さを思い、心の豊かさについても考えた。荒天続に満ちた参加者たちの歩行の様子を写真で振り返る。



弓張平の自然を踏み締めて進む ＝酒川町

六十里越街道の宿場町として栄えた温海温泉で、庄内藩のある多賀屋家住宅を通る ＝鶴岡市

鶴岡市大網の中村集落には、住民たちが道に出て声援を送った ＝鶴岡市

河北新報

2009年（平成21年）10月31日（土曜日）

「六十里越」魅力に触れ

旅行会社関係者ら 商品化へ視察

山形市など3市2町

内陸と庄内を結ぶ六十里越街道のツアー商品化に向けて、旅行代理店らを招いた視察旅行が26日から3日間、街道沿道の山形、中山、寒河江、西川、鶴岡の3市2町を巡るコースで行われた。

県や沿道自治体、企業、団体などで構成する「交流促進プロジェクト」による誘客事業で、東京や仙台の旅行会社などから関係者8人が参加した。西川町や鶴岡市の古道を歩いたほか、寒河江市の慈恩寺や鶴岡市の湯殿山神社、庄内映画村などを巡り、地元ガイドの説明を聞きながらその魅力に触れた。

参加者らは「多面的な資源が多く残っている」「各地で違う表情、素材を持っているのが魅力」などと感想を話し、各社とも「商品化の価値がある。ツアーの企画を前向きに検討したい」とした。同プロジェクトの事務局は「共通の観光資源のために、自治体がいかに垣根を越えて連携するかが誘客の鍵となる」と話している。

旅行代理店の担当者が六十里越街道を歩き、魅力に触れた　＝西川町志津

山形新聞 Yamagata News Online

県内ニュース

六十里越街道、産業振興に活用　沿線首長らが意見交換

2010年02月08日　19:26

六十里越街道広域連携フォーラムが7日、山形市総合福祉センターで開かれた。街道沿線の5市町の首長らが出席し、かつて信仰や物流の道として庄内と内陸を結んだ街道を共通の資源として再認識し、連携して産業振興につなげていくことを確認した。

協働宣言を行った街道沿線の首長ら＝山形市

鶴岡、西川、寒河江、中山、山形の沿線5市町と県、地元団体、観光関連企業などが昨年から展開する「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」の一環。同プロジェクトが策定したアクションプランの中で本年度実施したリーディング事業が報告されたほか、清水慎一JTB常務の基調講演、沿線の自治体首長によるトークセッションが行われた。

トークセッションでは、市川昭男山形市長、大津保信中山町長、那須義行寒河江市副市長、近松捷一西川町長、山本益生鶴岡市副市長の5人が、街道の今日的な意義や広域連携での具体的な活用法について意見交換。「史跡などを掘り起こして今日的な街道振興につなげたい」「互いの地域資源を補完し合うルート作りが重要」などの意見が出された。また、「街道を共通の資源、財産としてとらえ直し、行政区を越えて、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていく」とする協働宣言を行った。

今後は新たに連絡会議を設立し、アクションプランを具現化していく。

http://yamagata-np.jp/news/201002/08/kj_2010020800142.php

六十里越街道 価値を再認識

沿線5市町長ら

六十里越街道広域連携フォーラムが7日、山形市総合福祉センターで開かれた。街道沿線の5市町の首長らが出席し、かつて信仰や物流の道として庄内と内陸を結んだ街道を共通の資源として再認識し、連携して産業振興につなげていくことを確認した。

鶴岡、西川、寒河江、中山、山形の沿線5市町と県、地元団体、観光関連企業などが昨年から展開する「六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト」の一環。同プロジェクトが策定したアクションプランの中で本年度実施したリーディング事業が報告されたほか、清水慎一JTB常務の基調講演、沿線の自治体首長によるトークセッションが行われた。

トークセッションでは、市川昭男山形市長、大津保信中山町長、那須義行寒河江市副市長、近松捷一西川町長、山本益生鶴岡市副市長の5人が、街道の今日的な意義や広域連携での具体的な活用法について意見交換。「史跡などを掘り起こして今日的な街道振興につなげたい」「互いの地域資源を補完し合うルート作りが重要」などの意見が出された。また、「街道を共通の資源、財産としてとらえ直し、行政区を越えて、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていく」とする協働宣言を行った。

今後は新たに連絡会議を設立し、アクションプランを具現化していく。

荘内日報　２０１０年（２月１０日）水曜日

六十里越の協働体構築

鶴岡など5市町 フォーラムで連携を宣言

庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の保全と活用を考える広域連携フォーラムが7日、山形市で開かれ、鶴岡市など街道沿線5市町の首長らが今後の活用などについて意見を交わし、街道を共通の資源、財産ととらえ、広域連携や交流促進を図っていくとする「協働宣言」を採択した。

鶴岡市など街道の沿線自治体で組織する「六十里越街道広域連携・交流促進」準備委員会が、歴史や文化、教育、観光など多面的な資源が数多くある街道の意義と価値を再認識し、地域の活性化につなげる活動に共に取り組んでいこうと企画した。財団法人東北産業活性化センターが共催。沿線自治体の行政関係者や住民など約200人が出席した。

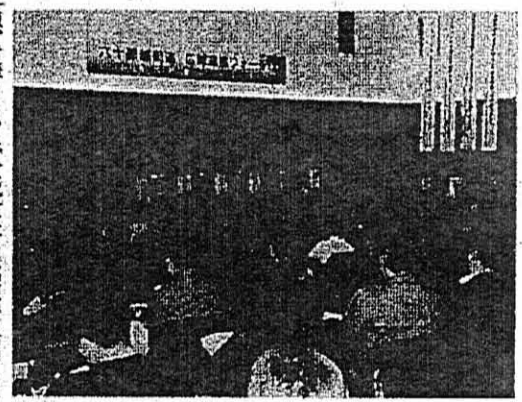
はじめに昨年9月に行われた鶴岡―山形間の街道約120キロを5日間かけて歩いた企画や広域連携講座、モニターツアーなどのリーディング事業の活動が報告された。

続いて、ジェイティービーの清水慎一常務取締役が「広域連携の必然性―六十里越街道を活かした地域づくりとは」のテーマで基調講演した。この中で清水氏は「すべての対象が役割を持つことで関係がつながり、すべて六十里越街道を活用した広域連携や交流について考えたフォーラム……

てが救われることが連携と交流」と述べ、「地域学」と「旅学」が融合することが活性化につながると提案した。

また、鶴岡、山形、寒河江、中山、西川の沿線5市町の首長らによる「沿線自治体首長が語る六十里越街道への期待と展望」と題したトークセッションでは、鶴岡市の山本益生副市長が街道でのトレッキングやガイドの養成講座などの取り組みを紹介し、「地域の住民が参加して文化や自然資源を守りながら活用する取り組みが大切」などと今後の方向性を示した。

最後に、「六十里越街道を共通の資源、財産として捉え直し、共有し、行政区を越えて、沿線住民が互いに手を携えて、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていく」とする協働宣言を採択。新たな価値観の創造と広域文化圏形成を目指し協力していくことを確認した。



〈2010年2月11日〉

2/11

社説　本質に迫る旅の企画

歩いて、触れてみよう

自らの足でたどってみよう。自然や街中を探索し、そして歴史や文化に触れ、交流を深めて精神的な充実を図ろう。こうした志向が年々、強まる傾向にある。最近、設立した山形市など村山地域7市7町による広域観光圏推進協議会、7日に山形市でフォーラムが開催された六十里越街道広域連携・交流促進プロジェクト（山形、中山、寒河江、西川、鶴岡の5市町）でもそれぞれ、歩くこと、精神的に豊かになる企画を重視し、情報を発信していく必要性が強調された。

観光客は、団体から小グループや個人に、物見遊山から体験志向に、発地型から着地型などに変わりつつある。また目的志向の強い旅が人気を集める。こうした流れの中で、自治体の枠を超えた取り組みの必要性が増し、県内でも2県域にまたがった会津・米沢地域観光圏整備推進協議会、庄内地域と秋田県、新潟県など3県の10市町村が一つになった日本海きらきら羽越観光圏推進協議会が発足し、観光庁に「観光圏」の認定を受け、事業費などの助成を受けている。両観光圏は昨年、大河ドラマ「天地人」効果やJRのDC（デスティネーション）効果もあって入り込み客増加を達成した。

村山地域観光圏推進協議会は「観光圏」の認定を目指す。事業の柱となるのが「ココロとカラダが健康になる旅」。エリア内にある泉質の違う温泉、由緒ある神社、寺院による精神文化、豊かな食文化の三つを重点に湯治、ウオーキング、地場産を活用した健康食開発などの展開によって、エリア内で2泊3日以上滞在してもらう仕掛けをつくっていく。

六十里越街道広域連携・交流促進プロジェクトの狙いは、さらに明確だ。まず内陸と庄内を結んだ古道・六十里越街道を歩いてもらう。それを前提に出羽三山の自然、歴史文化、食を堪能できる企画を展開する。東北産業活性化センターの支援を受けた本年度は、広域連携講座開設やモデルツアーの実施のほか広域連携祭や広域連携フォーラムを開催した。15歳になるとお山参りしたという歴史的な事実に基づく「十五参り」、出羽三山参拝が生命の再生と深い関係があったことから2回目の誕生といわれる還暦（60歳）を迎えた人を対象にした「六十の詣で」という具体的な提案などもあった。

六十里越街道に関しては、新年度も沿道5市町が連絡会議を設置してアクションプランを策定し、東北街道会議の誘致を図っていく。また観光圏認定を目指す村山地域観光圏エリアとも重複することから慈恩寺、山寺などとの連携を視野に地域資源の保全と利用を検討していく。その意味で先に開催された広域連携フォーラムで5市町のトップが認識を深め、今後のあり方について話し合い、街道を共通の資源、財産として手を携え、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていくという「協働宣言」の実践に期待したい。

本県は歴史、文化資源に恵まれている。駆け足で巡るだけでなく時間を掛けて本質に迫ってもらう旅の企画は、本県の精神文化の理解、ファンの拡大にもつながる。そのためにも歩いて直接、自然、史跡、歴史的建造物、伝統芸能などに触れる企画を増やしたい。

2010年(平成22年)2月12日　金曜日　朝日　山形　山形　12版▲

出羽三山「六十里越街道」

古道の魅力 再発信

出羽三山の山岳信仰の道として栄えた古道「六十里越街道」の魅力を再発見し、地域おこしに生かそうという動きが、沿道の山形、寒河江、鶴岡、中山、西川の3市2町で高まっている。「六十里越街道」を冠としたイベント開催や、史跡を巡る旅行の受け入れ態勢の整備などに連携して取り組んでいく。

（南日慶子）

沿道5市町 整備連携

5市町が東北芸工大と連携し、昨年9月に行った六十里越街道の実地調査＝西川町提供

信仰と史跡 巡る旅提案

5市町は山形市内で7日、「六十里越街道広域連携フォーラム」を開催。首長たちが〈（六十里越街道の）歴史と存在を顧みることは時流が大きく変遷する現代において新たな羅針盤になる〉〈沿線住民が互いに手を携えて、歴史と文化と産業振興の協働体を築いていく〉と宣言した。

古代からあったとされる街道は、鶴岡市と山形市を結び、塩などの物流交流の道として、また山岳信仰の参拝者が往来する道として栄えた。電車や車が現れ、利用が広がると、街道は廃れたが、沿道には山岳信仰にかかわる神社や宿坊、温泉、茶屋、鶴岡市田麦俣集落の多層民家など昔ながらの景色が残った。

5市町はこの街道を生かそうと、2008年度から東北産業活性化センターの支援を受け、街道の魅力を調査・研究した。昨年9月には東北芸術工科大の張大石准教授らと6日間かけて街道を歩き、各地で日本の原風景を考える地域交流会も開催した。旅行会社の担当者を招いたツアーも実施し、旅行商品として評価を得たという。

このプロジェクトは今年度で終わるが、5市町は新年度以降、担当者を集めた「六十里越街道地域連絡準備会議」（仮称）を設置し、活動を継続する方針だ。旅行会社が街道を巡る旅行商品作りを進めており、受け入れ態勢を整備していく。5市町の酒とさかなをPRする「六十里越SAKE街道」などのイベントも打ち、活性化を図る考えだ。

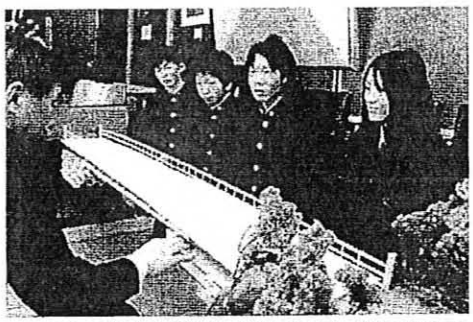
プロジェクト事務局で西川町総務企画課の後藤忠勝さんは「観光ありきではなく、ここに住む私たちが自分たちの生活、文化の価値を大事にすることが、地域内外との交流や観光客の誘致につながるようにしたい」と話している。

山形新聞 Yamagata News Online

江戸時代の臥龍橋、復元　寒河江工高生が模型を市に贈る

2010年02月24日　12:15

寒河江市の寒河江工業高（吉田敏明校長）の情報技術科3年生が、同市白岩の寒河江川に架かる臥龍橋の江戸時代の姿を復元した模型を作った。歴史遺産を市民に知ってもらおうと、市からの依頼を受けて制作したもので、23日、市に寄贈した。3月1日から同市のフローラSAGAEに展示される。



江戸時代に造られた臥龍橋の模型を制作し、寒河江市に寄贈した寒河江工業高の生徒たち＝寒河江市役所

臥龍橋は1827（文政10）年に架けられた木橋で、水流が激しく谷が深い場所に架けたため橋脚がない刎（はね）橋という造り。両岸の岩盤に開けた穴に木材をさし込んで橋げたを支えるという構造で、江戸時代の土木技術の集大成とされる。庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の一部として出羽三山信仰の参拝客が往来した。現在のコンクリート造りの橋は4代目に当たる。

同市は、六十里越街道の文化的価値を再認識し、地域活性化を図る「広域連携・交流促進プロジェクト」に、ほかの自治体などと共に参加している。寒河江工高が小学生を対象に橋の模型作り教室を開催していることから、その技術でプロジェクトに協力してもらおうと臥龍橋の模型作りを依頼。同校が快諾し、3年の安食一成さん、石子広樹さん、森智浩さん、福井睦美さんの4人が課題研究として昨年夏から制作に取り組んだ。

橋の長さが24間（約43.6メートル）という簡略な設計図が現存するのみだったため、生徒たちはまず詳細な設計図を作成。同じ刎橋の猿橋（山梨県）を参考にパソコンで平面図を作って3次元化した。これを基に実際の20分の1の大きさで木材を切断して組み立て、長さ約2メートル70センチ、高さ約50センチの橋を完成させた。

この日、市役所を訪れた生徒たちは佐藤洋樹市長に制作の経緯や工程、苦労を紹介した。福井さんは「普段の授業ではパソコンを使うことが多く、のこぎりや金づちの扱いが難しかった。模型を見て地域の歴史に興味を持ってもらえたらいい」と話していた。市は模型の展示のほか、生徒の研究内容を紹介する看板を現在の臥龍橋近くに設置する予定。